
バカとカオスと原作ブレイク

零崎哀識

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとカオスと原作ブレイク

【NNコード】

N9813N

【作者名】

零崎哀識

【あらすじ】

原作知識を持つて いる少年、哀川 零が文月学園に転校して きた。

零が目指すのは、原作ブレイク。

始めの方駄文過ぎです。

ユーザーでない方も感想を書くことが出来るので感想をお願いします。

転校（前書き）

ヒロインが決まってません。

次から選んで感想とかで教えて下さい。

木下	木下	秀吉
工藤	優子	
高橋	愛子	
洋子		
オリキヤラ		

転校

「イージが文月学園か。まさか、本当に存在するなんてな。それじゃあ、面白おかしく楽しめますか。」

この俺、哀川 零はラノベの世界のはずの文月学園の校門の前にいる。

何故ここに俺がいるかといふと、一ヶ月前に学園…………あの糞ばばあにデータ管理者としてスカウトされた。その時に文月学園と聞いて驚いたが、高得点者の一覧を見たら原作キャラの名前がいくつかあった。

そこで俺はいくつか条件を付けてこの学園に転校してきた。

「おい、遅刻だぞ！」

人が回想してる時だれだ。

そこには、ゴリラが立っていた。

「動物園に連れておいで、補習室に行きたいのか。…………ああ、鉄人か。」

「やはり、補習室行き……お前、見ない顔だな。」

「ああ、俺は転校してきた哀川 零だ。」

「そりゃ、お前が物好きか。よつによつてあのクラスを選ぶなんて。

「

「その代わりに権限をいくつかもらつたからな。」

「まあ、いい。わかっているなら早く行け。遅刻したら本当に補習室に連れて行くぞ。」

「はーい、原作介入と行きますか。

Fクラス

Fクラス（前書き）

バカテスト 理解

調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金例を一つ上げなさい。

姫路瑞希の解答

『問題点……マグネシウムは火にかけると激しく酸素と反応するため危険であるという点

合金の例……ジュラルミニン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』ではダメという引っ掛け問題なんですが、姫路さんは引っ掛けませんでしたね。

土屋康太の解答

『問題点……ガス代を払つていなかつたこと。』

教師のコメント

そこは問題点じゃありません。

吉井明久の解答

『合金の例……未来合金（すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いと言われても。

哀川零の解答

『問題点……料理を作ったのが姫路だったので、鍋が溶けた。』

教師のコメント

姫路さんに失礼だと思います。

Fクラス

「やつと着いたか。」

Fクラスを探すのに時間がかかった。

普通、先生の案内があるよな。

Fクラスの扉の前には、ピンクの髪の女子が立っていた。

「ああ、姫路か。てつことは。」

『ダーダーリン』

の太い合唱が聞こえてきた。
オエ、気持ち悪くなつてきた。

姫路も苦笑している。

おつと、ここで姫路に話かけてみるか。

「おー、悪いんだがーーーでFクラスはあつてーいるか?」

「えつ、あ、はいーーーがFクラスですけど…………。」

「そうか、礼を言うよ。

転校してきたばっかだからな。道が分からなくてな。」

「そうなんですか。えつと、姫路 瑞希です。」

「俺は哀川 零だ。それじゃ、教室に入るか。」

「はい。」

ガラガラガラ

「失礼します。」

明久サイド

「失礼します。」

「遅れて、すみません。」

僕の自己紹介が終わつた時に、一人教室に入つてきた。

『えつ。』

一人は姫路さんでもう一人は誰だろ。

その二人を見て、担任の先生が話しかけた。

「ちょうど良かつたです。今、自己紹介しているところなんです。姫路さん達もしてください。」

「は、はい！あの姫路 瑞希とおっしゃいます。よろしくお願ひします。」

「

「はい！質問です。」

自己紹介を終えた、一人が言った。

「あ、は、はい。なんですか？」

「なんで、ここにいるんですか？」

聞きようによつては、不快な質問だが、彼女は本来、学年主席でFクラスにいるはずのないのだから。

「その振り分け試験中に熱を出してしまって.....。」

『そういうえば、俺も熱の問題が出たせいでFクラスに』

『ああ、化学だろ。あれは難しかった。』

『俺は弟が事故に遭つたと聞いて、実力を出し切れなくて。』

『黙れ、一人っ子。』

『前の晩、彼女が寝させてくれなくて。』

『今年一番の大嘘がありがとう。』

『バカばかりだな。』

転校生が言った。

僕もやつと思つよ。

「で、では、一年間よろしくお願いします。」

「そろそろいいか。学園長もとこ糞^{まく}あに雇われて、転校してき
た袁川 零だ。よろしく頼む。」

転校生か、だから、誰か分からなかつたのか。でも、雇われたって
一体。

袁川 零サイド

原作通り、明久達が教室の外に出た。

「ちよつといいかの。」

おつと、隣の席になつた秀吉が話しかけてきた。

「ああ、いいぞ。えつと……。」

「わしは、木下 秀吉じや。よく間違えられるのじやが男じや。」

「ああ、分かつているぞ。」

ガシツ

秀吉が抱きついてきた。

「初めてじゃ、わしを一目で男と見抜いたのはー！」

「分かったから、早くどけー！クラスの連中がシャーペンを構えているー。」

「すまないのじゃ。こんなに嬉しいことは久しぶりじゃからの。」「そうか、まあ、いい。」

「坂本くん、君が自己紹介最後の一人ですよ。」

「了解。」

担任が言った。って、もうそんなに進んでたのか。

「坂本くんはFクラスのクラス代表でしたよね？」

雄一が頷く。

「俺がFクラス代表の坂本雄一だ。俺のことは代表でも、坂本でも好きなように呼んでくれ。」

「じゃあ、ダーリン。」

「悪いがそれは辞めてくれ。」

「ワガママだな。しあがない、名前で呼ぶか。」

「俺が悪いのか！？」

「そうだ。霧島雄一が悪い。」

「俺の名字は坂本だ！つーか、お前は転校生なのになんでそのことを知っている！？」

「雄一、話が脱線しているぞ。」

「お前のせいだろ？！」

雄一をおちょくるのもそろそろ辞めるか。

「はー、話もそれだが、みんなに問いたい。」

カビ臭い教室

古く汚れた座布団

薄汚れたちやぶ台

「Aクラスは冷暖房完備のうえに、座席がリクライニングシートらしいが、不満はないか？」

『大有りじゃ——！』

Fクラス全員の魂の叫びだな。

「だろう？俺もこの境遇はおおいに不満だ。代表として問題意識を抱えている。」

『そりだそりだ！』

『いくら学費が安いからといって、この設備あんまりすぎる。改善を要求する。』

『Aクラスだつて同じ学費だろ？あまりに差が大き過ぎるー。』

ダムに穴を開けたときみたいに不満が出てくるな。
自分達の自業自得でこのクラスになつたのにな。

「みんなの不満はもつともだ。そこで、これは代表としての提案なんだが

FクラスはAクラスに試験戦争を仕掛けようと思ひ。

戦争の始まりだな。
原作を壊しても、Aクラスに勝つか。

まあ、原作ブレイクはやううとしてたんだけどな。

Fクラス（後書き）

更新が遅めです。

Fクラス戦力（前書き）

バカテスト 国語

以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『（1）得意なことでも失敗してしまうこと』
- 『（2）悪いことがあつたのに更に悪いことが起きる』との喻え

姫路瑞希

- 『（1）弘法も筆の誤り』
- 『（2）泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも（1）なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』

（2）なら『踏んだり蹴つたり』や『弱り田に祟り田』等がありますね。

土屋康太

- 『（1）弘法の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね。

吉井明久

- 『（2）泣きつ面蹴つたり』

教師のコメント

君は鬼ですか！？

哀川零

- 『（1）猿を木から突きおとす』
- 『（2）泣きつ面蹴つたり殴つたり潰したりバラしたりきつたり e
t c』

教師のコメント

鬼より酷いですね！？

（2）は裏面までびっしり書いて

Fクラス戦力

『勝てる訳がない。』

『これ以上、設備を落とされるなんて嫌だ！』

『姫路さんがいたら、もう何もいらない。』

『誰だ！？姫路にラブコールん送った、最後の奴！

「そんなことない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる。」

随分と大きく出たな。

まあ、俺が勝たせてやるがな。

『何をバカなことを！』

『出来る訳がないだろ？！』

『なんの根拠があつてそんなことを！』

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことの出来る要素が揃っている。それを今から証明してやる。」

さあ、どこまでバカ共を掌握するかな。
原作で知っているんだがな。

「おい康太。畠に顔を着けて姫路のスカートを覗いてないで前に来
い。」

「…………（ブンブン）」

「は、はわ！」

あんだけ、堂々覗いておいて、普通否定するか？
さすがムツツリー二つてところか。

つーか、気付けよ姫路。

「土屋康太。こいつがあの有名な寡黙なる性職者だ。^{ムツツリーハシコー}」

「…………！（ブンブン）」

『ムツツリーだと……』

『バカな。奴がそうだとでもいうのか…』

『だが見ろ。あそこまで明らかに覗きの証拠をいまだに隠そうとしているぞ。』

『ああ、ムツツリに恥じない姿だ。』

常人は、恥じる姿だがな。

「？？？」

姫路が頭の上に？が浮かんでいるが、名前の由来は教えなくていいよな。

「姫路のことは説明するまでもないだろ？。皆もその力はよく知つているはずだ。」

「えつ？わ、私ですか？」

「ああ、うちの主戦力だ。期待しているぞ。」

『そりゃ。俺達には姫路さんがいるんだつた。』

『彼女なら、Aクラスにも引けを取らない。』

『ああ、彼女さえいれば何もいらない。』

本当に誰だ？さつきから姫路にラブコール送ってる奴。

「木下秀吉だつていう。」

「呼ばれたから、行つてくれるのじよ。や。』

「おひ、行つてこい。」

『おおー。』

『演劇部ホープの。』

『ああ、あいつ確か木下優子の』

「当然俺も全力を尽くす。」

『確かに何だかやつとくれそな奴だな。』

『小学校の頃、神童と呼ばれてなかつたか。』

『でことせ、Aクラスレベルが一人もいるつてことか？』

今はただのバカだがな。

「それに、吉井明久だっている。」

シン……

凄い一気にテンションが下がった。

「ちょっと雄一ー、ピうしてそこで僕の名前を呼ぶのさー!まったくそんな必要ないよね?せっかく上がってきた士気に下がりかけてるしつて、なんで僕を睨むのー?十氣が下がったのは僕のせいじゃないからね!」

「さつだぞー!学年ーいや、学園ーのバカを呼んだ雄一が悪いぞー!」

「零ー!僕をフォローしているふりをして、けなしているなー!」

「いや、普通にけなしているが。」

「なんだと、このヤローー表に出るー!」

「お前ら落ち着け。そうか、知らなーなら教えてやる。ここ二つの肩書きは『観察処分者』だ。」

『それって、バカの代名詞じゃなかつたつけ?』

「ち、違つよ。ちょっとお茶目な『だから、言つただひつ学園ーのバカだと。』16歳に、つて、さつきから何なんだよ。零は。」

『そうだ、バカの代名詞だ。』

「バカ雄一一お前も肯定するな！」

明久が姫路に『観察処分者』について説明している。

「とにかくだ。俺達の力を証明として、まずはロクラスを征服しようと思う。」

あんなテンションだったのに、無理矢理戻す氣か？

『皆、この境遇におおいに不満だろ？』

『当然だ！』

戻つただと！？

どれだけバカなんだこのクラス。

「ならば全員筆を取り。出陣の準備だ！」

『おお――――――』

「俺達に必要なのはちやぶ合じやない！Aクラスのシステムテスクだ！」

『うおお――――――』

「お、おおー。」

姫路も雰囲気に圧されて手を上げている。

「明久には、ロクラスへの宣戦布告の使者のなつてもりつ。無事大

役を果たせ。」

「まあ、いい。お前の成績を教えてくれ。作戦を練るためにな。」

「ちょっと待つてくれ。今、紙に書く。」

俺は自分の成績を紙に書く。

「ほりよ。明久を拾つてくれ。」

俺も教室を出る。

「おつ、行つてこい。…………なんだこの点数はー?下手したらAクラス並みだぞ。でも、バランスが悪過ぎる。」

△クラス戦前の昼休み（前書き）

バカテスト

英語

次の文を訳しなさい

『This is the bookshelf that my grandmother had used regularly.』

姫路瑞希

『これは私の祖母が愛用していた本棚です。』

教師のコメント

『正解です。きちんと勉強してますね。』

土屋康太

『これは』

教師のコメント

『訳せたのはThisだけですか。』

吉井明久

『（火星語です。）』

教師のコメント

『出来れば地球上の文字でお願いします。』

哀川零

『俺、今鎌国中です。』

教師の「メント

『早く開国してください。』

』

Dクラス戦前の昼休み

明久「騙された————！」

明久をDクラスから拾つてFクラスに戻ると明久が雄一に向かつて叫んだ。

あんなんで騙されるお前が悪い。俺も騙したんだがな。

雄一「やはり、そう来たか。」

明久「やはりってなんだよ！使者への暴行は予想通りだつたんじゃないか！零が来てくれなかつたら今頃どうなつていたか。」

雄一「それくらい予想出来なくて、代表が勤まるか。第一、零も騙したじやないか。」

明久「少しは悪びれるよー零が言つてたことは正論だし、助けてくれたからいいんだよ。」

明久「スルーするな。」

零「いかにも、俺の点数だが。」

雄一「Aクラス並みだぞ。なんでここにいるんだ？」

零「学園長もとい糞ばあとの交渉で、Fクラスに行く代わりにくつか権限をもらつたんだよ。」

雄二「権限つてなんだ？」

零「後で教えてやる。」

雄二「分かった。Dクラス戦はお前は出さないぞ。」

零「端からそのつもりだ。」

おっと、明久がのたうち回っている。

雄二「おい、そんなことより、今からミーティング行うぞ」

そんなことがあり、屋上に向かった。移動中、明久、島田、ムツツリーニが話していたが、ムツツリーニがドイツ語を知っているので、驚いていた。俺も『折檻』なら分かつたぞ。だって一般教育つしょ。

屋上にて

雄二「じゃあ作戦会議を始めよつか。明久しつかり時間を伝えてきたか。」

明久「あ、うん。今日の午後から開戦と伝えてきたよ。」

雄二「じゃあ、先に昼食だな。明久、今日くらいまともな飯食えよ。」

「

明久「そう思うのならパンくらいおこづてくれると嬉しいんだけど。」

「

姫路「え？吉井くんって、お昼食べない人なんですか？」

明久「いや、一応食べているよ。」

雄二「あれは、食べていると言えるのか？」

明久「何が言いたいんだよ雄二。」

雄二「だって、お前の主食、水と塩だろ。」

明久「ちゃんと砂糖だって食べてるよ。」

零「たいして変わらんわ！」

姫路「あの吉井くん、水と塩と砂糖つて、食べるとは言いませんよ。」

「

秀吉「舐めるが正しい表現じゃの。」

明久「し、仕送りが少ないんだよ。」

雄二「食費まで遊び代に使うお腹が悪い。」

零「はー明久、3回まわってワンと言つたら弁」（クルクルクル）
ワン「当を……お前にプライドは無いのか？」

明久「プライドじや、お腹は膨れない。」

零「分かつたよ。分けてやるよ。」

まあ、明久に餌付けするために多めに作つてきたんだがな。

俺は重箱を開く。

零「今日は中華のフルコースを作つてみた。」

全員『は（ええ）————！？』

姫路「すぐ美味しそうです。」

美波「これ本当に作つたの？」

秀吉「店で売つているのみたいじや。」

康太「…………俺も欲しい。」

雄二「なんなんだこれ！？」

零「だから、中華のフルコースだつて。明久は何が欲しい？」

明久「なんでもいいよ！」

零「ほらよ。」

明久に中華まんを投げる。

明久「冷えてるのに凄く美味しい。」

零「たく、今回だけだからな。他の奴等も好きにつまんでいいぞ。」

雄一「いいのか?」この酢豚凄く美味しいぞ。」

康太「…………美味。」

秀吉「こんなに美味しい物、久しぶりに食べたのじゃ。」

零「まあ、五つ星のレストランでも出したことがありからな。おい、そこの二人はどうした。まさか、口に合わなかつたのか?」

女性人、二人が箸の動きが止まっている。

美波「確かに凄く美味しいんだけどねー…………。」

姫路「はい、凄く美味しいんですけど…………。」

姫路・美波（もの凄く悔しい。）

明久「これから毎日、こんなの食べたいな。」

零「食費を俺の払うなら週一で作つてきてやるよ。」

秀吉「儂が払うのじや。」

康太「…………俺も。」

雄一「結構、高い物使つてんじやないか?」

零「いや、普通の食材だぞ。だが、明久が参加しないなら作らんぞ。」

雄二「絶対に明久の生活を変えてみせる。」

明久「なんで、そういう事になるの…？」

康太「明久には、生活費がなくなりそうなら、何も売らない。」

明久「酷いよ。ムツツツリーーー！」

零「そうか。頑張れよ。明日はやることがあるから作れないがな。」

明久「みんな酷いよ。でも、ありがとう零久しぶりに固形物を食べたよ。」

姫路「そつなんですか！なら、吉井くん明日は私が作ってあげます。」

明久「ゑ。」

零「明久焦りすぎて、字が古いぞ。」

明久「本当にいいの？」

姫路「はい、明日の昼でよければ、哀川くんには届ると思いますが。」

明久「全然いいよ！」

雄二「良かつたな。愛妻弁当だぞ。」

姫路「愛妻弁当だなんて。」

康太「…………殺したい程妬ましい。」

美波「ふーん、瑞希つて随分優しいんだね。“吉井だけ”に作つてくるなんて。」

凄い嫉妬だな。島田、それは吉井が好きつて、言つてゐるよつたもんだぞ。本人以外は気付いてゐるぞ。

姫路「あ、いえ、皆さんにも。」

雄二「えつ、俺達にもいいのか？」

姫路「はい、嫌じやなかつたら。」

秀吉「それは楽しみじゃな。」

康太「…………（「ク「ク」）」

美波「お手並み拝見ね。」

姫路の実力なら、被害者が増えるだけなんだがな。

明久「ありがとう姫路さん。僕、初めて会う前から君のこと好き「明久、今振られると明日の弁当がなくなるぞ。」…………にしたいと思つてました。」

秀吉「明久、それでは欲望をカミングアウトしたただの変態じゃ。」

雄二「お前はたまに、俺の想像を超えた人間になる。」

零「他に回避の方法は無かつたのか？それに、『初めて会つた時から』だらうが。」

姫路が全く引いてないし、それに、なにその計画通りつて顔。

明久「うう、だつてお弁当が。」

零「悪いな。俺は明日の昼は戦争のためにやりたいことがあるからな。」

雄二「何をする気だ？」

零「確實に有益になる」とか。まあ、俺に任しな。」

雄一「そつか。それなら、弁当は俺達だけでいただきか。」

零「明日のためにも、まずは今日のことだろ。」

雄一「ああ、そうだな。それなら本題に入ろう。」

秀吉「一つ気になつっていたんじやが、どうしてDクラスなんじや？段階を踏んでEクラスだらうし、勝負に出るならAクラスじゃし。」

雄一「理由は簡単だ。戦つまでもない相手だからだ。」

明久「え？だつて僕達よつクラスは上だよ。」

雄一「振り分け試験の時点では確かに向こうが強かつたかもしけないが、実際のところは違つ。周りの面子をよく見てみる。」

明久「えーっと…………美少女が一人とバカが一人とムツツリと料理人が一人ずつだね。」

雄二「誰が美少女だ！」

明久「ええっ！雄二が美少女に反応するのー！」

康太「…………（ぼつ）」

明久「ムツツリーーまでー？」

零「お前にバカ呼ばわりされると思わなかつた。飯までくれてやつたのにな。」

明久「零に感謝してるから！そんなこと思つてないしーどうしよう、僕だけじゃ突つ込みきれない！」

秀吉「まあまあ、落ち着くのじや、代表にムツツリーーに零。」

零「秀吉、お前は美少女扱いされてることに気付け。」

雄二「ま、要するにだ。姫路に問題がなく、零がいる今、正面からやり合つてもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上はEクラスとやり合つても意味がないってことだ。」

美波「それなら、Dクラスとは正面からぶつかつたら厳しいの？」

雄二「ああ、確實に勝てるとは言えないな。」

明久「だつたら、最初から目標のAクラスに挑もうよ。」

雄二「初戦だし景気付けにしたいんだよ。それに打倒Aクラスに必要なプロセスなんだよ。」

姫路「あ、あの。」

雄二「どうしたんだ姫路?」

姫路「え、えつと。坂本くんと吉井くんは前から試合戦争をじょいと話しあっていたんですか?」

雄二「それはな、明久が大好きな姫路「それは、そうと。」

明久、そこまでばれたくないのか。

明久「さつきの話、Dクラスに勝たないと意味がないよ。」

雄二「お前達が協力してくれるなら勝てるさ。いいかお前達、俺達のクラスは

最強だ。」

美波「いいわね。面白そうじゃない?」

秀吉「そうじやな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの。」

康太「…………（グッ）」

姫路「が、頑張りましょ。」

零「100パーセント勝てるよ」とさすがに。」「

雄一「そつか。それじゃ、作戦を説明しよう。」

「うして、俺達は作戦に耳を傾けた。

Dクラス戦（前書き）

バカテスト数学

(1) $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在するXの値を答えなさい。

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのはどれか、?～?の中から選びなさい。

$$? \sin A + \cos B$$

$$? \sin A - \cos B$$

$$? \sin A \cos B$$

$$? \sin A \cos B + \cos A \sin B$$

姫路瑞希

$$(1) X = / 6$$

$$(2) ?$$

教師のコメント

そいですね。角度を『。』でなく『』で書いてありますし、完璧です。

土屋康太

$$(1) X = わよそ 3$$

教師のコメント

およそをつけて『わよそ』とかしたい気持ちも分かりますが、これでは回答に近くても点数はあげられません。

吉井明久

(2) オよね?

教師のコメント

先生は今までたくさんの生徒を見てきましたが、選択問題でおよねをつけた生徒は君が初めてです。

哀川零

(1) $X = 3 \cdot 141516 \dots$ (裏面まで円周率を書いてある)
.....無理だ書ききれない。

(2) ???.?のどれか。

教師のコメント

円周率を全て書こうとしないで、『』で構いません。それと、()
2) はあること思います。

Dクラス戦

うん。始まつたな。

俺は今、教室でコンピューターを使って学校の様子を見ている。

仕事のデータ管理でカメラの内容も見れるからな。
職権乱用。

で、戦況はど。

鉄人『さあ、来い！負け犬が！』

ザコ『て、鉄人！？い、嫌だ補習室は嫌なんだ！』

鉄人『黙れ！捕虜は全員この戦争が終わるまで補習室で特別講義だ！終戦まで何時間かかるか分からんが、たっぷりと指導してやるからな。』

ザコ『た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐えられない！』

鉄人『拷問？そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬する人は二宮金治郎、といった理想的な生徒に仕上げてやるわ。』

前から思っていたんだが、それは洗脳じゃないか？

それより、

零「雄一、多分明久達逃げるぞ。」

雄一「ん、それじゃあ。横溝、伝達してー。『逃げたら殺す』と。

「

零「俺からも『女装した写真をばらまく』と。」

横溝「了解！」

雄一「なんで、そんな物持つてんだ？」

零「ムツツリー＝商会の会計になつた。」

雄一「なるほど。」

明久『総員突撃！』

零「バカは単純でいいな。」

雄一「同感だ。」

零「雄一、悪い情報だ。」

雄一「なんだ？」

零「お前が使おうとしているAクラス戦の作戦は失敗するぞ。」

雄一「な、何！？」
「うつ事だ！第一、お前に作戦が分かっているのか？」

零「分かつてゐるよ。『無事故の改新』だろ。」

雄一「なんでお前がその作戦を知つてゐるんだ！？」

零「俺は大抵のことは分かつてゐるぞ。お前が変わろうと思つた時のこともな、だがな、それじやあつまらないから、変えようと思つてゐる。」

雄一「お前は何者なんだ？」

零「俺か？俺は、

暇人

遊び人、

請負人、

詐欺師

偽善者

大泥棒

欠陥製品、

人間失格、

まあ、ただの技術者だ。このことは内密にしてくれ。」

雄一「わ、分かつた。（今、こいつの空気が変わった）」

零「そうか、良かつた。それでAクラス戦はお前の成績の悪さで負けるぞ。」

雄一「何？小学生レベルの問題だぞ。いくらなんでもそれはないだろ。こう見えて元神童だぞ。」

零「『元』だろ。じゃあ、1919年には何があつた？」

雄一「…………くつ。」

零「やつぱりな。ちなみに三・一独立運動だ。分かつたら勉強しろ。」

雄一「ちつ、分かったよ。」

須川「代表！吉井が教師達に偽情報を流してほしいと言っているんだが、どういうのを流そうか？」

零「ちよつといいな。どうする？』

雄一「それで、どうするかな。」

零「面白い案があるんだが、耳を貸せ。」

零「――――。」

雄一「確かに面白い案だな。須川、今から俺が言つことをそのまま流してくれ。」

数分後

『船越先生、船越先生。』
『ピンポンパンポン！』
『連絡致します。』

『吉井明久が体育館裏で待っています。』

ククククク

『生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそ�です。』

四

「ふつはははは！」

このシーンは絶対に必要だよな。隣で雄一も笑ってるしな。

吉井『須川――――――！』

須川ガンバ

雄一「そろそろ俺達も動くぞ。」

零「明久達を拾つてくるのか。」

雄一「ああ、戦死する前に拾つてこないとな。」

雄一達が出ていく。

そのまた数分後

明久達が戻ってきた。

雄一「明久良くやつた。」

珍しいな明久を褒めるなんて

明久「校内放送、聞こえた?」

雄一「ああ、バツチリな。」

明久「それよりも、須川君がどこにいるか知らない?」

雄一「もう少ししたら帰つてくるんじゃないかな。」

零「その包丁はどうから持つてきたんだ?」

明久「これは家庭科室から持つてきたんだ。やれる! 今の僕ならやれる!」

零「いや、やるなよ。」

雄一「ちなみにだが……あの放送を流したのは零だ。」

明久「シャア――!」

零「あぶねつ! 雄一なんて」と言いやがる。雄一がアレンジしたんだろうが!」

明久「絶対に一人の息の根を止める。」

零・雄一「あつ 船越先生。」

ドン！ガラガラバタン！

凄いな。こいつの行動力。

零「船越先生のことは嘘だ。」

雄一「何を言ってやがる！」

零「明久、またただで弁当作つてやるから。今回の俺のことは水に流せ。」

ダッ！

雄一が逃げた。

明久「零、お弁当のこと約束だよ。待て雄一――！」

明久も出ていく。
流石、バカは凄く使い安いな。

数分後

『勝者Fクラス』

さて、戦後対談で権利を使いますか。

やつと、原作を崩壊させられる。

Dクラス戦（後書き）

更新が凄く遅くてすいません。
次回、修復不可能になるくらいまで壊します。

Dクラス戦後対談（前書き）

更新が果てしなく遅れてしまつてしまません。
更新したのでどうか読んでくれると嬉しいです。

バカテスト 物理

次の（　）に入る言葉を書き入れなさい。
『光は波であつて、（　）である。』

姫路 瑞希
(粒子)

教師のコメント
良く出来ました。

土屋 康太
(よせて帰すの)

教師のコメント

君の答えは、いつも先生の度肝を抜きます。

吉井 明久

(悪者の武器)

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

哀川 零

(中一病が闇属性と一緒に好む属性)

教師のコメント

何ですか！？その解説は。

Dクラス戦後対談

雄一「やつと来たか。戦後対談をお前が来るまで待てとは、どういうことだ？」

零「悪いな、雄一。今後のことを有利に進めるために必要なことだからな。話を始めていいぞ。」

雄一「分かった。平賀、Fクラスとのクラス設備交換をしなくてもいいぞ。」

平賀「それは本当か！？」

雄一「ああ、こちらの条件をのめばな。」

平賀「条件？一応聞かせてもらおう。」

雄一「俺が指示をしたら、あれを動かなくしてほしい。」

零「そこに条件を追加してもらう。おい、清水、玉野。」

俺は途中で拾ってきた、清水と玉野を呼ぶ。

零「Jの一人をFクラスの一人と交換してもらう。」

平賀「どういうことだ！？」

雄一「そんなこと出来るのか！？」

零「ああ、これが俺のFクラスにきた代償の最大の特権だ。まあ、本人達に了承を得ないといけないがな。」

清水「美春達はまだ、了承してませんよ。」

零「今から了承させるんだよ。清水、もしFクラスに来たら島田と一緒にいられる時間が増えるぞ。まあ、制限は付けさせてもりつがな。」

清水「お姉様と一緒に……。分かりました了承します。」

零「じゃあ、これにサインしておけ。」

清水に条件を書いた契約書を渡す。

零「さて、玉野、お前には、これをやろう。」

玉野「写真?なんの写真?何この娘、可愛過ぎる。」

雄一「おい、零。何の写真を渡したんだ?」

零「明久の女装写真だ。」

雄一「そんなのでいいのか!?」

零「俺の情報を舐めるな。おい、玉野。その写真をやるから契約しろ。」

契約書を渡す。

玉野「うん、するわ。」

零「おい、平賀。」の条件をのむか。」

平賀「彼女達が了承してしまったんだから、のむしかないだろ。」

零「まあ、そうだな。」

雄二「では、室外機の壊すタイミングについては、後日詳しく話す。」

平賀「そつちの方の条件を引き抜きの方がインパクトがあつて、忘れてたな。」

まあ、確かにこの権限は、インパクトが高いな。

平賀「お前らがAクラスに勝てるよう願ってるよ。」

雄二「ははは、無理するなよ。勝てっこないと困つてるだろ。」

平賀「それは、さうだろ。AクラスにFクラスが勝てるはずがないだろう。ただの社交辞令だ。」

そう言つて平賀は去つて行く。

雄一「そういや、Fクラスからよく変わる奴がいたな。」

零「あいつらは、バカだから女子がDクラスの方が多いぞ。と言つたらすぐに食い付きやがった。」

雄二「そ、 そうか。」

明久「やっと、 終わった? 雄二、 零、 一緒に帰る? よ。」

零「別にいいが、 お前教科書を忘れたとかないよな?」

明久「うん、 僕だつてそんなバカなことしないよ。」

零「なつ、 ああ、 そうだよな。」

おかしいぞ。ここは、 明久は教科書を忘れて教室に取りに帰つて、 ラブレターを持つている姫路と会うところだぞ。今回、 原作を壊しそうな過ぎたからか。

明久「零、 どうしたの? 帰るよ。」

零「あ、 ああ。 分かった。」

明久「そういうば、 零はどこに住んでるの?」

零「ババアに結構広い家をもらつてな。」

明久「なんだ。じゃあ、 帰ろつか。」

Bクラス戦前（前書き）

バカテスト 化学
ベンゼンの化学式を答えなさい

姫路 瑞希

C₆H₆

教師のコメント
簡単でしたね。

土屋 康太
ベン+ゼン=ベンゼン

教師のコメント

君は化学を舐めてませんか。

吉井 明久

B-E-I-N-E-I-N

教師のコメント

後で土屋君と職員室に来るよ!!。

哀川 零

C₃H₅N₃O₉

教師のコメント

それは、ニトログリセリンの化学式です。

Bクラス戦前

さて、今日はBクラス戦か。

ボ力

島田と明久が騒がしいな。

明久の顔が三倍位に腫れてるな。

零「騒がしいな。どうしたんだ？」

島田「聞いてよー吉井のせいで、彼女にしたいランキングが上がっちゃったんだから！」

零「安心しろ。女子からの人気は上がったらしいから。それに、明久には罰がくらつ。」

島田「安心出来ないわよーでも、罰って何よ。」

零「明久。今日の数学の担当だが、船越先生だそうだ。」

ダツ、バタン。

明久「いつの間に、足に手錠が！？」

零「逃げると思って用意しておいた。」

島田「そうなの。気が済んだわ。」

零「ちなみに、清水と玉野がウチのクラスになつた。」

ダツ、バタン。

零「島田、お前も逃げると思つて用意した。」

明久・島田『イヤアアアアアア――――!』

昼休み

あの後、明久は近所のお兄さんを紹介し、清水は契約書の条件で渋々、島田から離れた。

そして、今、俺は姫路の弁当ルートから逃げて、Cクラス前に来て
いる。

零「Cクラス代表はいるか?」

小山「私だけど何かよつ?」

零「いや、肩の彼女がどんな奴か見にきたんだ。」

小山「何よーアンタ! いきなりやつて来て!」

零「肩の彼女は、ヒステリックか。良く似合つているな。」

小山「私のどこがヒステリックだつて言つのよ!」

零「そういう所を言つてんだ。まあ、いい。Fクラス袁川 零が
Cクラス代表に模擬試召戦争をしかける。」

小山「Fクラスの肩が、受けて立つわー叩き潰してあげるわー！」

零「ただやるんじやつまらないから、負けた方はなんでも一つ言つ
ことを聞くつて、いうのはどうだ？」「

小山「いいわ！勝つて土下座させて謝らせてあげるわー！」

零「それじゃ、教科はCクラスの担任の物理で、試験召喚。

小山「後悔させてあげる。試験召喚！」

二人の召喚獣が同時に現れる。

小山の召喚獣は、派手なドレスに扇子を持っている。

零の召喚獣は、黒いコートを着ていて、何も持っていない。

小山「あの召喚獣、武器を何も持っていないわーやっぱり、Fクラ
スの雑魚ね。」

次の瞬間、小山の召喚獣の首と胴体が離れる。

小山「なつ、何が起こったのよー？」

『小山 友香／S哀川 零

物理 146VS387』

小山「なんなのよ。その点数、本当にFクラスなの？」

零「正真正銘Fクラスだよ。そして約束通り、一つこいつとを聞いてもらおうか。」

小山「何をすれば、いいのよ？」

随分と静かになつたな。

零「これにサインしてもらおうか。」

契約書

? 指示をされた時に、Aクラスに試験戦争をしかける。

? 模擬試験戦争をFクラスの生徒にしかけない。

? この契約について、クラス外に口外してはいけない。

? ここの契約を破つた場合、一年間、哀川 零の何でもいつことを見
聞く。

小山「こいつとを聞くのは、一つだけよー。」

零「ああ、そうだよ。だから、これにサインをしろとしか言ってないだろ。」

小山「この卑怯者。」

零「お前の彼氏に言つてやつな。」

小山「へつ、分かったわよ。」

零「それじゃ、タイミングは後で伝える。破つたら分かるようになつていいからな。」

零は、Cクラスを去る。

Fクラス

零「おつ、雄一達戻つてたのか。姫路の弁当は置かつたか? (良く生きてたな。)」

雄一「ああ、置かつたぞ。(てめえ、薬品入りだと知つてたのか!)」

明久「そうだよ。零は勿体ないことをしたな。(よくも、僕達を見捨てたな!)」

おつ、アイコンタクトで返してきた。

零「すりやあ、残念だな。(自分の命より、大切な物なんてあるか)それで、次の相手はBクラスか?」

雄一「ああ、そうだ。(今度、絶対にぶつ殺してやるー。)」

明久「よく、分かったね。(夜道には、気お付けるー。)」

おお、こわー。

秀吉「零は何処に行つておつたのじゃ？」

零「後で教えるよ。それより、気をつけないとな。Bクラス代表は根本だからな。」

明久「あの卑怯者か。」

根本 恭一 カンニングの常習犯、喧嘩に刃物は当たり前などがそろつた卑怯者。

零「だから、雄二はシャーペンなどの文具をいくつか確保しておけ。みんなは大事な物は肌身離さず持つておけよ。」

こつしておけば、姫路のラブレターは平氣だな。

さて、Bクラス戦の開幕だな。

Bクラス戦（前書き）

夜月 陽日さん

お気に入り登録ありがとうございました。

バカテスト 英語

good および bad の比較級と最上級を答えよ。

姫路 瑞希

good - better - best

bad - worse - worst

教師のコメント

その通りです。

吉井 明久

good - gooder - goodest

教師のコメント

まともな間違え方で先生は驚きました。

土屋 康太

bad - batter - bast

教師のコメント

悪い 乳製品 おっぱい

哀川 零

GOT - GOTTER - GOTES T

神 四大神 最上神

DEAD - DEADER - DEADEST

死 地獄に落ちる 無限地獄

教師のコメント

問題の単語まで違います。後で職員室に来なさい。

Bクラス戦

雄一「さて、みんな総合テスト」苦労だった。午後からBクラス戦に突入するが、殺る気はあるか?」

おーおい、漢字が違うぞ。

『ウオ――――!』

元気がいいね。なんか良いことあつた?

雄一「そこで、前線部隊は姫路に指揮をとつてもいい。野郎共、キツチリ死んで!」

『ウオ――――!』

おつと、話が進んでるつて、死んでいいのかよ!?

キーンゴーンカーンゴーン

おつ、開始の合図か。

雄一「よし、逝つて!」。目指すはシステムテスクだ!」

『サー、イエッサー!』

また、漢字が違うぞ。

さて、いくつか小細工しておいたから、あの卑怯者の思い通りには

ならないだろ？ 前線に行つてくるか。

廊下

うわあ、結構殺られてるな。

明久「あつ、零。来てくれたんだ。」

零「一気に殺るから、ちょっとさがれ。」

雑魚A「何よ！Fクラスのくせに。」

雑魚B「そうだ！ボコボコにしてやるぜ！？」

雑魚C「ていうか、雑魚って、表記は酷くない！？」

零「あのヒステリックと同じことばかり、いうなよ。えっと、物理でその雑魚キャラ10人に仕掛けます。試験召喚。」

明久「そんなにたくさん大丈夫なの？」

《雑魚×10 物理平均150

哀川 零 物理376》

明久「多分、大丈夫だね。」

雑魚D「なんのあの点数！？」

雑魚E「焦るなー」つちが数は上だ！」

さて、Cクラスでは武器が何がなんだったか明かさないまま、終わってしまったから、今回は種明かしをしよう。

俺の武器は曲弦糸、簡単に言ってしまえば、見えない糸である。扱いは難しいが相手を縛つたり、切り刻んだり出来る優れ物だ。

だから、雑魚が突っ込んできたら、

雑魚×10『うおーーー!』

その瞬間、召喚獣の四肢がバラバラになる。

雑魚×10『えつーーー!』

鉄人「戦死者は補習。」

雑魚×10『ギャーーーー!』

零「なんか、息があつた雑魚だったな。」

Fクラス「すげーよ。哀川!」

Bクラス「哀川 零、あいつは姫路以上の化物だ!」

化物つて、酷くない?否定はしないけど。

秀吉「明久、零。そろそろ教室に戻るぞ。根本が何か仕掛けてくる頃じゃ。」

明久「うん、分かった。」

零「了解。」

Fクラス

明久「うわ、これは酷い。」

秀吉「まさか、いつくるとはのう。」

零「予想通りだな。」

ちやぶ台には穴が開けられ、シャーペンは折られていた。
しかし、

雄二「零が情報提供してくれたおかげで、被害を軽減できたがな。」

秀吉「流石じやのう零。」

明久「でも、どうしてそんなこと分かったの？」

零「企業秘密です。」

明久「ハ? ヒねた! ?」

雄二「明久、あまり聞いてやんな。」

零（サンキュー！雄一。）

雄一（貸し一つな。）

明久、結構鋭いな。危ないな。

秀吉「でも、何故雄一達はいなかつたのかのう？」

雄一「協定を結んでいたからな。」

零「俺は少しやる」ことがあるから、抜けるべ。」

雄一「分かつた。」

小細工第一段と行きますか。

パソコンを開き、おー【写つて】る。【写つて】る。
これが第一段、監視カメラ。

こいつで、犯人の顔から名簿で電話番号を調べて、利用させてもら
いますか。

数十分後

雄一「零、Cクラスに行くぞ。」

零「雄一、協定なら必要はないぞ。」

雄一「何故だ？」

零「今日の毎休みに手を打つておいたからな。貸し一つに充分だろ。」

「

雄一「お前に貸しを作るのは、骨を折りそうだな。」

零「生き残っている奴を全員、集めてくれ。今から一気に叩く。」

雄一「お前が言うなら確実だな。」

Fクラスの生き残りが集まる。

零「Cクラスで、根本が待ち伏せしてははずだ。さて、何故CクラスがBクラスに手を貸していると思つ?」

須川「弱みでも握つてゐんじゃないか?」

清水「あの肩ならあり得そうですわ。」

クラスからそれだな。という声がこべつも聞こえてくる。

零「それが違うんだな。」

島田「それじゃあ、何でなの?」

零「卑怯者根本は、ヒステリック小山と付き合つてゐる。」

FFF団『異端者には、死の制裁を!!--』

スゲー言つて一秒掛からずに黒いマントに着替えたよ。

零「Cクラスに今から行くから、合図をしたら一気に根本をぶつ殺せ！」

FFF団『イエス、サー！』

Cクラス

雄二「Cクラス代表はいるか？」

小山「私だけど何かしら？」

雄二「ああ、協定についてなんだが、」

根本「今だ！協定違反だ！坂本の首を取れ！」

隠れていた根本とBクラスが現れる。

雄二「協定違反？なんのことだ。俺はただ、零の協定の確認にきただけなんだがな。」

根本「何!? 友香、裏切ったのか!？」

零「良かつた。ちゃんと約束を守ってくれて。」

小山「しあわせがないでしょ。協定は協定なんだから。」

零「でも、何で屑が先生を連れてこんなに大勢でいるのかな？ ああ、協定違反か。じゃあ、やり返されてもしあわせがないな。須川。」

須川「諸君、男とは？」

『団『愛を捨て、哀に生きる者』』

須川「異端者には？」

FFF団『死の制裁を!』

須川「よろしい！殺れ。」

『國學研究』

根本 - お前は 俺をまもれ

根本はBクラス生徒に命じるが、Bクラス生徒は根本から離れていく。

零「お前、人望無さ過ぎだな。」

さつき、行つたのは根本を嫌つてゐる奴らに、電話してクラス設備に手を出さない」と、根本の弱味を作つてやるということを伝えた。

零「地獄に落ちろ。」

勝者Fクラス

Bクラス戦後対談（前書き）

形無人種さんお気に入り登録ありがとうございました。

バカテスト 保健

()の中をうめなさい。

女性は()を迎えることで第一時性長期になり、特有な体つきになる。

姫路 瑞希

(初潮)

教師のコメント
正解です。

吉井 明久

(明日)

教師のコメント

随分と急な話ですね。

土屋 康太

(初潮と呼ばれる生まれて初めての生理。医学用語では～～以下省略～～)

教師のコメント

裏面までびっしつと詳し過ぎです。

袁川 零

繁殖期

教師のコメント

動物じゃないんですから。

Bクラス戦後対談

雄一「それじゃあ、嬉し、恥ずかし、戦後対談といこうか。な、負け組代表?」

根本「……。」

クラスに裏切られて、威勢が無くなつちまたな。

雄一「本来ならお前達に素敵なちやぶ台をくれてやるんだが、零が約束をしていたから条件を飲めば特別に免除してやるつ。」

Fクラスがざわざわし始める。

雄一「落ち着け、みんな。前にも言つたが、俺達の田標はFクラスだ。ここが『ゴールじゃない。』

みんなが納得する。

根本「条件はなんだ?」

雄一「条件? それは、お前だよ負け組代表。」

根本「俺だと?」

雄一「ああ、お前には散々やつてもうつたし、去年から田障りだつたんだよ。」

反論が出来ないなんてな。

雄二「セシでお前達にチャンスだ。」

その条件だけじゃ、済ませる気はないがな。

雄二「Aクラスに行つて、試召戦争の準備が出来ていると宣言してこい。そうすれば見逃してやる。ただし、宣戦布告はするな。準備がしてあるとだけでいい。」

根本「…………それだけでいいのか？」

零「それだけでいいと思つてゐるのか？お前は卒業するまで、いつことを聞いてもらおうか。」

根本「ふざけるなーこれば、出す気はなかつたがこいつを見ろー。」

姫路のラブレターのよしな物を出す。

根本「こいつを公表してもいいのか？」

姫路「あつあれば！？」でも……。

姫路はポケットから同じ封筒を出す。

根本「なんで、同じ物が2つもあるんだ！？」

零「それは、俺のだ。中には発信機と盗聴器が入つてゐる。悪いな、姫路お前の封筒の形を見たのと、カバンに入れぢまつて。」

これが最後の小細工だ。こいつで徹底的にあの肩をつぶす。

零「お前の最終手段は無いよな。てめえみたいな屑がやる」となんて田に見えてるしな。つーか、その髪型カツコいいとか、思つてのべ。べつ見てもキノコじやん。喋るなよ、胞子が飛ぶから、お前みたいな煮ても焼いても食えない、毒キノコが増えても困るからな。滅びればいいのになー。」

秀吉「零よ。途中からただの悪口になつてゐるのじや。」

零「おっ、悪い悪い。さて、器物損壊に窃盗罪のキノコ君、ああ、あとカソンニングまでしてたよな? 退学して警察のお世話になるか、俺との契約を結ぶかを選ばせてやるよ。」

キノコ「いの悪魔が!..」

零「悪魔? あんな契約しないと悪事出来ない奴と一緒にするなよ。契約させるなら強制的にだら。で、べつするんだよ、キノコ君?..」

キノコ「…………契約する。」

零「これに名前を書け。」

契約書

一年間、 哀川 零の筆跡」とを聞く。

キノコ「書いたぞ。」

零「じゃあ、これからは女装で学園生活を送つてもいいのかな。」

キノコ「へへ、…………分かった。」

小山「恭一、あなたと別れるわ。」

キノコ「待つてくれ。た、頼む。」

明久「雄一……零が味方で良かったね。」

雄一「ああ、俺も今そう思つてたところだ。」

零「玉野、いじつで着付けの練習していこぞ。」

玉野「うん。アキちゃんの時に失敗しちゃダメだからね。」

明久「アキちゃんって、もしかして…………考えなによいじみう。」

明久が現実逃避してるな。

数分後

玉野「終わったよ。」

根本「くつ…………。」

全員『誰つー?』

玉野が美女を連れてきた。

玉野「土台が肩だから結構、時間がかかっちゃった。」

零「ここまで変わると。まあ、いいや。ヒステリック、明日にAクラスに試合戦争してこい。」

小山「分かったから、ヒステリックって呼ばないで！」

零「しゃあないな。分かったよ。根本はとつとと行ってこい。」

根本が教室を出る。

雄一「じゃあ、明日は休みだな。」

零「そうだな。ちゃんと勉強をしたよな？」

雄一「分かってるよ。言われてから、徹底的にやってるよ。」

零「それならいいが。じゃあ、みんな帰りだ。」

明久と姫路は一人で話してるみたいだな。

さて、俺も帰るかな。

Aクラス戦前日（前書き）

バカテスト 家庭科

人間が生きていいくのに必要な五大要素を答えなさい。

姫路 瑞希

?脂質 ?炭水化物? たんぱく質 ?ビタミン?ネラル

教師のコメント
さすが姫路さん、優秀ですね。

吉井 明久

?砂糖 ?食塩 ?水道水 ?雨水 ?湧き水

教師のコメント

それで生きていけるのはあなただけです。

哀川 零

?ぬるい友情 ?無駄な努力 ?むなし勝利 ?歪んだ友

情 ?冷たい笑い

教師のコメント

どこの - 13組ですか。

土屋 康太

初潮年齢が十歳未満の時を早発月経と言つ。くく

教師のコメント

保健体育のテストは一時間前に終わりました。

Aクラス戦前日

Bクラス戦から1日後
昼休み

零「やつとテストが終わつたな。」

雄二「一教科しかやつてない奴がなにを言つてるんだ。」

零「あつ、ばれた?」

雄二「分からるのは、明久くらいだろ。」

明久「いや、そこまで僕もバカじゃないよ!」

零「いや、明久よりバカが一人だけ知つてるぞ。」

明久「華麗にスルーしないでくれない?」

雄二「なつ、何!? それは本当か? そんな事があるなんて。」

明久「雄二までスルーするな。」

零「世界は広いな。」

明久「…………ねえ。」

雄二「今度、会つてみたまう。」

明久「…………。」

零「多分、そいつに会つて感謝をしつつ、殴ると思つた。」

明久「…………（じくじく）。」

雄二「どんな状況だ！？悪い明久、だから声を抑えて泣くな。」

零「弁当をまた、持つてきたから泣きやめ。」

明久「…………本当に？」

涙目で見てくるな。

零「本当だが、一緒に飯を食えたらな。」

明久「何を言つ「アキちゃん……ん！」うわあ……」

明久が玉野に連れてかれた。

雄二「あいつ、大丈夫か？」

零「多分、昼飯には一緒に行けると思うが。」

雄二「じゃあ、さきに他の奴らを呼ぶか。康太、秀吉、屋上で昼飯食わないか？」

康太「…………分かった。」

秀吉「こー一緒にさせてもらひのじや。」

零「じゃあ、明久を呼ぶか。明久、早く来ないと飯抜きだぞ！」

明久「はい！」

一瞬にして巫女服の明久が現れる。

零「大丈夫……じゃなさそうだな。」

康太「…………いい被写体だ。」

明久「見ないで、そんな目で見ないでよー。ちょっとムツツリーー、何撮ってるのさー。」

康太「…………被写代としてこれを。」

秀吉の巫女服姿の写真。

明久「今日は多田に見よう。」

零「現金な奴だな。」

秀吉「ムツツリーーー。その写真をこいつに見よーすのじゃ。」

雄二「なんでもいいが早く屋上に行くぞ。」

零「置いていったほうが良さそうだな。」

先に零と雄二が屋上に行く。

屋上

雄一「さて、お前にはAクラス戦の作戦は分かつてるんだろ?」

零「まあな。一つだけ宣言しておくが、今回で霧島との決着を確實につけろよ。最後の霧島との戦いにするからな。」

雄一「最後? どういう事だ! ?」

零「少なくとも今年での試召戦争では戦えないな。やらないといけないことがあるからな。」

雄
——それは、絶対にやらないといけないのか？」

零一念のためたが
ケテスの為たそ
代表さん

おとこで代表挑戦するのは恥だな

卷之三

卷之二

零 この話に纏わて最後たな

「明久、何の話してたの？」

雄一「零に昨日の昼休みに話した話をしてたんだよ。」

秀吉「零は昨日居なかつたからのう。」

零「明久、着替えなかつたのか？」

明久は巫女服のままだつた。

明久「着替えてたら、零の弁当が食べられないからね。」

それでいいのか？

零「ほらよ。ハンバーガーを作つてみた。」

雄一「そんな物まで作れるのか？」

零「作り方は簡単だからな。」

そんなこんなで昼飯は終わつた。

明久「そういうえば、零のBクラス戦凄かつたね。」

零「そうか？」

秀吉「そうじやろう。10人も相手にしたんじやからのう。」

康太「……糸が見えた。」

零「さすがだな、康太。曲弦糸が見えたなんて。」

明久「曲弦糸？」

零「曲弦糸は、強度の高い糸でいろんな力を使って切断するんだよ。」

「

雄一「そんなのハントロールしきれるわけないだろ？。」

明久「僕みたいに観察処分者じゃないんだしね。」

零「それは、そうなんだが俺の召喚獣は少しにじくつてあって3パターンほどよく使うモーションをインプットしてあるんだよ。」

明久「いじくるって、す”いけどそれってズルくない？」

零「だが、欠点もあるさ。そのモーションを使つてる最中は、他のことが出来ないからな。」

雄一「なるほどな。攻撃のパターンが少ないって、ことか。」

零「その通り。3つのパターンでしか、スムーズに攻撃出来ないんだよ。」

キーンローンカーンローン

秀吉「切つのことじりで昼休みが終わったの。」

零「ひとつ戻るか。」

俺の召喚獣について話が終わつたところで昼休みは終わった。

放課後 Fクラス

今、雄一がAクラス戦の作戦について話している。

姫路「あのう……霧島さんと坂本くんって仲がいいんですか？」

雄一「ああ、俺と翔子は幼なじみだ。」

明久「総員、狙え！」

明久の号令で全員が上履きを構える。

雄一「なつ、なんだお前達！？」

明久「うるさい！黙れ！あんな美人と幼なじみなんて！須川くんまだ、靴下は早い。あいつが気絶したあとに口に押し込むから。」

須川「了解です。隊長！」

いつの間にか明久が隊長になってる。

姫路「吉井くんって、霧島さんに興味があるんですか？」

明久「えっ、ああ、うん。霧島さんは綺麗だしって、姫路さんなんで僕に向かつて上履きを構えてるのさー？それに、美波は教卓なんて大きな物を持ち上げてどうする気ー？」

俺を作る前にカオスになってるな。

パンパンパン

秀吉「みんな落ち着くのじや。」

明久「秀吉は雄一が憎くないの?」

秀吉「別に、第一あの霧島じやぞ。雄一に興味があるとは思えん。」

秀吉の一言でみんなが上履きをあらす。

零「どうしてそうなるんだ?」

明久「霧島さんはどんな人から告白されても、ことりているから同姓愛者つて噂があるんだよ。」

零「バカかお前ら。断つている理由は他に好きな奴がいるからだろう。例えば、雄一とか。」

明久「総員、構え直せ。」

また、全員構える。

秀吉「何をやつておるのじや零。せつかく落ち着いたのこ。」

零「悪い悪い。この状況をもう少し見たかったからな。」

雄一「てめえ、この状況なんとかしろー。」

零「てめえ?なんとかしろ?それが人に頼む言葉か?」

雄一「もともとてめえのせい、危ねーくつ、分かつたよ。頼む、な

んとかしてくれ。」

零「お願いします。なんとかしてください。」

雄一「ちくしょひ、足下を見やがつてーああ、もひ。お願いします。
なんとかしてください。これでいいだろ。」

零「そこまで言つならやつてやる。お前ら、雄一はAクラス戦に
必要だからそこひへんで止めておけ。」

明久「いや、ここには殺さないと気が済まない!」

零「じゃあ、じひしょひ。雄一がAクラス戦で霧島に負けたら死ん
でもらおう。ちなみに、俺のコレクションを貸してやる。」

明久「コレクションって?」

零「銃刀法違反をかいぐつて手に入れたレア物だ。」

雄一「ちよつと待てー本当に死ぬぞ!」

明久「しそうがない。その提案を飲もう。」

雄一「飲むな!今、軽く食らつた方がマシなような気がする。」

零「何、雄一。霧島に勝つ自信がないの?そんなんでAクラス戦を
倒すとか言ってたんだ。」

そーだ。とクラスから上がる。

雄一「ちきしそう。絶対勝つてやる。」

零「それじゃ、Aクラスに行きますか。」

こんだけ脅しとけば、雄一でも負けないだろう。

Aクラス戦宣戰布告（前書き）

バカテスト　歴史
バルト三國と呼ばれる国々を全てあげなさい。

姫路　瑞希
リトアニア　エストニア　ラトビア

教師のコメント
その通りです。

土屋　康太
アジア　ヨーロッパ　浦安

教師のコメント

土屋くんの国の定義が気になります。

吉井　明久
香川　徳島　愛媛　高知

教師のコメント

正解、不正解の前に数が合わないことに疑問を持ちましょづ。

哀川　零
バベルの塔

教師のコメント

ちゃんと、バルトの順番になつてることが腹立たしいです。

Aクラス戦宣戦布告

Aクラス

優子「一騎討ち?」

宣戦布告中です。

雄二「そうだ。FクラスはAクラスに代表同士の一騎討ちを申し込む。」

優子「何を企んでいるのかしら?」

雄二「Fクラスの勝利それ以外に目的はない。」

優子「面倒な試合戦争を手っ取り早く終わらせるのはいいけれど、わざわざリスクを侵す必要はないかな。」

雄二「懸命な判断だ。そういうえば今日のCクラス戦はどうだった?」

優子「時間をとられただけよ。」

雄二「Bクラスとやう合つ気は?」

優子「Bクラスって、昨日来てたあの女装野郎?」

雄二「すじこだろ。うちのクラスの奴がやつたんだ。さて、まだ、宣戦布告はされてないようだが、この先はどうなるかな?」

優子「BクラスはFクラスに負けたから、宣戦布告は出来ないのでしょう。」

雄一「とにかくどつこい和平交渉ってことになつてゐるから、出来るんだよ。」

零「しかも、Dクラスも和平交渉ってことになつてゐるや。」

優子「脅されてる訳ね。」

雄一「そんな、ただのお願いだよ。」

優子「Fクラスのくせして。」

零「おいおい、優等生の仮面が外れてるぞ。腐女子さ。」

優子「なつ、何を言つてゐるのよー。」

ずっと俺のターン

零「いやあ、まさかあの優等生の木下優子がああいう薄い本を家で下着で読んでるなんてねー。」

優子「そんなの言ひがかりよー。」

零「俺の情報は確実だぞ。」

優子「まさか、秀吉ね。お仕置きが必要だわ。」

秀吉「わしへ、関係無いのじゃー。」

零「その通り、秀吉は関係無い。お仕置きつて、何をやるのかな？関節技を決めるなんてしないよな？そんなことしてるから、秀吉の方が同じ顔なのにもてるんだよ。」

優子「言わせておけば。演劇なんかにつづつを抜かしてたから、Fクラスになつたんでしょ。」

零「だが、演劇だつて仕事があるから勉強出来なくても、問題ないぞ。お前みたいな音痴は話が別だがな。」

優子「いい加減にしなさいよ。あんた！」

零「5本戦にして、俺とあんたが戦つて、負けた方が一つ言つ」とを聞くつてことにするか？」

優子「それでいいわ！」

零「科目選択権は俺のクラスがもらつていいな。」

優子「いい」……ちょっと待つて優子。「だ、代表。」

霧島「…………科目選択権は2つは私達がもらつ。」

ちつ、霧島がここにできたか。

零「しゃあないな。了解した。じゃあ、木下姉。俺は数学のタッグ戦を選択する。相棒に秀吉を選ぶ。演劇の力を見せてやるよ。」

優子「秀吉をパートナー？舐めてるでしょ？いいわ。勝つて、謝ら

せてあげる。」

霧島「…………雄一、私達も負けた方が一つ言ひ」とを聞く。

雄一「その勝負受けて立つ。」

あつちも話が終わつたみたいだな。

雄一「クラスに戻るぞ。」

零「了解した。」

ガラガラ

廊下

雄一「明日が決戦日だな。」

零「勝手に話を進めたがあれで良かつただろう?」

雄一「上出来だ。お前に交渉を任せようかな。」

零「明日の誰と誰をぶつけるかは考えるから。勝てよ。」

雄一「ああ、命が懸かつた試合だからな。」

零「それじゃ、帰りますか。」

Aクラス戦前編（前書き）

そろそろアンケートを終了しようと思ひます。なので、投票したい方は早くしてください。

バカテスト 現代社会
『PKO』とは何か答えなさい。

姫路 瑞希

Peace Keeping Operations(平和維持活動)の略。加盟各国によって行われる平和維持活動のこと。

教師のコメント

そうですね。豆知識ですが、United Nations Peacekeeping Operationsとも呼ばれています。余裕があれば、覚えておきましょう。

土屋 康太

Pantsu Koshitsuki Oppaiの略。世界のスリーサイズを規定して下着メーカーの団体。

教師のコメント

君は世界平和をなんだと思ってるんですか。

吉井 明久

パウエル 金元 岡田の略

教師のコメント

それは、セ・リーグの平和を守る人達です。

哀川 零

パンチ キック オーバーキル

教師のコメント

平和のへの字も見えません。

Aクラス戦前編

Aクラス

高橋「では、両名共準備は良いですか。」

雄一「ああ。」

霧島「…………問題ない。」

高橋「それでは、一人目の方どうぞ。」

零「一人だけじゃないな。いくぞ、秀吉。」

秀吉「分かったのじや。」

零「それじゃあ、来いよ猫かぶり。」

優子「その呼び方を止めなさい。」

零「へいへい、分かりやしたよ。木下姉。」

優子「まあ、それでいいわ。美穂行くわよ。」

佐藤「はい。」

高橋「開始してください。」

「「「試験召喚」」」
「サモン

優子の装備は鎧に長いランス。

佐藤は和式の服に鎖鎌。

零「ふーん、曲弦糸対策に鎖鎌を持つてくるとはね。」

優子「あなたを倒す為に武器がなんなのか調べたのよ。」

零「そりや！」熱心に。数学よりもより低かったから、まずいかもな。」

明久「雄二、零は大丈夫なの？」

雄二「いつもより低いって、言ってたが大丈夫だろ。だって」

『木下 優子&佐藤 美穂

VS 木下 秀吉&哀川 零

数学 389 & 376 VS 83 & 648』

雄二「あいつの得意科目だからな。」

優子「なんなのよ。その点数？」

零「700越えなかつたよ。」

秀吉「どれだけ桁違いなのじや？」

佐藤「あんなの倒せる訳ありませんよ。」

優子「大丈夫よ。曲弦糸対策はあるから。」

そういうと優子と佐藤の召喚獣が零と一定の距離をはかつて動き続ける。

優子「やはり、曲弦糸は動いている物を狙うのは苦手なようね。しかも、Bクラス戦で使った張り巡らせるのは範囲が決まってるみたいだし。」

零「はあ、どれだけ曲弦糸について調べたんだよ。」

「こいつ頭良過ぎぞ。」

優子「美穂やつて。」

鎖鎌が飛んでくる。零の召喚獣はよけきれず、擦つてしまつ。

『哀川 零 数学611』

明久「零！？」

雄一「ちゅつとまづいかもな。」

零「危ねー。」

秀吉「大丈夫かの。零。」

零「秀吉、悪いが今回召喚獣を貸してもいいつわ。」

秀吉「どうこいつ」とじや？..」

零「いや、うう」とだ。《合^キ成》「

俺がキーワードを唱えると俺の召喚獣が秀吉の召喚獣とくつつき光る。

そして、ツバメ服を着たマラカスを持った召喚獣が現れる。

零「腕輪はまだ、使いたくなかったんだがな。」

優子「腕輪の能力ですか？」

零「そうだよ。曲弦糸を調べたお前なら不思議だつただろ、何故、曲弦糸は味方を巻き込んでしまつのに、タッグ戦にしたのか？」

優子（確かに、曲弦糸は敵味方関係なく、巻き込む武器。疑問に思つたけど、タッグ戦にした理由はわざと秀吉をパートナーにして、私を怒らせる為だと思つたんだけど。）

（）

零「わざわざ、タッグ戦にした理由は隠し玉の《合^キ成》の為だよ。まあ、隠したままで終わりたかつたが。」

優子「そんな能力があるなんて！？」

零（俺が作った能力だからな。）

佐藤「で、でも、装備は弱くなつたみたいですよ。」

優子「確かにそうだわ。」

零「《少女趣味》を舐めるなよ。」

優子「行け！あ、あれ？」

優子と佐藤の召喚獣は全く動じない。

零「音使いの前で長く話しあがたな。」

優子「音使い？」

零「音でお前達の召喚獣の支配権を奪った。お前は演劇をバカにしてたしな。そんなお前を音楽で倒してやるもの、悪くない。」

それが、パートナーに秀吉を選んだ理由。秀吉の召喚獣と《合成》キメラを使えば、演劇に関するのになると困ったからな。

零「もう、終わりが見えてるが、零崎するのも悪くない。それじゃあ、『相討ちしろ』。」

優子と佐藤の召喚獣が互いに相手の喉を突き消える。

『木下 優子&佐藤 美穂
数学0&0』

高橋「勝者、Fクラス。」

Fクラス『うおお――――――』

優子「そんな……。」

零「演劇をバカにするの止めた方がいいぞ。」

優子「今回、良く分かつたわ。」

零「約束は後で伝えるわ。優子。」

優子「今、優子って。」

零「あそこまで曲弦糸を調べたんだ、ちやんと今まで浮ぶよ。嫌な
らやめるが。」

優子「そのままでいいわ。」

零「そうか、それじゃ。」

Fクラスのみんなの方に戻る。

明久「やったね。零！」

零「まあな。」

秀吉「今回、わしは何も出来なかつたのじや。」

零「そうしょぼくれるなよ。秀吉が演劇が大好きだから、あの召喚
獣になつたんだし、それに、優子も演劇を認めるつてよ。」

秀吉「本当かの？それならば良かつた。」

秀吉が機嫌を直してくれた。

雄一「喜ぶのはまだ、早いぞ。次は二回戦目だ。」

高橋「それでは、一回戦の方どうぞ。」

高橋女史は自分のクラスが負けたつていづのと、冷静だね。

久保「それじゃあ、僕が行こう。科目は古典で。」

雄二「明久、行ってこい。」

明久「えつ！ 僕？」

雄二「大丈夫だ。俺はお前を信じてる。」

零「この勝負は明久以外、適任はない。」

明久「ふう、やれやれ僕に本気を出せってこと？」

雄二「ああ、もう隠さなくていいだろう。この場の全員にお前の本気を見せてやれ。」

零「もし、やばくなったらこの紙を開け、作戦が書いてある。」
折り畳んだ紙をひとつそり渡す。

明久「必要にならないと思つたが、もひつておくよ。」

玉野「ねえ、アキちゃんつて本当はずいの？」「須川」「いや、そんな話は聞いたことはないが。」

清水「豚野郎のいつもの冗談でしょう。」

うん、俺もそう思う。

久保「よ、吉井くんが相手なのか、しかも、さっきの話からするとまさか……。」

久保がいろんな理由で戸惑い始めている。

明久「あれ、気付いた?」名答。そいつで、僕は今までちつとも本気を出していない。」

久保「それじゃ、君は。」

明久「そつぞ、君の想像した通りだよ。隠していたけど、実は僕

左利きなんだ。」

『久保 利光 VS 吉井 明久
古典428 VS 95』

久保は明久が觀察処分者だから、気持ちが不安定で上手く扱えていない。

明久はそこで俺の渡した紙を開いて見る。そして、

明久「こんなセリフ言えるかあ——！」

その時、久保の召喚獣がテスサイズで明久の召喚獣をバラバラにする。

明久「体が切り刻まれたようにいた―――！」

島田「このバカ！テストに点数は関係はないでしょう！」

明久「み、美波！ファイードバックで傷んでるのに、さらに殴るのは止めて。」

零「島田、明久の点数はいつもより10点程高かつたぞ。」

島田「その程度変わつても関係無いわよ！」

零「確かにな。」

雄二「さて、次が勝負だ。」

明久「ちょっと、雄二！アンタ僕をちつとも信頼してなかつたな！」

雄二「信頼？何それ食えるの？」

零「今度、作つてみるか。」

明久「雄二、貴様に本気の左を食らわせたい！それに、零は何を作ろうとしてるの！？後、お前は何を僕に言わせようとしてるんだ！」

雄二「何をしたんだ？」

明久「これを見てよ！」

『久保くん！この試合に僕が勝つたら、君と付き合おうと思う。だ

から、勝たせて!』

明久「こんなことで勝たさせてくれる訳無いじゃないか!」

雄二「いや、勝てたかもしけないな。」

零「だろ。」

明久「それってどういふこと?」

雄二「さて、次に行こう。」

明久「ねえってば?」

知らない方がいいよな。

Aクラス戦後編（前書き）

バカテスト 化学

ハーバー法と呼ばれる方法にてアンモニアを生成する場合、用いられる材料は塩化アンモニウムと（ ）である。

姫路 瑞希

水酸化カルシウム

教師のコメント

正解です。アンモニアを生成するハーバー法は工業的にも重要なので、確実に覚えておきましょう。

土屋 康太

塩化吸収剤

教師のコメント

勝手に便利な物を作らないでください。

哀川 零

二トログリセリン混ぜたら面白いと思います。

教師のコメント

爆発します。面白いからって、混ぜないでください。

吉井 明久

アンモニア

教師のコメント

その答えはズルいと思います。

Aクラス戦後編

Aクラス

高橋「では、三人目の方どうぞ。」

康太「…………（スクツ）」

工藤「じゃあ、僕が行こうかな？一年の終わりに転校してきた工藤愛子です。よろしくね！」

そういうや、僕つ娘つて創作の中だけだよな。

高橋「教科は何にしますか？」

康太「…………保健体育。」

工藤「土屋くんだっけ？君は保健体育が得意みたいだけど、僕も得意なんだ。君と違つて実技でね。」

なんか、みんながうるさくなつた。

工藤「そこの君、吉井くんだっけ？勉強が苦手そうだし、保健体育だつたら僕が教えてあげようか？もちろん実技でね。」

明久「望むと」

島田「アキには永遠にそんな機会は来ないから、保健体育の勉強なんて必要ないのよー！」

姫路「そりです！一生必要ありません！」

雄一「島田に姫路、明久が死にそうな位悲しい顔してるぞ。」

工藤「じゃあ、そこの袁川くんは？」

零「いいぞ。格闘技ならなんでも得意だ。」

零以外『はつ…?』

何故驚いてんだ？

零「保健体育の実習と言つたらスポーツだろ？」

雄一「そつこや、この前の成績で保健体育は10点代だったな。」

零「柔道でもやるか？寝技が得意なんだよ。」

秀吉「本当に分かつてないのかの？」

工藤「まあ、それでいいや。今度柔道やるひよ。」

零「ほら、スポーツであつてたんじやんか。」高橋「そろそろ始め
てくれださー。」

零「高橋女史、少し顔が赤いですよ。」

高橋「うひむせじですょー早く始めなさい。」

工藤「はーい、サモン。」

康太「……………サモン。」

零「康太つてさ、試召戦争で一回も活躍してなかつたな。」

雄二「今回がムツツリーーの見せ場だ。」

工藤「実践派と理論派どっちが強いか見せてあげる。」

工藤の召喚獣はセーラー服に巨大な斧。
康太の召喚獣は忍服に小太刀。

工藤「バイバイ、ムツツリーーくん。」

工藤の召喚獣は斧が電気を帯びて、早くなる。

零「腕輪の能力か。」

康太「……………加速。」

工藤「えつ？」

康太の召喚がブレて消える。

康太「……………加速終了。」

『土屋 康太VS工藤 愛子

工藤「そんな、この僕が！？」

工藤は崩れ落ちたよ。

零「おい、大丈夫か？」工藤。

工藤「あはは、やられちゃった。でも、優子を名前で呼ぶんだった
ら僕も名前で呼んで欲しいな。」

零「愛子。これでいいな。」

工藤「うん、じゃあ後で柔道やうつね。」

零「了解。」

高橋「2対1ですね。次の方どうぞ。」

おっ、さすがに後がなくて戸惑ってるな。
最初と結構変わってるな。

姫路「あ、はい、私です。」

零「雄一、この試合で決着ついたまうんじゃないか？」

雄一「それは、困るな。だが、ここは結構きついぞ。なんたって相
手は学年次席だからな。」

零「学年次席って、久保だろ？」

雄一「何を言つてんだ？あの前が知らなかつたのか？久保は姫路と3位争いしてたぞ。」

零「えつ？」

雄一「学年次席は翔子と主席争いしてた天東潤だ。」

潤「俺の出番か。」

真つ赤な髪を後ろで束ねている女子が出てくる。しかも、俺つ娘。

オリキャラか―――――？

しまつた！一回戦をタッグ戦にしたせいで、オリキャラが出てくるのは、ギリギリ予想していたが、学年次席つてまずいだろ。原作壊し過ぎたか。

雄一「おい、大丈夫か？」

零「ああ、大丈夫だ。てっきり名前から男だと思つたのに女だったから驚いただけだ。」

雄一「それなら、いいが。」

高橋「科目はどうしますか？」

潤「選択権はこっちでいいんだよな？総合科目で頼む。」

明久「ちょっと、それは。」

姫路「構いません。」

姫路・潤「「サモン。」」

『天東 潤 VS 姫路 瑞希

総合科目

4549 VS 4409』

須川「マジか？霧島に匹敵するぞ！」

久保「僕は置いていかれたみたいだね。」

至るところから驚きの声が上がる。

潤「400点程上がってるな。俺と翔子の競争に入りそうだな。良くあげたな。」

姫路「私、このクラスのみんなが好きなんです。人の為に一生懸命になれるみんなが。」

潤「まるでマンガの主人公だな。だが、嫌いじゃない。」

姫路「だから、みんなに恩返しをするために勝ちます。」

潤「悪いが俺も負ける訳にはいかないんだよ。」

姫路の召喚獣は鎧に大剣。

天東の召喚獣は真っ赤な和服を着ている。

姫路「武器はどうしたんですか？」

潤「今、用意する。《変体刀》。」

刀が現れる。

潤「斬刀 鈍。」

姫路「腕輪の能力ですか？」

潤「正解だ。何故か、使わないと攻撃のたびに点数が減るからな。」
「い、チートじゃねえ？」

姫路「負けません！」

姫路の召喚獣が潤の召喚獣に向かつて走る。

潤「斬刀 鈍は光の速さを超える。零戦！」

零「姫路、上に跳べ！」

姫路「えつ、あ、はい！」

姫路の召喚獣は跳ぶ。

その瞬間、姫路の召喚獣の下を斬激が走る。

潤「お前、よく分かったな。」

零「そりやどいつも。」

潤「だが、これは避けられないだろ？。零戦の最高速度は十機。」

姫路「十機！？」

潤「行くぞ。零戦、十連。」

ヒュンヒュンヒュン

姫路「くつ。」

姫路の召喚獣の足に一撃が当たつて動けなくなる。

『天東 潤 VS 姫路 瑞希

総合科目

4449VS4082』

潤「もう、動けないだろ。終わりにしてやる。」

姫路「まだです。行け！」

腕輪が光り熱線が出させれる。

潤「くつ。」

潤の召喚獣は腕に熱線が当たつたが真横に跳ぶ。そして、動いて避け続ける。

零「これは、姫路の点数が無くなるか、天東が熱線に当たるかの勝負だな。」

姫路「当たつて！」

潤「負ける訳にいかない。」

潤の召喚獣に熱線が当たる瞬間、熱線が消え姫路の召喚獣も消える。

『姫路 瑞希 総合科目 0』

姫路「そ、そんな。みんなに恩返し出来なかつた。」

明久「何を言つてゐるのさ。姫路さん。あんなすごい戦いをしたのに、それに、僕達は仲間なんだからそんな事気にしなくていいんだよ。」

姫路「明久くん。」

潤「危なかつた。」

みんなに聞こえないように。

零「本当にそうか？多分だが、『変体刀』の中に身体能力強化があつたんじゃないかな？」

潤「何故そう思う。」

零「読んだ本に似たような刀があつたからな。」

潤「その通りだよ。」

零「どうして使わなかつたんだ？」

潤「なぜか、あんな頑張ってる奴には使つてはいけないと思つたんだよ。」

零「そうか。今度は本氣でやつてやれ。それが、頑張ってる奴に対する礼儀だ。」

潤「そうだな。勉強になつたよ。」

高橋「2対2ですね。最後の一人どうぞ。」

翔子「……はい。」

雄二「俺の出番だな。」

高橋「科目はどうしますか?」

雄二「科目は日本史の年表で、範囲は小学校卒業まで、方式は上限百点満点で頼む。」

高橋「分かりました。テストを用意するので、少し待つてください。」

「

高橋女史が教室を出していく。

Aクラス「上限ありだつて!?」

Aクラス「しかも、小学校レベルだと。」

「こちらは雄二に応援の言葉を贈つている。俺からも。」

零「雄一。」この勝負絶対に勝てよ。」

雄一「お前に言われた通りに勉強したから大丈夫だろ。」

零「俺もこれを使わないことを願つてる。」

雄一「これ？」

俺はバックからある物を出す。

雄一「おい！なんでそんなデカい物が入るんだ？」

そのデカい物とは、デスサイズ。

零「負けたら、処刑だ。」

雄一「……絶対に勝つてくる。」

零「頑張ってね。」

高橋「準備が出来ました。」

これで勝つたな。

視聴覚室

高橋「不正行為は即失格になります。いいですね。」

霧島「……はい。」

雄二「分かつてゐるや。」

高橋「それでは、始めてください。」

数十分後

『日本史年表 限定テスト 100点満点

坂本 雄二100点
霧島 翔子100点』

あの問題が出なかつただと――――――!

Aクラス戦後編（後書き）

アンケート終了です。

結果

木下優子	1
木下秀吉	3
工藤愛子	1
高橋洋子	2
天東 潤	2

こうなりましたが、2票以上入ったキャラをヒロインにしようと思
います。

Aクラス戦後対談（前書き）

すいません。前回誤字がありました。
零戦ではなく、零閃です。

バカテスト 歴史
()年 キリスト教伝来

霧島 翔子
1549年

教師のコメント

正解です。特に「コメントはありません」と

坂本 雄二

雪の降り積もる中、寒さに震える君の手を握った1994年

教師のコメント

ロマンチックな表現しても間違いは間違いです。

教師のコメント
せめて数字をいれましょ。

哀川 零
謹賀新年

Aクラス戦後対談

Aクラス

高橋「最終勝負引き分けです。」

ディスプレイに映し出されなかつたと思つたら、あの問題が出なかつたなんて。

雄一「あの問題が出ないなんて。」

明久「どうなるの？」の状況。」

周りからも疑問の声があがる。

零「……で交渉をする。」

雄一「零、お前どうするつもりだ。」

零「徹底的に良い方向に向かわせてやる。」

雄一「……はお前に任せた。」

零「霧島。交渉したいんだが。」

霧島「……交渉？」

零「学園長も混ぜないとけないから、学園長[至までつこして来てく
れ。」

霧島「……分かつた。」

Aクラスを出ていく。

明久「頼んだよ。零。」

零「了解した。」

学園長室

藤堂「なんだい、糞ジヤリ。」

零「AクラスとFクラスは引き分けで終わった。」

藤堂「まさか、Aクラスに勝つと言つていこまでもやつちまつなんてね。」

零「クラスの設備について他の結果は霧島と交渉するつもりだが、クラス設備についてはアンタを混ぜないといけないだろ?」

藤堂「まあ、そうさね。」

零「Aクラスの設備をもう一つ準備するのは出来ないとと思うが、Bクラスの予備としてCクラスレベルまでは帰られるだらう。」

藤堂「クラスの敷地が足りないさね。」

零「安心しろ。このクラスはAクラスに負けてDクラスに落ちているから、後、空いている面積があるから、増やせるんだよ。」

学園の図面を開き説明する。

藤堂「これらのタイミングに考えたのさね?」

零「引き分けと分かつてから考えたんだよ。」

霧島「……あなた、何者なの?」

零「この学園には仕事で入ったんだ。で、いいのか?」

藤堂「工事に費用がかかるからねえ。」

零「情報代とこうじでどうだ?」

霧島に聞こえないようにこうじ。

藤堂「他に言いたい」とあるが、その情報にそれだけの価値はあるさひる「」

零「学園の存亡についてだ。」

藤堂「学園の存亡?」

零「今度の学園祭の召喚大会で腕輪を出すことになつてゐみたいだが、それには問題がある。」

藤堂「問題?」

零「後で話す。」

藤堂「分かったさね。クラス設備はこれでいいわね。」

零「霧島もこれでいいだろ?」

霧島「……Aクラス設備に手を出さないならそれでいい。」

零「それじゃあ、今度は霧島と交渉だ。單刀直入に言つ。Eクラスに来ないか?」

霧島「えつー?」

零「そうすれば、雄二と一緒にいられる時間が増えるぞ。しかも、雄二との勝負で負けた方が言つことを聞く。というのも雄二に聞かせね。」

霧島「……それは、嬉しい。その交渉をのむ。」

零「じゃあ、一旦戻るが。」

Aクラス

零「へとこうとした。」

わたくしの話を全員に話す。

雄一「てめえ、俺を売りやがったな！」

零「うるさい。」うなったのはお前の作戦が失敗したからだろうが。

「

Aクラス「でも、それじゃあFクラスに優位すぎだろ。」

零「文句を言うなよ。最高クラスのお前らが最低クラスの俺達と引き分けになつたんだから。」

Aクラス「うつ、でも。」

零「こっちにもデメリットがあれば、いいなら。鉄人を俺達の担任にするつもりだ。」

Fクラスに聞こえないように言つ。

Aクラス「それなら。」

あー、なんかせつきからみんなに隠れて会話してゐるな。

零「せつき、Fクラスと戦つた奴佐藤以外話があるから一人ずつ来い。」

佐藤「なんで私だけ。」

零「だつて、地味だし。」

佐藤「ひ、酷い。」

崩れただけど知らない。

零「やつを言つた奴来いよ。」

視聴覚室

この部屋を交渉のために借りました。

久保の場合

久保「で、なんだい？哀川くん。」

零「明久と一緒にクラスで勉強したくないか？」

久保「詳しく聞かせてくれ。」

目が変わった。

零「普通にFクラスになることが出来たんだよ。」

久保「そろは本当かな？でも、せつかくAクラスになつたのに。うーん。」

す「ぐ真面目だな。しうがない、最終奥義。

零「来るならこれをやるわ。」

久保「これは！」

明久（玉野の着付けバージョン）

久保「よし、僕はFクラスになる。」

零「じゃあ、それに名前書いて次の人に呼んで。」

久保「分かった。ありがとう。」

優子の場合

零「やつきの言つことを聞くってのだけど、Fクラスに移籍して。」

優子「しょうがないわね。約束だし。」

優子（それに零と一緒にクラスになれるしね。）

零「そうか。簡単に納得してくれて良かった。次の人に呼んでくれ。」

優子「ええ。」

優子は簡単に交渉できた。

工藤の場合

工藤「で、何かな？零くん。」

零「柔道で勝つたら、Fクラスに来てくれ。」

工藤「いいよ。ていうか僕は普通にFクラスに移っていていいよ。」

零「は？ なんでだ？」

工藤「なんでだうね？」

零「はぐらかすなよ。」

工藤（零くんがいるからなんて言えないよ。）

工藤「なんでもいいでしょ。」

零「まあ、確かにな。」

零（康太がいるからかな？）

零「でも、柔道はびいきある？」

工藤「また、今度でいいよ。」

零「そうか。じゃあ、次の人に呼んでくれ。」

潤「俺になんのようだ？」

零（こいつが一番の問題なんだよな。やはり、原作キャラが好きなのかな？）

潤「で、一体なんなんだ？」

零「お前って、好きな奴いるのか？」

潤「何をこきなり聞いてるんだお前はー？」

潤（なんか、一人ずつ集めたと思つたらいきなりなんなんだ！？もしかして、俺のことがす、す、好きなのか？）

零（顔が真っ赤になつてゐし、やっぱり、好きな奴がいるみたいだな。やっぱり、原作キャラだよな。それなら、）

零「Fクラスに来ないか？」

潤「えつー？」

潤（やっぱり、俺のことだが。だから、一緒にいたいから？）

零「嫌か？お前がいれば面白くなる」と思つんだが。」

潤（お前がいれば面白くなる。そんなこと言われるなんて始めてだ。やっぱり、）

潤、迷走中

零（読みが外れたかな？もつたいないが）

零「はあ、やっぱ、駄目か。無理強「いや、行くぞ。」い、えつ？」

潤「だから、Fクラスになるて言つていいのだ。」

零「そ、そつか。これからよろしく頼む。天東。」

潤「潤でいい。じもうりんやよろしく頼む。」

零「了解した。潤。」

零（なんかうまくこつたみたいだな。）

こつして一日で三人も女子を落とした鈍感野郎の交渉が終わった。

えつ、Fクラスからだす5人？

今度合コンを企画してやると言つたら、即刻で了承したよ。

オリキヤラ詳細

哀川 零

容姿

見た目は戯言シリーズの戯言遣いの銀髪で少し髪が長くなっています。

成績

数字 約700点

保健体育 約10点

英語・古典 Fクラスレベル

それ以外 約400点

詳細

面白いことが好き。

仲間にはなんだかんだで優しいが、敵は徹底的に潰す。

自分の恋愛については鈍感。

基本的に万能。

召喚獣

黒いコートに曲弦糸。

腕輪は『^{キメラ}合成』味方一人と合体する。

戯言キャラになる。

発動条件は一人で合計500点を超えること。400点になつていなくても使えるし、400点になつっていても使えない。

天東 潤

容姿は化物語の戦場ヶ原の髪と田が赤で、髪を後ろで束ねている。

成績 霧島 翔子と全体的に同じ。

詳細

俺つ娘。

男口調。

冷静沈着（恋愛以外）。

かわいい物好き。

こちらも基本的に万能。

召喚獣

赤い着物に素手。

腕輪を使わない場合、虚刀流を使えるが、技を使うたびに点数が減る。

腕輪は『変体刀』刀語の変体刀を出せる。同時に2つはだせない。

ラフレター騒動（前書き）

バカテスト　日本史

楽市楽座や関所の撤廃を行い、商工業や経済の発展を促したのは（ ）である。

姫路　瑞希

織田信長

教師の「メント
正解です。」

島田　美波
ちゃんまげ

教師の「メント

日本にはもう馴れましたか？」の解答を見て、先生は不安になりました。

吉井　明久
ノブ

教師のコメント
ちょっと、馴れ馴れしいと思います。

哀川　零

織田臣川 秀康

教師のコメント

誰ですかそれ？混ざり過ぎです。

ラブレター騒動

昨日、試合戦争が終わった後、色々とクラスに制限がついた説明する

一つ目は、両クラス宣戦布告の二ヶ月間禁止。

二つ目は、担任が鉄人になった。

三つ目は、ババアとの秘密の契約だから後に話すか。

で、今クラスがどうなったかと言つと。

まず、雄一だが霧島とイチャついている。

雄一「翔子！ いい加減に俺から下りろ。奴等が狙つてやがる！」

霧島「ヤダ。」

普通に断られているし。

次は、康太は工藤と白熱？した戦いをしている。

工藤「ムツツリーーーくれ。この問題ならどうだ？」

康太「…………そんなの一般常識。」

工藤「そんな！？ もう、それなら（ぴらつ）。」「

康太「ぶしゃああー！スパツツ」ときに。」

工藤「じゃあ、次の問題に行こつか。」

救急車を呼んだ方が良くないか？

めんどくせこから次に行こ。」

えつと、秀吉は須川にデートに誘われてるよ。

須川「なあ、今後の休みに映画に行かないか？チケットが余ってるんだ。」

秀吉「悪いが、部活があるからのう。」

須川「空いてる日があつたらいつでもいいから、デート『異端者には死を』ぐわあーー！」

優子「秀吉、またあんた、デートに誘われたみたいね？」

秀吉「あ、姉上？その間接はそつちに曲がりきやあーーー！」

優子「なんで、アンタばっかり！」

須川は異端審問会に連れていかれ、秀吉はお仕置き中。

FFF 団忙しそうだな。

優子は優等生を辞めたみたいだし。

一応、最後か。

えつと、明久はすゞいな。説明しづらい。

姫路「吉井くん！クツキー焼いてきたんですけど。」

明久「えー！」

島田「ねえ、アキ。新しくケー・キ屋さんが出来たんだけど。」

明久「僕の食費がーー！」

清水「お姉様とデートだなんて！でも、哀川との契約があるし。」

明久「殺氣を感じる！」

玉野「かわいい、服があるんだけど。」

明久「着ないからね！」

久保（ああ、今日も吉井くんはかわいいな。）

明久「ブルッ、なにか悪寒が。」

明久、それは正常な証拠だ。

真面目に座っているのは、俺と潤だけか。

つーか、一つ一つが別の場所で起きるのは小説で読んだことがあるけど、それが同じ場所で起きるって、まさに力オスだな。

やつぱり、いいな。力オスな状況つて。さて、次は何をしようかな？

鉄人「出席を取るぞ。席につけ。」

鉄人が来たので、みんな席に戻る。

さすがに、鉄人には誰も逆らえないか。

鉄人「木下。」

秀吉・優子「どつちなのじじゃ・ですか?」

鉄人「すまない。木下秀吉。」

秀吉「はいなのじや。」

鉄人「坂本。」

雄二「明久がラブレターを貰つたようだ。」

『殺せええ――!』

鉄人「出席の途中だ。後にしろ。」

今、姫路と島田の声が一緒に聞こえたんだが。

鉄人「出席を続ける。横溝。」

横溝「吉井殺す。」

鉄人「須川。」

明久「吉井殺す。」

明久「みんな落ち着いて！返事が吉井殺すになつてるよー。」

鉄人「うるさいぞ。吉井。」

明久「ここは僕を注意するところじゃないでしょ！」

鉄人「哀川。」

明久「えつ、無視！？」

零「雄一もラブレターを貰つたようだ。」

『あいつも「殺せええー」…。』

今度は霧島の声が一緒に聞こえた。

さて、問題です。雄一にラブレターを送つたのは誰でしょうか？

一番可能性があるのは霧島だな。

だが、叫んでたんだから霧島じゃない。

きっと、愉快犯だな。

えつ、俺？俺はやつてないよ。だから『俺は悪くない。』

なんて、言つても俺がやつて分かるよね。球磨川の真似してみたけ

ど似てた？

まあ、いいや。ちなみに落ちてた姫路の手紙を明久の下駄箱に入れたのも俺。

だって、面白そうじやん。

康太「…………あつたぞ！ 未開封のパンが！」

須川「ムツツリーは何を探してるんだ？」

現在Fクラスでは自分にもラブレターがないか探してる。

横溝「あつたぞ！ ってこれは俺が書いたやつか。」

須川「異端者だ。」

横溝「しまつたあ————！」

鉄人「いい加減にしろ。貴様等！ 出席の途中だ！」

ここで鉄人の一喝。

鉄人「蝶ヶ崎。」

蝶ヶ崎「吉井と坂本マジぶち殺す。」

鉄人「鍋島。」

鍋島「吉井と坂本千切りにする。」

鉄人「清水。」

清水「あの豚野郎殺す。」

清水の奴、便乗して明久を殺す気だな。

鉄人「霧島。」

霧島「……雄一、浮氣。」

鉄人「古賀。」

古賀「吉井と坂本蜂の巣にする。」

作者はFクラスメンツの名前が分かりません。なので、適当にめだかボックスからとつてきたので、名前は特に関係ありません。

鉄人「欠席者はいないようだな。それじゃあ、一日勉強頑張るように。」

吉井・坂本「先生、かわいい生徒を見殺しにするんですか！？」

鉄人「吉井、坂本。勘違いするな。貴様等は不細工だ。」

吉井・坂本「不細工とまで言われるとは思わなかつたよ！」「

息がぴつたり。

数分後

明久サイド

今、現在地獄の鬼ごっこが開幕されている。

生き延びるためににつく氣雄一と一緒に走っている。だつて、おどりに使えるからね！

雄二「おい、明久。一旦あの空き部屋に隠れるぞ。」

明久「了解！」

ガラガラガラ

明久「で、これからどうあるつもり？」

雄二「二手に分かれて屋上を日指すぞ。」

明久「二手に分かれるの？」

雄二「ああ。」

翔子「……雄二見つけた。」

霧島さんが現れた。

明久「それじゃあ雄二、また後で。」

雄二が僕の手を掴む。

雄二「やつぱり、一手中に分かれるのは止めだ。」

明久「ふざけるなよ雄二。自分の作戦に責任を持つよ。」

雄二「うるせえ! てめえだけ逃がすと思つた。」

霧島「……浮気相手はやつぱり吉井?」

明久・雄二「願い下げだこんな奴!」

雄二「窓から外に出るぞ!」

そうして、僕達は窓から外に出た。

そして、下の階の空き部屋に入った。

霧島さんは一階まで降りたと思つてゐみたいだ。

それは、好都合だが、入った空き部屋にはムツツリー一が待ち伏せしていた。

康太「…………異端者は排除。」

明久「どうする雄二?」

雄二「俺に任せろ。」

明久「任せた。」

元神童の力信じてみようじゃないか！

雄二「俺は異端審問会に所属していない。だから、明久をそちらに引き渡すので、ここは俺だけ見逃してくれないか？」

この野郎！僕を売りやがった！

明久「この『ゴリラ』何を考えてるんだ！」

康太「…………少し考えてみる。」

明久「考え方ダメだよ。ムツツリーー。」

雄二「なら、明久のベッドの下の本をお前にやろう。」

康太「…………交渉成立。おまけで明久も見逃してやる。」

明久「僕の宝が犠牲になつたけど、助かつた。」

雄二「どうだ俺の力は。」

明久「ムツツリーー、雄二も秘蔵の本をあげるつて。」

雄二「てめえ、何勝手に決めてんだ！」

康太「…………礼として、これをやる。」

明久「これは？」

康太「中に刃物が入つてる。」

明久「ありがとう。ムツツリーーー。」

雄二「てめえ、勝手に交換しやがつて。」

明久「自業自得だろ。」

僕達は廊下に出る。

清水「そこまでです！豚野郎。」

明久「清水さん！」

雄二「こは一歩に分かれるぞー！」

ガシツ

雄二の腕を掴む。

明久「まさか、一人で逃げるなんてしないよね？」

雄二「うるせえ！とつと放せ！」

須川「そこまでだ！」

雄二「ちつ、お前のせいで来ちまつたじゃねえか！ムツツリーーーから貰つたやつを片方よこせー！」

そうだ。ムツツリーから刃物を貰つたんだった。よし……。

雄二「どうした早くしろ。」

明久「雄二はどうがいい?」

爪きり、ピザカッター。

雄二「確かに刃物だが……。ああもう、ピザカッターでいいからよこせ。一か八かやってやる。」

明久「じゃあ、僕は爪きりで頑張るよ。」

雄二「明久、死ぬなよ。」

明久「そっちこそ。」

数分後

清水「痛い。深爪になってしましましたあ——！」

須川「まさか、ピザカッターにあんな力があつたなんて。」

明久・雄二「あれ、勝てた。凄いな僕・俺!?」

雄二「見えたぞ!屋上への階段だ!」

明久「これで僕らは。」

島田「そこまでよー。」

霧島「……雄一待つてた。」

雄一「待ち伏せだと！何故だ！？」

霧島「……やつきの会話、私が聞いてた。」

雄一「俺のバカ――！」

明久「雄一つてさ、霧島さんが相手だと失敗するよね。」

雄一「くつ、何も言えねえ。」

島田「アキ、渡さないというなら手加減しないわ。」

明久「美波。それは聞けない相談だよ。」

島田「じゃあ、やるつて言うのね。」

バツ

僕は制服を脱ぎ、後ろに投げる。

明久「やつてやるとー。」

雄一「バカ！」

明久「えつ？」

僕の制服を姫路さんが拾つ。

姫路「ああ、これですね。」

明久「倒してないのに、見ちゃダメだよ！姫路さん！」

姫路「あつ」これは！？」

姫路さんはラブレターを見て驚いてビリビリに破つたつて

明久「ええ――――――！」

島田「瑞希、さすがにそれは、書いた子に失礼よ。」

破れたラブレターは風で流され、飛んで行ってしまった。

そんな……。

あれ、さつきから雄一の声が聞こえないけど。

霧島「……待つて雄一！」

雄一「捕まつてたまるか！」

雄一はグラウンドで逃げ回つてる。よし。

明久「僕も雄一を追いつの手伝つよ。」

地獄の鬼ごっこ中

零サイド

みんな頑張ってるな。

現在クラスにいるのは、俺、秀吉、優子、潤、工藤、玉野、久保となっている。

福原「あれ？他の皆さんは？」

零「鬼（おに）の中です。」

福原「そうですか。自習にします。」

福原先生は教室を出ていく。

零「おい、秀吉。お前は行かなくていいのか？」

秀吉「儂は別に興味がないから。」

零「そうか。俺はてつきり明久のことが好きなのかと思つたんだがな。」

秀吉「ぶつーな、何を言つておるのじゃ！？儂は男じゃぞ！」

零「別にそんなの関係ないんじゃないか？久保や清水もそうだが、同姓を好きになるのは別にいいと思つた。相手がイヤがらなければだがな。」

秀吉「そ、そつかの？」

やつぱり、気になつてたみたいだな。

零「俺は姫路達よりお前を応援するよ。ところよつお前らを恋人同士にしてやる。」

秀吉「少し考へさせてほしこのじや。」

零「別にいいだ。でも、やつぱり、明久が好きなんだな。」

秀吉「あまり大きな声で言わないでほしこのじや。」

零「了解。あとこれやるよ。」

みんなに渡したことのある明久の女装写真集。

秀吉「これは儂の宝であるのじや。」

零「喜んでくれて嬉しいよ。やることがあるから行くだ。」

んじや、ちょっと協力者を増やすか。

零「優子、ちよつといいか?」

優子は眞面目に回答してた。

優子「ん、何がしり?」

零「お前つて、Bえ」

優子「何を言つてゐるのよ。」

零「でも、本当だ。」

優子「大きな声で言わないでよ。」

零「ア解。あれ、デジヤウ?」

優子「何、言つてゐるのよマンタ?で、それがどうしたのよ。」

零「お前は秀吉を男だと思つてゐるのよ。」

優子「当たり前でしょ。」

零「秀吉が男を好きになつたとしたら?」

優子「詳しく述べなさい。」

零「相手は明久だ。」

優子「吉井くん!/?確かにあり得ない話じゃないわね。」

零「秀吉を応援してやりたいんだが、手伝ってくれないか?」

優子「いいわ。その話のつたわ。」

零「わすが腐女子。」

優子「そういう訳じゃないわよ。秀吉の演劇をバカにしてたし。それに、あんなのでも私の弟だからね。」

零「お前凄くいい奴だな。」

優子（その顔は反則よー。）

零「鬼^{アレハ}でやることがあるから、行くぞ。」

フルルルルルルガチャ。

根元「なんだ、袁川？」

零「いい加減、女装登校を辞めたくないか？」

根元「何をすればいいんだ？」

零「これをやつてくれ。」

放課後

伝説の木の下

雄一「ギリギリ逃げきれた。待ち合わせ場所はここだな。」

根元「坂本、お前のことが好きだ！」

雄二「お前かよー。」

ドカ！

雄一「こんな奴の為に俺は頑張ったのか？最悪だ！」

実はあの後

零「女装して伝説の木の下で雄一に会面したら、卑怯なことをしない限り、自由にしてやるよ。」

根元「坂本に会面した？」

零「で、やめるのか？」

根元「へつらひませんよ。」

零「録音してあるがな。」

条件付きとほこえ、俺も甘くなつたな。

休日（前書き）

作者が恋愛パートがはてしなく苦手なようでこつも以上に駄文になっています。

バカテストは今回ありません。

休日

霧島サイド

プルル、メールがきたみたい。

潤からだ。

潤『翔子、俺好きな人が出来たんだが、どうすればいいと思つ?..』

えーっと。

霧島『手錠をかけて、家にお持ち帰りすればいいと思つ。』

送信

潤『いや、それはまずいだろ!?』

霧島『じゃあ、デートに誘つてみれば?明日は休みだし。』

潤『それはいいな。ありがとう。翔子。』

うん、良かった。役に立つて。

でも、潤も好きな人が出来たんだ。

しかも、相談してくれるなんて。

優子や愛子と同じで。

翌日

零サイド

ピンポーン

誰か来たみたいだな。

ガチャ

潤「突然邪魔してすまない。零、今日は暇か？」

零「本当に突然だな。まあ、いい。立ち話もなんだしあがれ。」

潤「それじゃあ、お言葉に甘えて。」

潤をソファーに座らせる。

零「で、なんのよつだ？」

潤「いやな。映画のチケットが一枚あったから、お前が暇なら誘おうと思つて。」

零「まあ、暇だが。何故、俺なんだ？」

潤「えっと、いや、Fクラスに入ったし交流をと継つてな。一番、お前が話し安かつたからな。」

零「そうか。俺は別にいいが。」

ピンポーン

零「悪い。誰か来たみたいだ。」

ガチャ

優子「今日、暇? カフェで秀吉と吉井へんこについて今後のことを話したいんだけど。」

零「ちよつと待て、一回あがれ。」

潤「誰か来たのか? 優子?」

優子「おじやまします。えつ、潤?」

潤・優子「『どうしてこんなだ・の?』」

説明中

潤（まさか、優子が零のこと好きだなんて。）

優子（まったく同じことを考えていたなんて。）

零「どうしたんだお前ら?」

零「また、誰か来たみたいだ。」

ガチャ

工藤「零くん。約束の柔道の代わりにゲーセンに行かない？」

零「お前もか。部屋にあがれ。」

工藤「お前「も」どうこう」と？」

零「来れば分かる。」

潤・優子「「愛子ーー?」」

零「説明が面倒だから、しどこで。その間に飯食つてくれるから。」

説明中＆食事中

零「食い終わったけど、どうなったんだ?」

潤「結果、全ての場所を全員で行くことになった。」

零「凄い結果に行き着いたな。」

潤「それじゃあ、まず最初は俺の映画館だ。」

そんなこんなで映画館。

零「とにかく、チケットは2つしかないんだろ。」

優子「それくらい自分で払うわよ。」

零「別に俺が出してもいいだ。10万程持つて来たから。」

工藤「それ学生の持つよつの金額じゃないよねー?」

零「自分で稼いだ金だ。問題ないだろ。」

優子「アンタ、何してるの?」

零「企業秘密だ。」

潤「怖くて聞けないな。」

零「なんでもいいから、ひとつと買つてこい。」

映画代を渡す。

おっと、あれは明久達か。

映画代が高くて困つてるみたいだな。

だから、ちゃんと節約しろと言つたのに。。

今月は見逃すが、来月ちゃんとしてなかつたらO - H - A - N - A
- S - H - Hだな。

後は雄一か。手錠は見なかつたこととするよ。

おつ、愛子たちが戻つたな。

零「といひで何を見るんだ?」

潤「えーと、『着信無し』。」

零「それは、面白いのか?」

愛子「ちやんとしたホラーじこよ。」

潤「ホラー?」

零「何、驚いてんだ?お前が持つて來たの。それに、まさかホラーガが苦手とか?」

潤「まさか、そ、そんなはずあ、ある訳ないだろ。」

潤(母さんのバカ!俺がこいつの苦手なの知るの...)」

「今まで分かりやすい反応する奴普通いないだろ。」

零「あー、分かった。分かった。」

潤「なんだその田ー信じてないだろー?」

零「信じてる。信じてる。」

潤「嘘だつ!」

ひぐらしネタかよ。

零「分かったから、そろそろ上映するから行くぞ。」

1時間後

潤「ひつぐ、ひつぐ。もつあんなのヤダ。」

大変です皆さん。潤が壊れました。

上映中は他の人に迷惑なので声を出さなかつたけど、めっちゃ泣いて抱きついてきました。

ドンだけ怖かつたんだよ。

零「次は喫茶店だろ。ケーキを買つてやるから、泣きやめ。」

潤「ホント?」

涙田で上田遣いつて、止めてくれない。だって、戦場ヶ原の顔でだよ。阿良々木だったら理性ぶつ飛んでるよ。

零「ホントだから。」

さて、空氣かしてた二人は

優子・愛子（（い）な。潤。零に抱きついたり出来て。（）

そろそろ次に行きますか。

さて、喫茶店は存知、清水の家です。

優子「ここスイーツはどれもおいしいのよね。いくらでもいけるわ。」

零「それはいいが、太るぞ。」

優子「なー！女の子にそれはないでしょー。」

零「そうだが、お前の生活を考えたらその結果にいたるだろ。」

優子「だから、なんでアンタが知ってるのよー。」

零「禁則事項です。」

優子「ここでハルヒネターー？」

零「秀吉と一緒に走つたらどうだ？」「..」

優子「確かに、最近お腹が出てしまって、余計なお世話よー。」

零「なんなら、俺も一緒に走つてやるから。」

優子「えっ？まあ、それなら走つてもいいかな。」

優子（零と一緒にいられる時間が増える。）

零「暇な時だけだがな。」

優子「うん。」

さて、今回空氣だった二人は。

潤はそつきの映画で自棄ぐいしてゐる。

愛子（ずるいな。今日僕だけ零と会話出来てないよ。）

最後の場所に行きます。

ゲームセンター

愛子「じゃあ、僕と勝負しようか。零くん。」

零「別にいいぞ。何をするんだ？」

愛子「じゃ、音ゲーで。」

優子「私達も後でやる。」

太鼓の達人を開始

一曲目終了

鬼フルコンボ

愛子「さすがだね。零くん。」

零「お前もな。」

潤「俺達じゃ適わないな。」

零「じゃ、次だ。」

一曲目終了

また、鬼フルコンボ

ギャラリーが集まってきたな。

零「他のやつに替えよつぜ。」

愛子「そうだね。人が集まってきたし。」

ダンスゲーム

また、フルコンボを繰り返してたら、ギャラリーが集まってきた。

他のゲームも同様に進んだ。

零「人がすぐ集まり過ぎだる。」

愛子「久々に楽しめたよ。」

零「同感だ。張り合える奴はそつそつこないよな。強くなつた理由とかあるのか？」

愛子「よくゲーセンに行くしね。」

零「そうか。」

優子「あれやらない?」

優子が指さした先はプリクラがある。

零「あれなら、お前らでも平氣か。」

潤「俺達が下手なわけじゃないだろ。お前らが普通じゃないだけだ。」

「

零「まあ、そうか。」

愛子「それより早くやろ!」

プリクラは何故か、俺と一人きりで撮りたいと全員が言いやがるし、全員で撮るときは立ち位置でもめるので疲れた。

こんな感じで1日が終わった。

落ちがねえー。

？？？

？？？サイド

やつぱり、彼を選んで成功だつたわ。

こんな面白い状況にしてくれたし。

でも、新キャラを出さなくちゃいけなくなるとは思わなかつたわ。

一応、釘を刺しておこうかしら？

まあ、いいわ。原作が壊れるのは本望だしね。

次は確か、清涼祭だつたかしらね。

問題が起きたのは見て見えるわね。

さて、その問題をどうひき壊すのかしら。

アタシのために努力してもらわないとね。
あやははははははは！

哀川 零サイド

はつくしょん！

誰か噂してんのかね？

清涼祭出し物決め（前書き）

バカアンケート

あなたが今欲しい物は何ですか？

姫路 瑞希

クラスメイトとの思い出。

教師のコメント

なるほど。お密さんの思い出になるよつな、そういう出した出し物もいいかもしませんね。写真館とかも候補になりうると覚えておきましょう。

土屋 康太

Hな本（訂正）成人向けの本

教師のコメント

訂正の意味があるのでどうか？

吉井 明久
カロリー

教師のコメント

この回答に君の生命の危機を感じます。

哀川 零
死神の眼

教師のコメント
寿命半分で取引してください。

清涼祭出し物決め

清涼祭については、原作知識がある人には必要ないとと思うが、文月学園の学園祭だ。

他のクラスでは、お化け屋敷や出店などをやることが決まっているが、俺達Fクラスは、

零「ああ、こい！明久。」

俺はピッチャーの明久に向かつて、バットを向ける。

そう絶賛野球中。

明久「ホームランサインだと！」

明久（雄一、どうする？）

雄一（ホームランサインをしているから、外に外せ。）

明久（了解。）

零は外れた球に向かつてバットを振る。

明久・雄一（かかった。）

外れた球はバットに当たり、その球は明久の顔面に当たる。

明久「グハッ！」

零「ピッチャーに向かつてバットを向けたんだから、ピッチャーに当たるサインに決まってるだろ？が。」

雄二「どこの常識だ！」

鉄人「何をやつてんだ！バカ共！」

げつ！鉄人だ！

雄二「逃げるぞ！」

俺と明久と雄二は一緒に逃げる。

明久「そんなこと出来るわけないだろ？！」

何があつたんだ？こいつら。

しうがない。こいつら置いてくか。

俺はナイフを壁に刺し、登つていく。

鉄人「どんだけ、規格外なんだお前は！？」

雄二「俺達を置いていくな！」

零「知らんわ。頑張つて逃げろよ。」

雄一「さて、Fクラスの出し物を決めなくてはならないのだが、実行委員を決めてそいつに任せたいと思つ。」

零「雄一。ちよつと用事があるから行つてくる。」

雄一「用事つて、なんだ？」

零「悪いがそれは企業秘密だ。」

そう言つて俺は教室を出る。

試合戦争で姫路の転校は無くなつたが、教頭の計画をぶち壊さないといけないからな。

学園長室

零「おい、ババア暇潰しに來たぞ。」

零『盗聴機があるから、メモで会話をするぞ。』

藤堂「なんだいきなり。」

藤堂『分かった。そんな物まで用意してたなんてね。』

零『で、どこまで修理が出来たんだ?』

藤堂『代理召喚型は間に合つたが、同時召喚型は平均点を越すと、能力付与型はAクラスレベルに達ないと暴走しちまつよ。』

能力付与型は原作に登場しなかつた物である。データベースにその情報が乗っていた時には驚いた。

能力付与型は武器を手放し、点数を消費し、ランダムに腕輪のような能力が使えるようになるというものだつた。

藤堂『さて、どう回収する気だい?』

零『どうつて、大会に出るしかないだろ。場合によつては4人程協力者を使いたいんだが、この問題について伝えていいか?』

藤堂『ダメと言いたいところだが、なりふりかまつてられないからね。許可するよ。』

零『助かる。』

藤堂「こんだけ協力するからには、絶対にチケットを手に入れなよ。」

零「了解した。」

普通の会話では、雄一が原作で行つていた取引をしていた。

Fクラス

零「えっと、ただいま。」

雄一「戻ってきたか。出し物決まつちまつたぞ。」

零「で、何になつたんだ？」

零（中華喫茶になつてると思つがな。）

雄一「コスプレ喫茶（女装も可）。」

零「何があつたんだ！？」

雄一「玉野が出した案なんだが、バカ共はコスプレといつていろばつかり見てたみたいで決まった。」

零「俺は厨房しかやらんぞ。」

雄一「あいつらが納得するかな？」

零「俺の見たつて、誰も特しないだろ。」

雄一「明久と同じくらいの鈍感野郎だな。」

零「なんのことだ？まあ、いい。お前さ、召喚大会の賞品が何か知つてるか？」

雄一「興味ねえよ。」

零「如月グランドパークのプレオープンペアチケット。」

雄一「ぐつ、それは本当か！？」

零「ちなみに、それは優勝と準優勝の一組にくばられる。」

雄一「絶対に翔子の奴は出てくるぞ。」

零「しかも、幸せになるというジンクスを作るために無理矢理結婚させらるそうだ。」

雄一「行かなくても結婚、行つても結婚だと…」

零「それを回収するよつて権限を少し貰つて、頼まれているんだが、どうする?..」

雄一「協力しよう。」

零「話が早くて助かる。貰つた権限は何回戦ぬどの教科を使うかといつものだ。」

雄一「なるほどな。それで、あと一人は誰にするつもりだ?..」

零「明久と秀吉かな。」

雄一「なんで明久なんだ?」

零「今、明久と秀吉をくつ付けよつと思つてゐからな。勝てるよう作戦を頼む。」

雄一「秀吉は男だぞ。何を考えてんだ?..」

零「いや、面白そうじやん。」

雄一「確かに否定できなーいな。」

零「だる。他の奴とくつつくより絶対に面白い。」

雄一「まずは、明久達を呼ぶか。」

明久、秀吉を召集＆プレオープンペアチケットなついて説明。

零「手伝つてもらえないか?」

明久「いいよ。零には助けて貰つてるからね。」

秀吉「同じく、了解したのじゃ。」

零「ありがとよ。」

雄一「さて、チーム分けだが、どうする?」

零「俺と雄一、明久と秀吉でいいんじやないか?」

秀吉「それでは、点数に偏りが出るのではないかの?」

零「お前らのブロックには、Aクラスレベルが入らないよ」とトーナメント表をいじくるから安心しない。」

明久「出た。零の職権乱用。」

零「まあ、そんなわけでお前ら一人は試召戦争を経験してゐるから、なんとかなるだろ。」

雄一「それじゃ、後の作戦は任せてくれ。」

零「それはいいが、雄一は出し物に参加する気は無いのか？」

雄一「一応、参加はするがクラス代表として動く気はないな。」

零「お前頑張った方がいいぞ。Aクラスの奴らを取り入れたから、そいつらに人望が向いていつてるからな。」

明久「確かに、雄一より霧島さんや久保くんを代表にした方がいいって声を最近聞くし。」

雄一「そんなことになつてたのか！？」

零「いつも時に引っ張つてかなことマズいぞ。」

雄一「出し物の方も実行委員の木下姉に任せっきりはやめるか。」

よし、雄一が真面目でやるようになつた。

つーか、優子が実行委員してたんだ。

清涼祭初日一回戦（前書き）

バカアンケート

喫茶店を経営する場合、制服はどんなものがいいですか？

姫路 瑞希

家庭用の可愛いエプロン

教師のコメント

いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、良い考えです。

土屋 康太

スカートは膝上15センチ、

教師のコメント

裏面までびっしり書かなくても。

吉井 明久
ブラジヤー

教師のコメント

ブレザーの間違いだと信じています。

哀川 零

俺のクラスは知らないうちにコスプレになつてた。

教師のコメント

……頑張ってください。

清涼祭初日一回戦

あれから、雄一は物凄い統率力を見せ、完璧にまとめていった。

で、清涼祭当日

みんなコスプレをしてる。

メインキャラは

哀川 零 戯言遣いのコス

吉井 明久 落とし神のコス

坂本 雄一 図書館で戦ってる人のコス

土屋 康太 ガーゴイルがいる家の長男のコス

木下 秀吉 迷い牛のコス

姫路 瑞希 夢の部の制服

島田 美波 白い魔法使いのサポートのコス

霧島 翔子 巫女服

木下 優子 陵桜学園の制服

工藤 愛子 常盤台中の制服

久保 利光 魔法学校の天才コス

天東 潤 直江津高校の制服

須川 亮 チャイナ服

清水 美春 自称神のコス

玉野 美紀 メイド服

声優ネタかよ！

見つかからなかつた奴は一般的なコスプレです。よく分からなかつたら自分で探してね。

雄二「で、厨房の方は平氣なのか？」

零「愚問だな。俺がいるんだぞ。」

雄二「それもそうだな。」

姫路「私も手伝いたかつたんですけど。」

零「女子は全員ホールじゃないといけないからな。」

姫路「そうですね。」

零（客を殺すわけにはいかないからな。）

明久（ナイス零。）

零「俺達は召喚大会で抜けるが、その時は康太と須川頼むぞ。」

康太「…………任せろ。」

須川「やつてこい。」

島田「召喚大会って、もしかしてアキも出るの?」

明久「えっ、そうだけど。」

島田「もしかして、目的はオープンチケット?」

明久「うん、そうだけど。」

島田「誰と幸せになりに行くの?」

明久「えっと。」

明久は困つて俺と雄一を見る。

零・雄一「秀吉と行くんだよ。」

明久「うん。 そう両手首がねじ切れるように痛―――!」

島田と姫路が両側から手首を360度曲げる。

零「おい、そろそろ予選だから放してやれ。」

優子・愛子・潤「零は誰と行くの(なんだ)?」「

零「なんだいきなり。第一俺の目的は腕輪だ。」

優子・愛子・潤「「「そつか（なんだ）。「」「」」

すつづーシンク口率。

明久を拾つて会場に行く。

零「明久、秀吉、決勝までやんとあがつてこいよ。」

明久「そつちはAクラスレベルがいつぱいいるんだから、そつちこそ頑張つてね。」

秀吉「絶対に勝ち上がるのじや。」

零「じゃあ、雄一行くか。」

雄一「ああ。」

予選会場

零と雄一が会場に上がる。

岩下「何、Fクラスが私達を待たせたるのよ。」

零「悪い悪い。雑魚A。」

菊入「Fクラスが何言つてんのよー。」

零「黙れ、雑魚B。そのFクラスに負けたBクラスがほざくな。」

雄一「Bクラスの連中だったのか。」

零「覚えてなくともしちゃがねえよ。だって、姫路の腕輪で一瞬でやられたからな。」

雄一「ああ、あの時の。よく覚えてたな。」

零「そりゃあそうだろ。あんな出落ちキャラはそいつらいなーぜ。」「確かにな。」

雑魚A「言わせておけば！」

雑魚B「さつよーつて、雑魚表示になってるわ！」

高橋「いい加減、はじめてください。」

零・雄一・岩下・菊入「「「サモンー」「」「」」

岩下の召喚獣は忍者服にクナイ。

菊入の召喚獣は鎧に剣。

雄一の召喚獣は特効服に、

菊入「二人共、素手？」

雄一「よく見るメリケンサックがついてるだろ？が。」

零「説明すんのめんどい。」

岩下「雑魚がいる!」

零「てめえがな。」

その瞬間、岩下の召喚獣の体がバラバラになる。

零「じゃあな。出落ち。」

雄一「オラオラオラ!」

『哀川 零&坂本 雄一VS岩下 律子&菊入 真由美

現代文
373&238VS0&184』

零「雄一、お前は戦争に参加していないんだから、練習しておけ。」

雄一「そつせせてもらひ。」

零「でも、不良が女子をいじめてるよ!にしか、見えねえな。」

雄一「つむせえ!それ、ファイ!シユだ。」

高橋「勝者、哀川&坂本ペア。」

福原「勝者、吉井&木下ペア。」

おっと、ちゃんと明久達も勝ったのか。つーか、会場が思つたより

近かつたな。

零「雄二、そろそろ戻りますか。」

雄二「そうだな。」

清涼祭初日 | 回戦（前書き）

バカアンケート

喫茶店を経営する場合、ウエイトレスのリーダーはどのように戸選ぶべきですか？

? 可愛いらしゃ

? 統率力

? 行動力

? その他（ ）

また、その時のリーダーの候補も挙げてください。

土屋 康太

? 可愛いらしゃ

候補：誰を選べばいいか、分からぬ。

教師のコメント

確かにFクラスには現在、綺麗どころが揃っていますからね。ですが、ちゃんと選びましょう。

吉井 明久

? 可愛いらしゃ

候補：姫路瑞希（訂正）、木下秀吉（訂正）、霧島翔子（訂正）、工藤愛（訂正）、天東（訂正）、木（訂正）、島田美波

教師のコメント

用紙についている血痕が気になります。

坂本 雄二

?その他（結婚相手）

候補：霧島翔子

教師のコメント

どうして霧島さんが用紙を持ってきたんでしょう？

哀川 零

?統率力

候補：ジャンヌ・ダルク

（?を選んで、実際にいる生徒を書いたら殺される気がした。）

教師のコメント

……今日は多田に見ましょう。

清涼祭初日一回戦

Fクラス

現在報告

果てしなく忙しい。

客がふざけてるほど入ってるからな。

須川「ミートスパゲッティを2つ。」

零「了解。」

康太「…………カツ丼1つ。」

零「了解。」

明久「海鮮寿司を3人前。」

零「了解。」

明久「了解していいの?」

零「金さえ払えばな。」

雄二「信頼を2つ。」

零「了解。」

明久「そんな物、本当に作れるの！？」

零「信頼って、名前の料理を勝手に作っちゃえば問題ないだろ。」

明久「そんなんでいいの？」

零「実際に見たことねえから大丈夫だろ。ほれ、ミートスペゲッティ、カツ丼、海鮮寿司が出来たぞ。」

そう、俺がいる場合はメニューに無い物でも作っている。

材料があり、値段は高く設定されてるけどな。

常村「おい、責任者出しあがれ！」

雄一「嫌がらせか？」

零「はあ、雄一ちょっと一緒に来てくれ。」

雄一「最初っから、そのつもりだ。」

夏川「おい、責任者を出せって言ってんだよー。」

零・雄一「おうあああー。」

雄一は常村をぶん殴り。

零は夏川の眼に指をぶつ指す。

雄二「我々が責任者と料理長ですが、何かご不満がありましたか、お客様？」

夏川「不満も何も今暴力を振るわれたんだが。」

雄二「これが、我々のパンチから始まる」

零「田瀆しから始まる」

零・雄二「交渉術です。」

常村・夏川「なんじゃそりゃあー!?」

零「めんどい、明久何があつた?」

明久「料理に髪の毛が入つてたと文句を言つてきたんだよ。」

零「随分、まともな文句だな。」

常村「だろ。これを見ろ!」

髪の毛を指す。

零はその毛と常村の髪をむしり取り、ケースに入れる。

常村「いつてーー! いきなり何しやがるー!」

零「DNA照合してんだよ。」

明久「そんなこと出来んのー!?

零「細かいところまでは分からぬが、同じかどうかは分かるよ」
にしてある。時間をかけねば出来るがな。」

ペーパー

零「やつぱり、一致したみたいだがどういふことですか？」常夏コンビ。

常夏コンビから汗が出来る。

零「警察でも呼びますか。営業妨害つてことで訴えるけどもでもありますし。あーあ、受験生なのに。」

常村「それだけは辞めてくれ。」

零「だつてよ雄一、どうするの？」

雄二「じょうがない。許してやるか。」

以外だな。

夏川「ほ、本当かー？」

雄一「ああ、しばいた後でな。」

やつぱり雄一だ。

雄一は常村をドロップキックし、締め業でフィニッシュ。

零は夏川を格ゲーでやつたら嫌われそうな、はめ業を使用。

零「お客様の贋をと、お見苦しい物を見せてしまつてすみませんで
した。このよひつなゴリを許してやつてトセ。」

まあ、その後に他に問題は起きないまま時間が経つた。

んで、召喚大会一回戦目

相手ペアは根元&小山ペア

根元「げつ、お前らかよ。」

零「予想外のペアだな。小山、別れたんだろ。」

小山「そつなんだけど、この変態が女装はもつしないから、よりを
戻してくれって言つから、この大会の結果次第で考えてもいいって
言つたのよ。」

零「そうか。根元、未練がましいな。」

根元「つるやいーーーそういう訳だから、あの契約を使うんじゃねえぞ。」

「

零「分かってるよ。けやんとせつてるんだから、契約は使わねえよ。」

「

根元「そうか。そこまで鬼じやないか。」

零「とにかく小山。このテープを聞いてみたくは無いか?」

小山「何ぞのテープ?」

零「今から流すから聞いとけ。」

テープを流す。

根元『坂本、お前のことが好きだ!』

ラブレターの時のです。

零「ちなみに一切、手を加えてません。」

根元「お前が言えって、言ったんだろうが!」

雄二「零、てめえの仕業だったのか!物凄く気持ち悪かつたんだぞ
!」

あつ、雄二にばれちつた。

小山「私達の負けでいいわ。後、近寄らないでね。変態が。」

小山は根元に言い捨てる。

えつ、酷い?

しうがないじやん。科目が苦手な英語だったんだから。

清涼祭初日昼食時（前書き）

アンケート

霧島＆潤VS優子＆愛子

霧島＆潤VS姫路＆島田

が、見たいかどうか、感想に送つてください。

清涼祭終了まで受け付けます。

バカテスト 英語

マザー《母》から(?)を取つたら、(?)《他人》です。

姫路 瑞希

マザー《母》から(M)を取つたら、(Other)《他人》です。

教師のコメント

その通りです。このような関連づけた考え方も便利でしょう。

吉井 明久

マザー《母》から(お金)を取つたら、(親子の縁を切られるの)
《他人》です。

教師のコメント

英語関係無いじゃないですか。

土屋 康太

マザー『母』から（ミ）を取つたら、（シ）『他人』です。

教師のコメント

土屋くんの『MSU』でも、『SM』でも反応に困ります。

哀川 零

マザー『母』から（遺産）を取つたら、（用済み）『他人』です。

教師のコメント

どれだけ酷いんですかあなたは！？

清涼祭初日昼食時

Fクラス

雄一はトライに寄つてくところとて、俺は一人で戻つてきた。

優子と愛子が落ち込んでる。

零「お前り、どうしたんだ?」

愛子「いやあ、召喚大会で翔子達に後づきとどけられただけやつてね。」

零「お前らも出てたのか。」

優子「そりゃ。でも、翔子と潤のチームに当たってしまったのよ。」

零「そりゃ、残念だったな。」

優子「何を言つてるのよ。このまま行つたら次の次で当たるわよ。あんた達。」

優子「心配なんとしてないんだから。」
愛子「優子つて、シンデレラを素直つてゐるの?」

優子「誰がシンデレラ?」

雄一「バカなお兄ちゃんは沢山いるんだが。」

雄一が島田妹を連れてきた。

零「まさか、その中に俺が入ってるなんて言わねえよな。幼女誘拐犯。」

雄一「誰が幼女誘拐犯だ！」

零「霧島、雄一は子供が好きそうだ。」

雄一「な、何を言つんだ！」

霧島「……今から、一緒に作ろう。」

雄一「ギヤー——！」

明久「霧島さん、夜にして。」

霧島「……分かつた。」

葉月「あつ、バカなお兄ちゃん。」

零「やつぱり、明久か。」

明久「僕がバカだつて言つのか！」

零「えつ！今まで気付かなかつたの！？」

葉月「バカなお兄ちゃんは物凄いバカですよ。」

明久「小学生にまで。第一君は誰?」

葉月「ふえ、バカなお兄ちゃんは葉月のこと覚えてないんですか?
『バカなお兄ちゃんいませんか?』って、一生懸命探したのに。」

雄一「明久じゃなくてバカなお兄ちゃんが」みんな。

秀吉「バカなお兄ちゃんはバカじやからの。」

零「そうだ。バカなお兄ちゃんは学園を代表するバカだからしきつ
がないんだよ。」

葉月「だつて、バカなお兄ちゃんにファーストキスまであげたのに。
」

島田「瑞希。」

姫路「美波ちゃん。」

姫路・島田「殺るわよー。」

毎回思つんだが、本当に明久のことが好きなのか?

それより、

零「警察は110番だから。」

明久「リアル警察だけは止めて!」

零「はあ、口を開ける。」

明久「えつ、何で！」

零「食い物やる。」

明久「ホント！分かった。」

明久は口を開けたので、周りに見えないようくッキーを入れる。

姫路特性の

明久は倒れたので、姫路と島田は慌てて離す。

島田「ちよつと零、何を食べさせたのよ！』

零「バイオ兵器。』

姫路「なんて物食べさせてんですか！』

作った本人が言つなよ。

零「ちよつと起こすから、待つてる。』

明久を裏に連れてく。

零「明久、起きる。』

明久「大丈夫だよ！』

零「無事だったか。」

明久「あの川を渡ればいいんでしょ。」

零「大丈夫じゃなかつたー戻つてこいー。」

明久「六万!? 無理だよ。零に言われて最近やつとちゃんととした生活を送つてゐるのにー。」

零「明久、言われたことを守つたことは褒めるが、そこは、六文が六万だつてことこ文句を言おう。」

明久「あれ、こじは?」

零「ナイス川渡し。」

明久「そういうえば零ーよくもあんな危険物を僕に食べさせたな!」

零「悪かった。だが、ちゃんとまともな生活を送つたんだな。」

明久「約束だからね。」

零「その褒美として、あのちびが誰か教えてやる。」

明久「えつー知つてるの零?」

零「俺の情報を舐めるな。あのちびは島田の妹で、お前が観察処分者になつた2日前に会つてこらはずだ。」

明久「あつ、ぬいぐるみの子か。」

零「思い出したか。なら、そろそろ戻るぞ。」

明久「そうだね。」

俺達はみんなの元に戻る。

零「今、戻ったぞ。」

雄一「零、ちびっ子からと翔子が佐藤から気になる情報をもらつた
そうだ。」

零「どんな内容だ。」

雄一「Eクラスの悪口を言つてる輩がいるやつだ。」

零「あの常夏ノンノビか?」

雄一「十中八九そうだろう。」

零「じゃ、今から行くか。」

雄一「そうだな。メンバーは召喚大会がまだある奴らだな。」

零「ついでに昼飯を食つてくる訳だな。」

とこつわけで、零、明久、雄一、秀吉、姫路、島田、霧島、潤で来てます。

てか、姫路と島田も出てたんだ。

次に霧島、潤ペアに当たるみたいだけど。

霧島「……で、美穂。ビニにこるの？」

佐藤「あ、代表。あいつらです。」

霧島「……私はもう代表じゃないから、名前で読んで。」

佐藤「あ、すみません。それじゃ、翔子さん。」

霧島「……うん。それでいい。」

俺達はさつき佐藤が指した方向を見ると常夏コンビが騒いでいる。

常村「Fクラスの料理はクソ不味かつたな！」

夏川「しかも、クソ高かつたしな！」

常村「あんなので、よく金が取れたな！」

雄一「あいつらはいつもからいんだ？」

佐藤「初めは『こんな事やつて大丈夫か？』や『やるしかねえだろ。』とか、言つてたんですけど。だんだんエスカレートしてあんな風に。」

雄一「喫茶店の制服を1つ貸してくれ。」

零「いや、2つだ。」

雄二「まさか、明久だけじゃなくお前まで着る気がー!？」

明久「僕が着るのは前提なのー!？」

零「まあ、そうだが。俺の料理をバカにしてただで済むと思つてんのかね? アイツラ。」

雄二「殺るなよ。」

零「社会的には?」

雄二「許可する。」

零「了解。」

佐藤「持つてきましたよ。」

数分後

明久は秀吉と玉野の腕でアキちゃんに大変身した。

俺の場合は、なんか中性的だから必要無いらしい。

なんか涙ってきた。

ただ女子の制服を着た俺を見ただけで、何故かいた康太は鼻血を出しき、雄二是霧島に目潰しされるし、潤は暴走、明久にいたつては『第一の秀吉』とまで言いやがったよ。

零「それじゃ、明久行くぞ。」

明久「うん。」

零は常夏コンビのテーブルにクッキーを出し、

零「サービスです。良かつたら召し上がってください。」

常村「おお、そうか。ありがとよ。」

夏川「Fクラスとは大違いだな。」

常夏コンビはそのクッキーを食べたとたんに襲い掛かってきた。

さつきのクッキーに惚れ薬の一種と理性が保たなくなる薬を入れておきました。

効果は20秒位です。

零・明久「キヤー————！」

私達は襲い掛かってきた常夏コンビをぶつ飛ばす。

常村「あ、あれ俺達は？」

夏川「なんでこんなに体が痛いんだ？」

雄二「何だとだ！？」

零「あの人たちがいきなり襲い掛かってきたんです。」

常村「なんのことだー!?」

夏川「そんな」としてないぞー。」

密1「俺は見てたぞー。」

密2「そーだ!俺の目は節穴じゃないぞー。」

密3「この女の敵ー。」

零「怖かつたよ。」

零の嘘泣き。

密1「こんな娘を泣かして、やつちまえー。」

密が一斉に常夏コンビに襲い掛かる。

常村「一体、どうなってんだ?」

夏川「早く逃げるぞー。」

常夏コンビはクラスを出ていく。

密3「もう大丈夫よ。あいつらはいなくなつたから。」

零「ありがとうございます。」

涙目 + 上目遣い

何人が鼻血出して倒れた。

そんな訳で常夏コンビが言つてたことは嘘だらうつて、話になつた。

秀吉（あの腕、演劇部に欲しいのじゃ。）

潤（危うく、氣絶するとこだつた。）

この時の写真が裏でマッソニー商舎で高値で売られていることを会計の零は知らない。

この少女を崇める信者が100人以上現れたことを零は知らない。
零がほとんど秀吉と同じような扱いになつたことを零は知らない。

清涼祭初日二回戦

二回戦の相手は常夏コンビだ。

原作と違つて観客あります。

ちなみに俺の格好は澄丘学園の制服を着ている。

康太が島田妹と一緒に作っていた。

島田妹のは夢の部の受け付けの口ス。

作るの早!

この格好は宣伝&常夏コンビをアウターにするために。

では、さっそく

零「キヤ————！」

高橋「どうしたんですか？哀川さん？」

高橋女史、この格好に触れないのは嬉しいけど、何故顔が赤いんですか？

零「実はあの変態共がいきなり襲い掛かってきたんです。」

高橋「それは、本当ですか！？」

雄一「ああ。しかも、あいつらはやつたそばから見に覚えがないとか、言いやがつたんだよ。」

夏川「本当に何も知らないんだ!」常村「第一そいつは男だろ!」

観客「ふざけんな!どこが男って言つんだ!」

観客「少なくとも男の娘だ!」

観客「引っ込め!」

計画通り常夏コンビはアウターになつた。

高橋「どうしますか? やりますか?」

夏川「やらないうて、選択肢が存在してゐるのか!?」

常村「やるに決まつてゐるだろ! へつ後悔をせいやるよ。残念だつたな。今回は俺達の得意な数学だからな!」

高橋「そうですか。それでは、始めてください。」

零・雄一・常村・夏川「「「サモン!」」

《袁川＆坂本VS常村＆夏川

数学

7 3 1 & 2 7 5 V S 4 3 8 & 3 9 7》

零「得意なんですか? (笑)」

常村「なんだ！その規格外！」

夏川「700点オーバー！？」

零「雄二、今回あなたの出番はありませんよ。」

雄二「別にいいが、その喋り方を止める。」

零「それじゃあ、替えます。《キメラ》。」

《キメラ》を発動し、現れたのは

麦わら帽子にぼたぼたのズボンをはいて、釘バット《愚神礼賛》を使用している。

点数も合計になる。

夏川「1000点オーバー！？無理だろ！」

常村「ちつ、腕輪を使つてやる。」

いつの間にか、常村の召喚獣の頭が無くなっている。
零「零崎は始まってるつちや！」

常村「顔面が潰れるようにイッテエエ——！」

と、言つて氣絶した。

零「800点が越えたから、特殊能力が発動したからつちやな。」

夏川「なんだそりゃあ！？」

零「この召喚獣の能力は《仲間》^{チーム}だっちゃ。なにかしらのバグを起こす能力だっちゃ。」

雄二「今回は、相手を観察処分者になつたつて訳か。」

夏川「1000点オーバーのファイードバックって、死ぬだろー。」

零「それじゃ、止めだっちゃ。」

夏川の召喚獣の胴体がなくなる。

夏川「ぐはっ。」

一瞬で墮ちちゃつた。

高橋「勝者、袁川＆坂本ペア。」

えつと、これで後は教頭と誘拐だけか。

零「高橋女史、マイクを借りていいでですか？」

高橋「はあ、構いませんが。」

零「それじゃ、観客の皆さん。Eクラスのコスプレ喫茶に来てくださいね。」

宣传を忘れずに。

零「高橋女史、ありがとうございました。」

高橋「お祭りですし、これくらいこまごまであるよ。」

零「それじゃ。」

「こんな感じで三回戦は終了。」

清涼祭初日誘拐（前書き）

オリジナルのバカテストをやつた方がいいのでしょうか？

清涼祭初日誘拐

Fクラス

康太「…………ウエイトレスが攫われた。」

なんでだ!? 行動が早過ぎるだろ!

常夏コンビを倒したのが問題だったか。

だが、手を打ったはずだぞ。

零「須川達に護衛をしてもらつたはずだぞ。」

須川「すまない。人質をとられてしまつて、手を出せなかつた。」

ボロボロになつた須川が言つ。

零「くつ、誰が攫われたんだ?」

康太「…………姫路、島田姉妹、木下優子、工藤の5人。」

零「居場所は?」

康太「…………カラオケ店。」

明久「なんで分かるの?」

康太「…………発信機。」

明久「OK。なんで待つてんのかは聞かないよ。」

雄一「それじゃ、明久、零、康太行くぞ！」

潤「俺も行くぞ！」

雄一「いや、他の奴は店を続けてくれ。お前らは店を守れ。」

零「お前ら、俺らがない間、今度はどんなことがあらうと絶対に守つきれ！」

潤「しようがない。お前らに任せた。次の試合は2時間後だ。それまでに戻つてこい。」

零「了解した。」

さーて、俺を怒らせたらどうなつてもいいって、ことだよな。

カラオケ店

明久が乗り込んだじまつたシーンです。

雄一「あのバカ。」

零「それが明久のスゴいところだよ。さすが王子役。」

雄一「お前も王子役なんだがな。」

零「変なこと言つてないでそろそろ行くぞ。」

雄二「はあ、あいつらも苦労するな。」

零と雄二は部屋に乗り込み、不意討ちでぶつ飛ばす。

零が蹴つた奴からは嫌な音が聞こえた。

零・雄二「明久、貸しーだ！」

不良「あいつらが坂本と哀川だ！」

不良「坂本ってのは、悪鬼羅刹だが、哀川って何者だ！？やられた奴骨折れたぞ！」

零「悪いが、手加減する気はねえ。」

不良「こいつが痛い目に」

康太「…………会つのはお前。」

人質を取つた奴が康太にやられる。

雄二「ムツツリー、女子を連れて帰れ！」

ムツツリーが女子を連れて出でいく。

明久「よくも邪魔したな！」

雄二「ストレス発散にちょうどいい。」

零「Let's shall we dance?」

不良「こっちの方が数は上だ！」

不良「そうだ！全員か、こはつ！」

喋ってる最中に飛び蹴り。

不良「喋ってる最中に攻撃は卑怯だろ！」

零「知るか。」

不良に向かってガードの上から踵落とし。

ゴキ。

ガードに使用した腕が折れる。

不良「化物だ！」

零「否定しねえよ。」

不良「鬼だ！」

雄一「否定しねえよ。」

似たようなこと言われてるな。

雄一は相手を掴んで、その相手を使って殴っている。

数分後

不良殲滅

零「明久、雄一先に戻つてろ。」

明久「なんで?」

零「大事にならないよつに、後始末をしておくから。」

雄一「分かった。だが、話を後で聞かせてもらひうぞ。」

零「やつぱ、気付いたか。」

雄一「あまり、俺を舐めるな。」

零「失礼しました。元神童。妖怪に伝えといてくれ。」

雄一「しちがねえな。」

明久と雄一が部屋を出していく。

後始末するか。

ケータイで電話をかける。

不良「警察に通報するつもりか? ふん、俺達は警察にはこねがあるからすぐに出てこれるんだよ!..」

零「はあ、豚箱の方がずっと幸せなところにかけてんだよ。」

不良「はあ？」

ガチャ

零「ああ、俺だがお前のところでモルモットが足りないって言つてただろ？20人を 千万でどうだ？うん、高い？分かったよ、さつきの20%オフでどうだ？契約成立だな。取りにきてくれ。」

不良「なんて会話してんだ！？」

零「そんじやあな。2秒だけ忘れないでやるよ。

やつぱり、王子役なんて俺にはできないな。」

清涼祭初日準決勝

Fクラス

零「帰つたぞ。」

雄一「案外、早かつたな。」

零「軽い交渉をしただけだからな。それより、ぬらりひょんは？」

明久「呼び方が酷くなつてない？」

零「構わないだろ。」

雄一「もう少しで来るだろ。」

明久「さつきから、何言つてるの？」

雄一「ババアと零が何か隠してたんだよ。」

明久「えつ！ それは本当なの零！？」

零「本當だよ。起きる問題についてできるだけ対処をしたんだが、対処しきれなかつた。悪かつた。」

明久「零……。」

雄一「あんなことが起きた理由を説明はしてもいいや。」

藤堂「それはアタシから話すよ。」

雄二「ババア。」

藤堂「哀川はお前に事情を話せるように手配はしてたんだからね。」

「

零「それじゃ、説明頼むぞ。」

腕輪について説明中

雄二「やつぱり、教頭が黒幕か。」

零「俺が予想出来る中での問題は全て潰した。教頭に対しても今日中になんとかするつもりだ。」

雄二「あの常夏コンビはもう大会で敗退したからな。」

零「あのバカ共は推薦をエサにしたがってたんだよ。評判が落ちた学校の推薦なんて受け付けるところなんてないのに。」

雄二「これであいつらも静かになるだろ。」

零「大丈夫だろ。校庭に首だけ出して埋めとたから。」

藤堂「あんたは何やってんだね！」

雄二「ババアが生徒の心配をしてるだろ！？」

藤堂「来賓に見られたらどうするだね…」

雄二「やつぱり、ババアはババアだった。」

零「お化け屋敷の宣伝に使ってるから大丈夫だ。」

藤堂「それなら、いいが。」

明久「いいんだ!?」

零「放課後、クソメガネが行方不明になる予定になってるから。新しい教頭を探しておけ。」

雄二「スゴい予定だな。オイ!」

明久「零、一体何をする気なの?」

雄二「気にしたら負けだ。明久。」

零「そろそろ準決勝だ。行くぞ。一人共。」

明久「もう、そんな時間か。」

零「ちゃんと勝てよ。」

明久「そっちの相手の方が問題でしょ。」

零「それも、そうか。」

雄二「次の相手は翔子か。零、ちゃんと作戦があるんだろうな?」

零「勝つ為の作戦なりある。」

雄一「頼むぞ。」

勝つ為の作戦ならな。

会場

高橋「両ペア、揃いましたね。」

零「すいません。少し余話をさせてください。」

高橋「はあ、早く済ませてください。」

雄一「作戦か?」

雄一「分かった。」

零「そうだ。俺が言つ言葉を復唱してくれ。」

零「翔子、聞いてくれ。」

雄一「翔子、聞いてくれ。」

霧島「何?雄一。」

零「俺は考えたことがあるんだ。」

雄一「俺は考えたことがあるんだ。」

霧島「雄一の考えたこと?」

零「お前の気持ちは嬉しい。」

雄一「お前の気持ちは嬉しい。」

霧島「うん。」

零「俺は自分の手でお前を幸せにしたい。」

雄一「俺は自分の手でお前を幸せにしたい。って、オイ! テメエは何を言わせやがる!」

零「うるせえ。ちゃんとセリフを言え。」

注射器をみんなに見えないように向ける。

零「これは、常夏コンビに入れたやつの改造版でな。惚れ薬は入ってないから好きな相手に狼になる薬だ。本当に霧島が好きじゃなかつたら平氣だと想うが。」

雄一「くっ、分かった。だからそれを向けるな。」

それじゃ、霧島が好きって言つてうのと回じだ。

零「だから、ここは俺に勝たせてくれ。一緒に幸せにならう。愛してる。」

雄一「だから、ここは俺に勝たさせてくれ。一緒に幸せにならう。愛してる。」

してゐる。」

霧島「嬉しい。私も雄一を愛している。」

雄一「ちぎじょうへやけくそだー！」

潤「翔子を無力化するとは流石だな。」

零「で、どうする？ 2対1でやるか？」

潤「ダメ元でやらせてもらおうか。」

高橋「それじゃ、始めてください。」

零・雄一・潤「サモン！」

『零 & 雄一 VS 潤

物理

467 & 259 VS 472』

潤「《変体刀》。賊刀 鐸」

潤の召喚獣は鎧を纏う。

雄一「つーか、あれ刀じゃなくね？」

零「よく見る。これはビーム刃になってるや。」

あれじやあ、糸が切れちまつ。

対処が完璧たわな。

零「確かに、賊刀 鎧は衝撃を逃がす作りになつてゐるから、雄一の攻撃は食らわないぞ。」

雄一「じゃあ、どうすんだ?」

潤「おしゃべりしてゐる暇はないぞ。限定奥義 刀賊鳴!」

ものすごい勢いで突撃してくる。

零「ヤバ!」

俺は間一髪で避ける。

雄一「勝つ方法はあるのか?」

零「弱点は知つてゐる。今回も借りるが。《キメラ》。」

雄一の召喚獣と合成する。

潤「刀賊鳴!」

また、突撃してくる。

それを釘バットで受けける。

潤「いけえー!」

零「耐えろ!」

勢いがあり、押されるがなんとか踏みとどけた。

零の召喚獣はいきなり釘バットを捨て、潤の召喚獣を掴み上にぶん投げた。

潤「何！？」

零の召喚獣は釘バットを掴み、落ちてきた潤の召喚獣を野球のよう打つた。

潤の召喚獣の鎧の中で衝撃が爆発し、召喚獣が消える。

零「その賊刀 鎧は衝撃を地面に逃がしている。なら、空中で衝撃を受けたら、逃げ場を無くして爆発する。」

潤「お前はなんでも知ってるな。」

零「なんでもは知らない。知つてることだけだ。」

潤「確かにそうだ。」

高橋「勝者、哀川＆坂本ペア。」

これで残すは明日の決勝だけだな。

清涼祭初日問題撲滅（前書き）

遅くなりました。

清涼祭初日問題撲滅

Fクラス

零「やつと、終わった。」

ふざけてる程、疲れた。

どんだけ客がきてたんだよ。

あれ？ これは喜ぶことか？

雄一「材料が全部なくなっちゃったな。」

零「で、売り上げは？」

雄一「Bクラス設備に替えられるくらい。」

明久「そんなに！？」

零「俺のメニュー外注文が成功したみたいだな。」

雄一「材料が足きたことだし、明日は単純に清涼祭を楽しむか。」

零「確かに、俺達は結局Aクラスしか回れなかつたからな。」

明久「そつと決まれば、今日は帰るつか。」

零「俺はねらりひょんに設備を向上のために、売り上げを使えるよ

「うて言つてくる。」

雄二「あのババア長が要求を飲むのか？」

零「お前らには迷惑かけたからな。それくらいはさすがに飲むよ。」

明久「じゃあ、先に帰るよ。」

零「おお、じゃあな。」

竹原サイド

教頭室

クソ！あのバカ共は大会を敗退するし、雇ったチンピラ共は連絡が取れないし、後は、この盗聴機しか無いじゃないか！

零『いるか？ぬらりひょん。』

藤堂『いきなり入つてきて、何を言つだすんだいあんたはー！』

零『売り上げを設備の向上に使うと云々にきた。』

藤堂『その事かい。まあ、いいさね。あんた達Fクラスは腕輪の為に頑張つてくれたからね。』

かかつた！バカな奴やめ、これを流せばこの学園は終わりだ！

さて、放送室に向かうか。

零『なんで上手く』ことが済むと思ったのかな？竹原君。』

竹原「何！？」

バタン！

教頭室のドアが開く。

そこには哀川 零が携帯を持って立っていた。

零サイド

俺は教頭室に入つて、ドアを閉めた。

竹原「な、何だ！いきなり入つてきて。ここは部外者立ち入り禁止だぞ！」

接してくるなんて。」

竹原「な、何を言つているんだ？」

零「お前が使つていた盗聴機、全て取り外したよ。」

竹原「盗聴機？何のことだ？」

零「いい加減さ、素直になれよ。ぶち壊してやるから。」

零はポケットから、盗聴機を床に捨てる。

零「ちなみにわざの会話は俺の自作自演。某小学生探偵の蝶ネクタイのような物を使わせてもらつたよ。」

竹原「それがどうした…」これを流せばこの学園は終わりだ…」

零「スゴいな。観念した途端の手のひら返し。それで、流した後はどうする気だつたんだ?」

竹原「最後だし、教えてやる。顛覆になつてゐる他校から報酬をもらつたのさ…」

零「クツクツ。」

竹原「何がおかしい?」

零「いや、手のひら返した後に動機をペラペラと。今時、推理小説にもいねえよ。そんな奴。」

竹原「う、うるさい…」

零「それには。お前の出入りしてた学校の問題をマスク!!!に送つたから、日付が変わる頃には警察に捕まるんじゃないか?」

竹原「何だと…?」

零「やつから似たようなセリフばっか。ボキヤブラリーが少ないね。」

竹原「俺が刑務所に入ることになるなんて。」

零「だからさ、なんで刑務所を嫌がるのかな？犯罪者なんかに最低限の生活を与える素晴らしいところじやん。だが、俺の敵がそんな素晴らしいところに行けると思つなんよ。」

竹原「俺はどうなるんだ？」

零「お前が雇つたチンピラ達と似たような運命をたどるよ。」

竹原「お前があいつらをやつたのか！？」

零「その通り。同じようにモルモットになりやがれ。」

竹原「死にたくない。」

零「それじゃ、死なないコースで、首だけ生体といきますか。」

竹原「首だけで生きていられるわけないだろー。」

零「大丈夫だよ。血管はチューブ、心臓はポンプ、血液は栄養で代用出来るからな。」

竹原「頼む。なんでもするから、助けてくれ。」

零「はあ、お前は俺を正義の味方とでも勘違いしてるので？それなら前提条件から間違つてゐるぞ。」

俺はバカで単純だからこそ真っ直ぐなあいつとは違つし、大切な奴の幸せを守るために自分から遠ざけようとするあいつとも

違つ。

俺は敵は徹底的に潰すし、楽しむためにはなんでも犠牲にする。ただそれが良い方向に向かってるだけだ。だから、正義の味方なんかじゃない。強いて言うなら偽善の味方だ。」

と、言い終えたところでドアが開き、黒い服の男が入ってくる。

「……？」今回のモルモットはそれでですか？

零「そうだ。首だけ生体にするから、臓器代も振り込めよ。」

「……」「了解しました。」

零「それじゃあ、竹原くん。縁があつたらまた会おう。」

竹原「ギヤアアアアア――――――！」

黒服に竹原は氣絶させられ、竹原を担いで黒服は出ていった。

零「はあ、せっかく変われたかなと思つたが、氣のせいだったかなまあ、変わらうることは同じだつたけかな。」

清涼祭2日目出し物回り

清涼祭2日目

Fクラス

零「今日は自由だったな。」

雄二「ああそうだ。だが、俺達は召喚大会があるのを忘れるなよ。」

零「明久じゃあるまいし。」

明久「なんでそこで僕の名前を出すんだよ！」

零「いや、だって、明久だし。」

明久「理不尽な！」

雄二「明久、うるさいぞ。」

明久「僕が悪いの？」

雄二「さて、召喚大会まで5人で回るか。」

零「いつものメンバーだしな。」

5人とは、俺、明久、雄二、秀吉、康太。

女子は女子で回っている。

この内に明久と秀吉をくつ付けるかな。

雄二「んじゃ、行くか。」

Eクラス

雄二「ここはスポーツ対決で勝つたら商品をもらえるのか。」

中林「やつよ。やってくれの?」

零「商品ってのは何なんだ?」

中林「普通に商品券よ。」

零「取れるだけ取つていつていいいんだな?」

中林「出来るならね。相手は部活の主力選手ばっかりよ。」

零「雄二、荒稼ぎといかないか?」

雄二「ああ、存分に楽しませてもらひつか。」

中林「参加するのね。試合戦争は上手くいったみたいだけど、スポーツは私達の土俵よ。かかってきなさい。」

ボクシング対決

参加者 雄一

悪鬼羅刹の本氣を發揮。

対戦相手を1ラウンドでKO。

50メートル走

参加者 ムツツリー二

何故か、召喚獣でもないのに、《加速》と呟き本当に加速し勝利。

テニス対決

参加者 零

Eクラス代表相手に、虚めのよつたワンサイドゲームを行い、ホールド勝ち。

他にもPK戦、剣道、柔道、水泳、野球、バスケ、カバティ、バドミントン、プロレス、空手と、挑戦して零と雄一が中心にボコボコにしていった。

零「楽しかったよ。また、来るな。」

中林「もう一度と来るなー(泣)」

明久「零、雄一、容赦無さ過ぎ。」

秀吉「お主ら鬼畜じやの。」

零「スポーツで手を抜くのは失礼だろ。中林、これは楽しんだ礼だ。

」

封筒を投げる。

中林「何よ、これ。これは！ありがとう。また、来てね！」

雄二「何を渡したんだ？」

零「これは秘密だ。」

封筒の中身は久保の写真。

Eクラスに怨みを持たれても面倒だからな。

さて、次に行くか。

零「次はどこに行く？」

雄二「召喚大会があるから、そろそろ昼飯に行くが。」

秀吉「Eクラスに結構いたからの。」

康太「…………そろそろ昼時。」

零「んじゃ、Aクラスに昨日協力してくれた礼をかねて、昼飯に行くか。」

てな訳で、Aクラス。

ちなみにAクラスは原作通り、メイド喫茶だった。

今日はFクラスが出していないので、客がAクラスに流れ繁盛しているようだ。

さて、そのAクラスでだが何故か、

Fクラスの女子と高橋女史がメイド服を着て接客している。

零「何してんだ？お前ら。」

高橋「あまりにお客様が多いので、手伝っていただいてるんです。
ご、ご主人様。」

高橋女史が恥ずかしそうに教えてくれる。

零「高橋女史、そんなに恥ずかしいなら、ホールではなくキッチン
を手伝えばいいんじゃないのか？」

高橋「はっ！その手がありましたか。」

気付けよ。

高橋女史は走つてキッチンに向かう。

零「スカートが短いんだから、走ると中が見えますよ。」

高橋「キヤツ！」

高橋文史、原作とキャラ違つ過ぎじゃねえか？

それなんか、殺氣を感じる。

潤、優子、愛子から出でます。

そこへ霧島が雄一へ、

霧島「お帰りなさいませ。今日は帰らせませんよ。あなた。」

斬新なアレンジだ。

零「席に案内してくれないか？」

霧島「はい、ただいま。」

俺達はテーブルに着く。

潤「こちらがメニューになります。」

零「潤、お前も手伝つてたのか。」

潤「他の奴らが手伝つのに、俺だけやらないのはマズイだろ。まあ、似合つてないよな。」

零「いや、似合つていて可愛いと思つだ。」

潤「そ、そうか。可愛いか！」

あれ、せつきより少ないが殺氣を感じる。

優子と愛子です。

さて、メニューはと

……これはいいのを見つけた。

零「明久、秀吉。俺が頼んだ物でいいなら、奢つてやる。」

明久「えつ、いいのー!？」

零「お前らがちゃんと決勝まで上がってきた褒美だ。」

秀吉「それじゃあ、お言葉に甘えるかの。」

零「よし、注文するか。霧島、優子注文を頼む。」

優子「分かったわ。ご注文は?」

零「俺はサンドイッチセット。」

康太「…………俺はハンバーガーで。」

零「明久と秀吉はちょっとといいが。」

俺は優子の耳元で

零「…………」

優子「なるほど。分かったわ。」

明久「一体何を頼んだの？」

零「来るまでの秘密にしてもらつた。」

雄一「んじゃ俺は」

霧島「……」注文を繰り返します。サンドイッチセットが一つ、ハンバーガーが一つ、秘密での注文が一つ、婚姻届が一つでよろしいですね？」

雄一「全然よろしく無いぞ！」

零「問題無い。」

霧島「……それではメイドとの新婚生活を想像してお待ちください。」

その後、愛子が食器を持つてくる。

明久と秀吉の前にはフォークとスプーンが、雄一の前には実印が。

雄一「これ本当にウチの実印だぞ！」

零「おい愛子、康太を頼む。」

愛子「なんかよく分からぬけどいいよ。」

愛子は一旦キッチンに戻り、ティッシュと康太のカバンを持ってきて

愛子「ムツツリーーくんあのね、『ニコニコ』『ニコニコ』『ニコニコ』。」

康太「…………殺す気か！？（ブシャアアアア――――）」

康太は鼻血を出して倒れる。

そして、ティッシュと輸血パックで対処をしながら、

愛子「それで、『ニコニコ』『ニコニコ』『ニコニコ』。」

康太「…………お前は一体何がしたいんだ！」

倒れたまま叫ぶ。

愛子「だつて、血でお店を汚したら迷惑でしょ。」

よし、これで康太の対処は完了だ！

霧島「…………お待たせしました。サンドイッチセットとハンバーガーと婚姻届でござります。」

雄二「どんなことがあるつと判子は押さねえぞー！」

霧島「…………それは困る。」

雄二「対霧島、夫婦喧嘩開始！」

明久「あれ？ 僕と秀吉の分は？」

霧島「…………少々お待ちください。今、優子が持つて来ます。」

優子「お待たせしました。カップル限定巨大パフェでござります。」

明久「こんなの頼んだの零！？」

零「奢つてやるんだから文句を言つな。」

優子「一人で仲良くなじみ上がつてください。」

秀吉「え、えつと、良いではないか明久。せつかく奢つてもらつたのじゃし。」

明久「秀吉がいいならいいけど。」

姫路「美波ちゃん！」

島田「瑞希ー！」

姫路・島田「やりますよ（やるわよ）ー。」

デジャウ？

零「おじょっと待て。メイド一人が客を襲つたらこのクラスに迷惑がかかるぞ！」

姫路・島田「くわ。」

零「分かつたらおとなしくしてろ。」

ハツハツ！計画通り。

問題だつた姫路・島田・康太。

康太は愛子に頼み貧血で退場。

姫路と島田はAクラスに迷惑をかけるわけにはいかないから手出し
はできない。

俺は絶対に明久と秀吉をくつ付けてみせるぜー

というわけで、召喚大会の時間まで明久と秀吉は仲良くパフェをつ
ついたそうだ。

清涼祭2日目決勝戦

決勝会場

学園長がまだどちらの腕輪が優勝か準優勝かは決めてなかつたから本氣で戦うことが出来る。

零「それじゃあ、明久、秀吉全力で楽しもうじゃないか」

明久「手加減はしないでね！」

高橋「それでは、始めてください」

零・明久・雄二・秀吉「「「「サモンー！」」」

《零&雄二VS明久&秀吉

日本史

382 & 263 VS 225 & 179

マジすか！？

零「明久、秀吉何その点数？」

雄二「カン二ングか！？」

明久「んなことする訳無いだろ！」

秀吉「わしらはお主らと戦うために勉強したのじゃ」

零「俺らと戦うため?」

明久「だつて、試召戦争の時や今回だつて零にたよりつきりだつたから」

雄二「俺は?」

秀吉「明久はスゴい集中力じゃたぞ。一週間前から勉強を始めて、昨日は姫路や霧島達に教えてもらつてたしの」

明久「その事は言わないでよ! 秀吉だつてスゴいじゃないか。文系の科目と英語はそれくらいまで上げたんだし。僕は暗記科目だけだもん」

秀吉「わしは勉強の時に霧島の真似をしただけじゃ」

お前らスゴ過ぎ

明久はバカだが単純だからどんどん吸収していくし、秀吉は演劇に関係を持つものを霧島の真似で良くなるつて

しかも昨日、負けた奴らがあいつらに協力したのも痛いな。

原作より点数が上がつてるし。

明久「僕達だつて零と同じ舞台に上がりたいんだ!」

雄二「だから、俺は?」

零「なら上がつてこられたみたいだな」

明久「うん。」

雄一「…………無視されるのは明久の役じゃなかつたか？」

零「それじゃあ始めるか。雄一、お前は秀吉をやれ」

雄一「やつと会話に参加出来るのか。さて、秀吉勝たせてもいいつむじ」

秀吉「始めるかの。じゃが勝つのはわしひじやー！」

秀吉の召喚獣が雄一の召喚獣に薙刀を振りかざす。

雄一「いいや、勝つのは俺達だ」

その薙刀をメリケンサックで弾き、殴りつとする。

「……雄一、動かないで」

雄一「翔子ー？」

雄一の召喚獣の動きが止まる

そこには秀吉の召喚獣が薙刀で切り付ける

『雄一 日本史 137』

雄一「ぐつ、今のは秀吉だな」

秀吉「……そり

雄一「会話の時ぐらいその話し方辞めてくれないか?」

秀吉「……ヤダ」

雄一「ちつ、やつづれえな」

雄一の召喚獣が秀吉の召喚獣に向かう。

雄一の召喚獣は攻撃を繰り返すが、秀吉の召喚獣は避け続ける。

雄一「攻撃が全然当たらねえ」

秀吉「……何でだか分かる?」

雄一「明久の真似か?」

秀吉「……そう。声はわたしだけど動きは吉井にしてある」

雄一「本当にやつづれえな」

明久「雄一は苦戦してるみたいだね」零「確かにマズイな。助けてやりたいから早くやられろよ」

明久「ヤダ! 当たつたら死ぬほど痛いんだから」

零「死ぬわけじゃないんだからいいだろ」

明久「いいわけあるか！」

Aクラス並みの点数だから速いから当たらねえし、

つーか、なんで糸が見えないのに避けられるんだよー。

獣の勘か？

たく、単純なバカは恐ろしいな。

さて、どうするかな。

集中力全快！

零「ウオオリヤア————！」

曲弦糸がめちゃくちゃに動く。

明久「えつーなんでこんな動きが出来んのー？」

零「話し掛けるなー曲弦糸のコントロールに集中してんだからー。」

集中し過ぎて脳の血管が切れそつだ。

だが、明久の召喚獣に全然当たらねえな！

あつ、少しかすつた。

明久「ぐつ。避け切つてみせる!」

「ドン!」

明久「うわっ!...?」

秀吉「……えつ!...?」

明久の召喚獣と秀吉の召喚獣がぶつかる。

零「雄二!...今だ!」

雄二「おう!...」

そこに雄二の召喚獣が明久と秀吉の召喚獣の頭に向かつてぶん殴る。

『明久&秀吉 日本史 0&0』

秀吉「負けてしまったの」

明久「やつぱ、零はスゴいや。どう避けるか計算するなんて」

零「お前らもな。ここまで本氣を出すのは久しぶりだ」

明久「そつか」

零「ああ」

バタツ!

明久と零が同時に倒れる。

明久は頭へのフィードバック、零は集中し過ぎで知恵熱。

無理し過ぎた。

清涼祭2日目打ち上げ（前書き）

PVが100000突破！！
お気に入り件数100突破！！

なんかした方がいいのでしょうか？

今回はバカテストがあります。

バカテスト　日本史

『冠位十二階が制定されたのはいつでしょうか？』

姫路瑞希

『603年』

教師のコメント
正解です。

坂本雄二　木下秀吉

『603年』

教師のコメント

一体、どうしたんですか？驚いたことに正解です。

吉井明久

『603年』

教師のコメント

名前を見ただけでバツをつけてしまった先生を許してください。

哀川零

『…………空氣を読んで603年。』

あつーやっぱり今のなしー!』

教師のコメント

そんなの許しません。

清涼祭2日目打ち上げ

なんだこれ？

姫路、島田、秀吉が明久を押し倒してた。

そこに久保、清水が乱入。

雄一は霧島に捕まってる。

そして、FFF団が出陣。

まあ、これはいつものことだ。

だが、何故に優子、愛子、潤に俺が追いかけ回されなきゃならんのだ！？

よし、一旦何があつたのか思い出そう。

えーと、確か……

その後、俺と明久は保健室に連れて行かれ、10分程たち田覚めた
ら即行で表彰。

ハードスケジュールだ。

まあ、その後はまた出し物回りをして他クラスの連中を泣かした。

んなわけで、夜になつて

打ち上げ開始！

零「なんかスゲー疲れた」

明久「でも、楽しかったじゃん」

零「俺は仕事の内だからいいがお前らは関係無いのに巻き込んでしまつたし」

明久「関係無いなんて言つなよ。僕達は仲間だろ！ 第一ああいつのデータ管理の仕事なの？」

零「あれ？ こうやうだ。なんで俺あんなこと普通にやつてんだろ？」

明久「その話はもうやめにしない？」

零「まあ、そうだな。せつかくだから楽しむか」

明久「そりだよ。喉乾いたし、なんか飲もうか」

明久は缶から紙コップに注ぐ。

零「おい、それ酒じやね？」

大人のオレンジジュース

明久「えつ？ 本當だ！？ 誰がこれを用意したの？」

零「知らん。クラスの大半がそれ飲んでたよな？」

明久「うん」

零「マズくね？」

明久「うん」

周りを見渡すと数人程酔つて倒れてる。

零「教師に見つかったら停学だな」

明久「僕らだけでも飲まないよ」

零「ああ」

姫路「よひいひゅん！」のジュー・シユおひいえすよ

明久「姫路さん！？酔つ払つてる？」

姫路「しょんなことありゅわけにやじやないれすか」

明久「絶対に酔つてるよなーちょっと零、見てないで助けてよー。」

明久は姫路におしたおされてる。

零「アーメン」

俺は立ち去らせてもらいます。

明久「零イイイイ————！」

明久がなんか叫んでるが、知らん。

さて、一人でどうするかな。

優子「零」

零「なんだ優子か。お前は酒を飲んで……顔が赤いのは何故なんでしょうか？」

なんか嫌な予感しかしない。

優子「わざわざジュースを飲んでからなんか暑くてね」

予感的中！！

零「そ、そうか。」

すると、優子はシャツに手をかける。

零「お前は何をやつてんだ！？」

優子「暑いから服を脱げ」としてるだけよ

零「そこおかしいからなーつーか、本当にお前優等生の面影がないな！」

優子「別にいいじゃない。そんなこと」

零「これが本当にあの木下優子の言葉なんでしょうか？」

優子「あんたのせいでもうほんどの人にばれちやつたしね」

零「『じめんなせ』」

優子「家では普通に下着なんだし、脱いでもいいでしょ?」

零「痴女がいる! よくないからそのままこう!」

優子「はあ しようがないわね」

零「俺が悪いのか!…」

優子のターン終了

次は愛子のターン

零「愛子、お前は何をやつてんだ?」

愛子「あつ、零くん。一緒に保険体育の実習しない?」

零「今、ここですか? 運動することはもう遅いだろ」

愛子「やつぱり零くんは全然分かつてないな」

零「何がだ?」

愛子「もつこいや。実力行使にするから」

零「始めるのか?」

愛子「実はね。今、下着を履いてないんだ」

零一「バカかお前は！早く履いてこい！」

愛子「でも、スパッツは履いてるよ。そもそもスパッツは下着だつたんだよ」

か！」

愛子「あつそうだね。」にしても暑いね」「

スカートで扇ぐ。

零「何やつてんだーど」まで変態なんだお前はー？」

愛子「零くんの前なら、セリフでも変態になれる!」

零「少年マンガの主人公のように、なに清々しく言ってやがる！ 第一それはなんの嫌がらせだ！」

藏子「おせせせせ...」

第七章

愛子のターン終了。

潤のターン行くか。

潤「どうしたんだ零？」

顔が赤くなつてないし、対応も普通だ。

潤「分身の術なんて使って」

普通じゃなかつたみたいです。

零「そんなチャクラを使つよつな真似、俺には出来ねえよー。」

潤「えつ！？出来ないの！？」

零「出来るか！俺をなんだと思ってるんだ！？」

潤「人外」

零「人間ですらなかつた！」

潤「人だとしても、一般人のスペックではないだろ」

零「否定出来ん」

潤「…………それにものす」い鈍感だし」

零「ん？なんか言つたか？」

潤「なんでも無い！」

零「そうか」

これで潤のターンも終了。

その後、優子、愛子、潤と一緒に楽しむことになったんだが、こいつら3人は酔っている。

俺一人でさばけるわけもなく、王様ゲームをやることになり、その命令を実行したくないので逃げてます。

という訳で最初のようになつたのです。

周りに使える奴が本当に居ねえな！！

カオスだからいいじゃなかつて？

バカが！カオスは見るからいいんだよーそこに参加しようとは思わねえよ！

これで無事？清涼祭は終わつた。

口キ

零「ビードル！」

俺は打ち上げが終わった後、家に帰ってきたはずなんだが、家の
に入つたら部屋の中が変わつてゐる。

簡単に説明すると、うみねこの魔女達の部屋にそつくりだ。

? ? ? 「お帰りなさい！あなた、『飯にする』お風呂に入る？それ
とも、ア・タ・シ？」

いきなりHプロン姿の眼帯を着けた女が現れる。

零「それで、出口せどりだらうか？」

? ? ? 「スッゴいスルーね。ちなみにアタシが許可しないと出れな
いわよ」

HプロンではなくHスロリに変わつてる。

零「じゃあ、とつとと出せ！」

? ? ? 「話をこいつかしたらね」「

零「そつか。なら、出すまで殴り続けてみようか」

? ? ? 「止めておきなさい。ここではアタシに勝てない。第一なん
で会話すらしようと思わないかな？敵つて訳じやないのこ

零「確かに敵意は感じないが、悪意を感じる」

? ? ? 「そつか、それはしょうがないわよ。そもそもアタシは悪意の塊みたいなもんだからね」

零「てめえは何者だ？まさか、魔女とかはほぞかないよな？」

? ? ? 「アタシが魔女？笑えるわね。人間」ときと一緒にするなんて。

アタシは大邪神 口キよ！」

零「そうか。ちょっと知り合いの先生のところに行こう。大丈夫、優しい先生だから」

口キ「頭がおかしいわけじゃないわよ！」

零「だつて口キは男だし、大邪神つて。口キは悪戯の神だろ。」

口キ「神話をよく知ってるわね。でも、どれだけ昔の話をしてるのよ。アタシは何体か神や悪魔を取り込んだからね」

零「千歩譲つてお前が神だとしたらなんのようだ？」

口キ「不思議に思わないの？あんたがバカテスの物語にいる」とが

零「お前の仕業つてことか」

口キ「仕業つて、あんただつて楽しんでるでしょ？それに調整してあげてるんだからありがたく思いなさい」

零「調整？」

ロキ「そりゃ。あなたがキャラの欠員を出すから対処したんでしょうが」

零「潤か」

ロキ「やつよ。あれはアタシの斤目。分身よ」

ロキは自分の眼帯を指す。

零「なるほどな」

ロキ「驚かないし、疑わなくなつたわね」

零「真実みたいだからな。だが、この物語への参加はタダじゃないだろ？」

ロキ「やつぱり、あなたは面白い…そりゃ。これはゲームよ。」

零「ルールは？」

ロキ「あなたの仲間が転校、退学になる」と。文月学園が潰れることが。「これがあなたの敗北条件。」

零「勝利条件は？」

ロキ「さつきの敗北条件を満たさないこと。罰はバカテスの世界の崩壊。」

零「それは不公平だろ。だって、神のお前が対処のしよつのない問題を起こしたらリヒーリは終わりだ。」

ロキ「安心しなさい。問題を起こす気はないわ。原作を壊したから世界が勝手に問題が起きるから。それに、どちらかと云つて手助けをするのよ。調整とこつ形でね」

零「お前は何がしたいんだ？」

ロキ「アナタと同じでカオスを見たいだけ。アナタを送り込んだことで悪戯は終わつてゐしね」

零「勝つた時の報酬は？」

ロキ「他の世界に参加出来るのみ。それでまた原作ブレイクしないで」

零「なるほどな。お前は損をしないみたいだな」

ロキ「ばれたみたいね。報酬は後で増やすわ」

零「今はそれでいいか」

ロキ「最後に潤はアタシの分身であつてアタシじゃない。」

零「分かつてゐよ。そんな」と

ロキ「それじゃ、また今度」

扉が現れ、俺を吸い込む。

目を開けるとベッドの上だった。

夢じゃないな。

如月グランドパーク写真撮影（前書き）

バカテスト 現国

次の【】の『私』が何故このような痛みを感じたのか答えよ。

【私は身を引き裂かれるような痛みを感じた。】

問題文は原作を見てください。

姫路瑞希

『私』にとって彼は半身のような存在だったから。

教師のコメント

そうですね。半身のように大切な存在だったので、『私』は身を引き裂かれるような痛みを感じたのですね。

吉井明久

『私』にとつて彼は下半身のような存在だったから。

教師のコメント

下半身に限定する必要はありません。

土屋康太

『私』にとつて彼は下半身だったから。

教師のコメント

その解答はあんまりだと思います。

哀川零

『私』は真つ一につにされたから。

教師のコメント

実際に引き裂かれた訳ではありません。

如月グランドパーク写真撮影

雄一「そつこも零。あのペアチケシトせざったんだ?」

零「俺が使う相手はいないから売った」

雄一 時々お前が明久のよう見える

零 - 僕に死ねたと !

雄一　そりまで言つたねえよ。
たか　誰に売つたんだ？

零・それは企業秘密だ
客への信用を失ふ」

お前は絶対に言わねえな！」

靈文石を「ムハ」だ

お前を信じてみるだ

次の休日

ブルブルブルブル

ケータイが鳴つてゐる。

出るか
ガチャヤ

雄一『お前をつて、ものすげ怖ええ！』

ガチヤ

うん。間違った電話だつたな。

そうだ。明久に連絡するか。

明久 はい もしもし

零『俺だ。今日作戦を決行する』

明久『了解。連絡を回します』

ウエーティングシフト実行！

如月グランドパーク

雄
一
サ
イ
ド

雄一「俺は無力だ」

零の奴、よりによつて翔子に売るなんて。

ପ୍ରକାଶନ

係員「チケットを確認します」

霧島「……」

係員「これは!?」

霧島「……そのチケット使えないの?..」

係員「いえ、そんなことありませんよ。ちょっとお待ちください。」

あれはトランシーバーか?

係員『わたしだ。ただちにウエーブティングシフトに移行しろ』

雄一「なんだ!その怪しげな会話は!?」

係員「なんのことですか?ワタシ一ホン、ワカリマセン」

雄一「さつきまでペラペラ喋ってたどろつがー、ひつ、まあいい。少し電話をする

……明久に。

プルプルプル

係員「あっ!私のですね。ちょっと失礼し

バン!

明久・雄一「『えつ?』

係員がケータイを出し、出ようとした瞬間何かが飛んできてケータイが破損する。

つて何イイイ――!

おい!地面上に銃痕があるぞ!

明久「ちよつとお待ちください」

トランシーバーを使い。

明久『零、いまの何?』

零『お前が雄一からの電話に出ようとしたからコレクションを使つたんだよ』

明久『あれは雄一からだつたの?』

零『少しは考える。バカ!』

明久『でも、ケータイは弁S Y』

ガチャ

あつ切られた。

明久「それでは案内します」

雄一「案内はいらん。」

明久「そんな」と言わないで

雄一「いらん」

明久「断れば腐ったザリガニを送ります」

雄一「まあ、案内くらいはいいか」

〔冗談じゃない！そんなことされたら私は全員食中毒で倒れる。〕

明久「それでは記念写真ですね」

カメラを持った着ぐるみがやってきた。

雄一「翔子、ちょっと我慢してくれ」

俺は翔子のスカートをめぐる。

さあ、動け！ ムツツリー！

着ぐるみ「す」「な。 カメラの前で変態行為を行うなんて」

何！ ムツツリー！ 「じゃないだと…？」

しかも、この声は

零「やで、この写真は警察に持つて行くか」

雄二「零止めてくれ！今朝、警察に一次元と二次元が区別出来ない
痛い奴だと思われてんだ！」

零「なるほど。だから、」こんな犯罪に手を染めてしまったのか。」

雄二「ちげえよ……」

零「それじゃあ。そういうプレイが好きなのか」

雄二「ちげえよ……」

零「同じセリフを言つてもつまらんぞ。よく見たら霧島もまたざらり
じやないみたいだしな」

霧島「……雄二のエッチ。でも、雄二がそういう趣味なら」

翔子が顔を赤らめている。

雄二「勘違いするな翔子！お前の下着なんて微塵も興味はない！」

霧島「……それは困る」

雄二「んな。理不尽なあああ……」

霧島のアイアンクロー……

零「下着には興味がない。なるほど下着を履かない方がいいのか。
鬼畜だな」

霧島「……雄二、私にも羞恥心はある」

雄一「ンナ訳ねえだろおおおーーー」

零「はい、チーズ」

カシャツ

零「加工を入れておきました」

写真が渡される。

周りに天使が飛んで上には『私たち結婚します』の文字が。

そして中心に顔を赤らめてアイアンクローラーをする翔子。叫びながらアイアンクローラーを食らう。俺。

零の言葉を借りるなり、まさにカオス。

零「この写真を写真館に飾つてよろしくでしょうか?」

雄一「こんなのが飾つてメリットがあるのか!?」

零「(ある意味) 物になると思いますので」

バカ女「ああー!写真撮影してもいいって。私達もしてもらおうよ

バカ男「おつ。いいな。俺達の結婚記念にか?おい、係員。俺達も映つてやるよ

明久「これは限定イベントなんで」

雄一「今のうちにに行くか。行くぞ。翔子

霧島「……うん」

逃げるが勝ちだ。

その後

零サイド

明久「これは限定イベントなんで」

バカ男「いいじゃねえか！オレ達はオキヤクサママだぞー！」

バカ女「キャー！リュー・タカツコいい！」

零「死ねばいいのに」

バカ男「なんだと！」

明久「いつのまに着替えたの？」

零「なんのことだ係員？俺は客だ。問題を起こしても如月グランドパークには関係ないぞ」

バカ男「無視してんじゃねえよー！」

バカ男が殴つてくる。

零はそれを掴んでネジ上げる。

零「お前らは」」で物語から退場だ。明久は雄一を追え」

明久「う、うん」

零「俺達も行こうか」

バカ女の手も掴んで裏に連れていく。

バカ女「ひつ」

零「そんじや、寝ろ」

バカツプルを氣絶させる。

「？」「また、商品の引き取りですね」

黒服の男が後ろに立っている。

零「お前か。」

「？」「必要だと思いまして」

零「お前さ、ロキの関係者だろ」

「？」「ばれましたか」

零「前から思つてたんだが、気配が人と違うからな

？？？「そうですか。その通り私はバジリスクです。大蛇（大蛇）とお呼びください」

黒い帽子、サングラス、マスク、コートを脱ぐ。

すると長身の女が現れる。

零「女だったのか」

大蛇「父（？）のせいで私たちもこの形になってしましました。」

零「なぜお前がこんなことをしているんだ？」

大蛇「調整の手伝いですよ」

零「まあいい。後は頼むぞ」

大蛇「了解しました」

零はこの場所を去る。

バカツブルは物語に退場したが、どう転ぶかな？

如月グランドパークお化け屋敷（前書き）

バカテスト 音楽

マザーグースの歌の中で「スペイスと素敵なもので出来ている」のは何でしょう？

姫路瑞希

『女の子』

教師のコメント

正解です。さすが姫路さん。女の子の材料は砂糖とスペイスと素敵な物で、男の子の材料はカエルとカタツムリと仔犬の尻尾と歌われています。

吉井明久

『カレーライス』

教師のコメント

女の子は食べ物じゃありません。

哀川零

男の子の材料は女の子と比べて酷くねえ？

教師のコメント

先生にそんなこと言われても。

如月グランドパークお化け屋敷

雄一 サイド

雄一 「翔子！ 間接を決めるな！」

霧島 「……カップルはみんなこうしていの」

雄一 「お前には間接技を決めてるよつて見えるのかー…？」

霧島 「……雄一、どこに行きたい？」

いろいろなアトラクションがあるんだよな。

えーっと

雄一 「帰りた」

霧島 「……却下。」

雄一 「自由にな」

霧島 「……れない」

雄一 「映画く」

霧島 「……零に頼んで壊してもうつた」

雄一 「なにやつてんだ！ アイツ！」

霧島「……零はいい人」

フイー「そこのお似合いのカップル」

着ぐるみがやつてきた。

霧島「……お似合いのカップル」

フイー「フイーが面白いアトラクションを教えてあげるよー。」

雄二「明久がさつき女子大生にナンパしてたな」

フイー「明久くんが！？作戦中だつていうのに！」

雄二「姫路、バイトか？」

姫路「ナンノ」「トテスカ？」

雄二「声が片言になってるぞ！」

ノイン「ちょっと待つた！雄二じゃなくて不細工な男！」

化物が現れた。

姫路「明久くん！頭が逆ですよー早く直さないと坂本くん達にばれてしまします。ああ、小さい子が泣いちゃいました」

明久「どおりで走りづらかったんだ」

走りづらいで済むか普通？

霧島「……ノインくんはうつかり者」

雄二「うつかりで頭が180度回転する生き物はいない」

明久「それより、オススメのアトラクションがあるんだけど」

雄二「はあ、言ってみる」

明久「えーっと、確かお化け屋じゃなかつた。コーヒーカップがオススメだよ」

雄二「よし、コーヒーカップは止めてお化け屋敷に行くぞ」

明久「えつ何で！？お化け屋敷は間違いだつて」

雄二「ウルセH-・じうせコーヒーカップにはなんか仕掛けがあんだらうづが！」

絶対にコーヒーカップには行かねえ。

明久サイド

雄二達はお化け屋敷に行つた。

明久「本当にうまく行つたな。零の作戦」

姫路「すごいですよね。普通に言つても行かないから違う場所を言

つて行かせるなんて」

秀吉「うまくいったみたいじゃの」

秀吉が走つてくる。

明久「秀吉、どうしたの？」

秀吉「ちよつと零に頼まれての」

明久「頼み?」

姫路「そういうえば明久くん。仕事中にナンパなんてやつてたんですね？」

明久「えつー何の?」

おかしい。姫路さんの背中から黒い物が見える。

姫路「ちよつと美波ちゃんを呼ぶのでボッキリ話をしましょうね」

明久「そこはボッキリじゃなくてじつくじじゃないの!？」

秀吉「こつけじや明久!」

秀吉が手を引つ張つて走る。

明久「さすが僕のお嫁さん」

秀吉「婿の間違いじやろ」

じひらも間違いです。

秀吉「零に頼まれたのじゃ」

明久「さすがは零!」

姫路・鳴田「待ちなさい……！」

零サイド

明久と秀吉をくつ付ける」とむちゅんとやりなことな。

おつー雄一がやって来たか。

雄一サイド

廃病院をモチーフにして作ったお化け屋敷だったな。

係員「お客様。このアトラクションはひらの契約書にサインしてもらわないといけないんです」

雄一「なるほど。それだけ危険があるアトラクションなのか。面白そうだな」

んーなになに

このアトラクションでケガ及び死亡しても、如月グランドパークは一切の責任を負いません。

それでもよろしいですか？

雄二「心臓発作とかで死んじまつ奴とかもいるのか？……なんだこの下の黒い紙？」

係員「めぐつちやダメです！」

まさか！

めぐると

？私は霧島翔子を生涯大切にします。

？私は霧島翔子と結婚します。

？私は霧島翔子を妻と認めます。

雄二「なんじやこりゃあ！……！」

零「こちらがペンです」

霧島「……はい、実印」

土屋「……朱肉」

雄二「この状況をおかしいと思つのは俺だけなのか？」

零「冗談だ」

雄一「カーボン用紙を仕込んで冗談だと！婚姻届けも仕込んでんじゃねえか！」

零「でも、一番上のだけでいいからサインしろよ」

雄一「ここでのスルー！？」

零「本当に死ぬかもしれないから」

雄一「入るの止めるか」

零「霧島、お化け屋敷なら抱きつき放題だぞ」

霧島「……絶対に入る」

零「荷物はこちやうから傾けないで」

霧島「こぼれちゃうから傾けないで」

零「了解しました」

お化け屋敷内

霧島「……雄一、怖い」

雄一「珍しいな。お前、こいつの得意だったり」

霧島「……でも怖い」

音がスピーカーから流れてくる。

零『たしか、生死の危機を乗り越えるとお互いを好きになるらしいので』

何が始まるんだ？

零『我慢しなくていいぞ。』FFF四

須川「坂本を殺せ！！」

THE JOURNAL OF CLIMATE

F
E
A
D
o
r
D
E
A
T
H

「殺されたり死んだり」

F 「リア充って殺しても罪にならないよね？」

雄一「死ぬ可能性つてこういうことか！」

零「死んだら霧島の墓に入れるからな』

雄一「死ねなくなつた！？」

數分後

雄一「後は須川！ てめえだけだ！」

須川「さすが悪鬼羅刹。俺も死神として本氣でやらなきゃいけないみたいだな」

須川は「デスサイズを取り出す。

雄二「死神？ 聞いたことあるぞ。たしか街で女性が襲われていると助けにくるっていう都市伝説」

須川「俺は清涼祭のとき仲間を危険にさらした。もう一度とそんなことが起きないように決めた」

雄二「だからってなんでこんなじりじりすんだよー。」

須川「他の奴らは倒れたし、霧島はお前が逃がしたからお前しかいないうからな」

雄二「お前を最初に倒すべきだったか」

零サイド

何？この新事実。

展開的に須川が問題抱えて「うつて話も出てくるじゃん！」

原作を壊してたから、世界が伏線張り始めたよ。

考えんの面倒だから後回しでいいか。

そういうや明久と秀吉はどうなつたかな？

迷路に逃げ込んだみたいだな。

よく遊園地にある壁が鏡のやつ。

いい雰囲気じゃん。こつちは作戦成功だな。

雄一の方も決着がついたみたいだな。

相討ちか。

雄一 サイド

雄一 「くつ。相討ちか」

須川 「もう動けねえ」

霧島 「……大丈夫？ 雄一」

雄一 「翔子。きたのか」

霧島 「……また、小学校みたいに私は逃げちゃった

雄一 「何度も言つがお前が罪悪感を感じる必要は無い。俺がお前に
そうするように言つたんだから」

霧島「……雄一」

雄一「だから俺なんかを好きになる必要は無いんだ」

零『それは違うだろ』

雄一「零」

零『たく、なんで分からねえかな?』

雄一「お前だけには言われたくなえよ」

零『まいい、結婚したくなつたか?』

雄一「今の会話を聞いてなかつたのか」

零『素直になればいいの!』

雄一「うるせえよ」

零『はあ、そんじや普通に想い思ひをさせるか』

雄一「まだ、続くのか」

『……子……り……じの……いな。……テ……い……』

俺の声?秀吉の声真似か。

雄一(秀吉)『翔子より姫路の方がいいな。胸もテカいし』

ナンテスト！？

すゞい般若が見える。

霧島「……浮気は許さない」

戦う
アイテム
逃げる

雄一「確かに恐いな！」いやあ！」

零『命に関わる第二弾』

天井が開き、翔子の前に何か落ちてきた。

よし！お化け屋敷のトラップが発動したみたいだな。

落ちてきたのは

毒刀 誠刀 王刀 微刀 悪刀 双刀 賊刀 薄刀 千刀 斬刀 絶刀

炎刀

零『俺のコレクション。完成形変態刀』

霧島「……零は気が利く」

雄一「これ凶器つてレベルじゃねえぞー。」

俺、死ぬかも……。

如月グランドパークウェーティング体験（前書き）

バカテスト 世界史
世界三大美女を答えよ。

姫路瑞希の解答
クレオパトラ7世
楊貴妃
ヘレネ

教師のコメント
正解です。しかし、日本ではヘレネの代わりに小野小町が入れられることが多いようです。

吉井明久の解答

木下秀吉
霧島翔子
姫路瑞希

教師のコメント

それはあなたの身の周りのですね。それと何故血痕がついているのでしょうか？

哀川零の解答

誰を書けば殺されないのか分かりません。

教師のコメント

吉井くんのを見たら事情が分かつたので今回は見逃します。

如月グランドパークウェーティング体験

雄一 サイド

よく生き残ったな俺。

零「なんだ生きていの?」

雄一「出てきて開口一番がそれか!?」

零「いや、だつて死ぬでしょ。あれば

雄一「あれ?俺なんで生きてんだ?」

秀吉「レストランで昼食を用意しておつまみ」

雄一「考えるのはやめよ!。昼飯が無料で食えんのはいいな」

霧島「……はあ

雄一「ビーフしたんだ翔子?」

霧島「……なんでもない」

秀吉「それでは!」案内をめぐ

レストラン

雄二「『眞かつたな翔子!』」

霧島「……『つん』」

零「なんと一結婚を前提に付き合っているカップルが『』のレストランにいます!」

嫌な予感しかしない。

零「『』ちらのカップルです!」
パツ!

やはり俺達か。

零「『』のカップルにはウェディング体験に参加するための挑戦を行つてもらいます。そのまま籍を入れることも可能です」

雄二「拒否す」

零「拒否すれば大量のチップを送ります」

雄二「るわけないな」

そんなことが起きれば、ウチの家事が全機能停止してしまひ。

零「それでは、『』で出すクイズ5問に正解すればウヒトイング体験を行うことが出来ます」

よしー全力で間違つてやるよ。

元神童に分からぬ問題は無いはずだ！

零「では、第1問。坂本夫妻の記念日はいつ？」

おかしい。問題の意味が分からぬ。

ピンポーン！

零「霧島さん」

霧島「……毎日が記念日」

雄一「止めろ！恥ずかしくて死にそうだ！」

零「ちなみにこのクイズはビデオカメラで撮影を行つています。」

雄一「本当に死ぬぞ！」

零「知らねえよ。コンチクショードinezaimasu」

丁寧に何言つてんだアizz！

零「では第2問。坂本夫妻の結婚式はどこであげる？」

ピンポーン！

雄一「鰯の味噌煮」

零「正解です！」

雄一「何イーーーーー？」

零「正解は如月グランドパーク式場。鳳凰の間、別名鯖の味噌煮で式をあげていただきます」

雄一「今、命名しただろー！」

零「第3問。坂本夫妻はどうで出合つた？」

雄一「貰つたあーーーーー！」

霧島「……させない」

雄一「田が、田がああーーーーー！」

翔子の奴田瀆ししゃがつたよー！

零「雄一さんのムスカ大佐の真似は放つておいて、霧島さん」

霧島「……小学校」

零「正解です。お二人は小学校からの幼なじみで長い期間交際を行い、今回の結婚に至つたのです」

雄一「変な嘘をまぜるなー！」

零「第4問」

雄一「分かりませ」

零「正解です。問題は坂本竜馬を暗殺したのは誰？でした。スゴいですね。問題を聞いてないのに答えが分かるなんて。やはり、愛の力ですね」

もひ無理だ。サヨウナラ俺の自由。

零「それでは第5問は新郎、新婦に1問ずつ問題を出題します。そして、問題に入る前に新婦の霧島さんにはウエディングドレスに着替えてもらい、新婦、新婦の順に正解したらウエディング体験を開始するという形になるので、しばらくお待ちください」

俺だけ答えられる問題があるのか。ならまだ可能性はある。

だが、何を考えてんだ零の奴？

霧島「……頑張って正解してね」

雄一「…………ああ」

十数分後

零「それでは新婦の入場です。」

パチパチパチパチ

拍手が鳴り響く。

姫路・島田「……綺麗」

確かに綺麗だった。

霧島「……雄一。お嫁さんに見える」

雄一「少なくとも婿には見えないな」

零「それでは新婦に問題です。霧島翔子の夢は何?」

なんだそりゃあ! ? 問題じゃなくて質問だらつが!

霧島「……お嫁さん」えつ?

霧島「……雄一のお嫁さんになる」とがずつと夢だった

零「正解です!」これで残すは新郎への問題だけとなりました。行きます。最終問題。坂本雄一は霧島翔子を好きか嫌いか、どちらでしょ?」

俺はどう答えればいいんだ?

雄一「俺は……」

翔子の恋愛感情は罪悪感からくる勘違いだ。

だから、俺は翔子と結ばれてはいけない。

だが、嫌いではないむしろ好きな翔子に「嫌い」と言って傷つけて

いいのか？

明久「あれ？ 霧島さんは？」

気が付くと翔子の姿が見当たらない。

明久「皆さん！ 新婦を探してください」

全員が慌てて探し出す。

零「雄一。 霧島というのが嫌なら拒絶しろよ。 それがお互に一番いい選択だ。 だが、拒絶をしないなら受け入れる。 それも一番いい選択だ。 強制はしない。 最後に決めるのはやっぱ本人だから」

雄一「ちょっと行ってくる」

零「ちやんとこれを忘れずに持つていけ」

雄一「これは……」

如月グランドパーク外

雄一「おい、 翔子」

霧島「……雄一！？」

雄一「弁当盒かつたぞ」

霧島「……気が付いてたんだ」

翔子は泣いていた。

霧島「……やつぱりおかしいよね？私の夢。高校生にもなつてお嫁さんになりたいだなんて。笑えちゃうよね」

雄一「おかしくなんてない！？」

霧島「……えつー？」

雄一「お前の夢は全然おかしくない。もしその夢を笑う奴がいたら翔子、お前だろ？と許さない！」

霧島「……雄一」

雄一「まあ、相手を間違わなければだがな」

悪いな零。確かに最後に決めるのは俺だ。だからお前の選択肢からは選ばない。これは最低な選択かもしれないが、俺はこんな生活を続けたいんだ。

雄一「ほりよ。これくらいこらへても罰は当たらないだろ？」

わざと翔子が使ったウエディングドレスのヴォールだ。

霧島「……やっぱり私は間違ってなんかいなかつた！」

やつぱ雄一はヘタレだな。

こんな状況を作つてやつたの。

ま、いいか。

明日の準備をしどくか。

こつちは手を出す必要が無いから、邪魔が入らないようにすればいいだけだからな。

これが2つ目の作戦

明久と秀吉の距離を縮めるぞ！作戦

今日、雄一と霧島がやつてきたばかりだから、まさか次の日に明久と秀吉が同じところに来るなんて思わないだろ。

さすがにウエーディング体験はキャンセルさせとくがな。

あの一人がくつ付けばいいな。

月曜日 Fクラス

雄一「零、明久」

零・明久「なんだ（なに）？」

雄一「昨日は面白」とやつてくれたじゃねえか？」

明久「何のこと？」

零「俺は交渉先の手伝いをしてただけだ」

雄一「そういう態度を取るか。そういうや明久、昨日の秀吉とのデートは楽しかったか？」

明久「なんでそのことを…？」

姫路「ちよつとお話を聞かせてくださいね？明久くん

島田「アキが空を飛ぶところを見たくなつたわ」

零「秀吉！明久を連れて逃げろ！」

秀吉「了解じゃ…」

姫路「やつぱり木下くんとそういう関係だつたんですね！」

島田「木下はどこまでウチ達の邪魔をすれば気が済むのよ…」

4人退場

零「で、俺には何するつもりだ？」

雄一「特には」

零「……はっ？」

雄一「別に今回のことは想んでねえよ。明久については面白そうだから言つただけだ」

零「そうか」

雄一「だが一つだけ聞かせる。お前は何がしたいんだ？」

零「俺は楽しめればいいんだよ。ただそれだけだ」

雄一「お前はよく分からん」

潤「ちよつといいか？」

零「潤か」

雄一「邪魔者は退散しますか」

零（何言つてんだ？）

潤「零、如月グランドパークのペアチケットは誰と行くんだ？もし、相手が決まってなかつたら俺と」

優子「潤ズルいわよ！抜け駆けは

愛子「そりだよ！僕も如月グランドパーク行きたいもん！」

零「あのチケットなら霧島に売つたぞ

潤・優子・愛子「「えつ?」」

零「そのチケットで一昨日霧島は雄一と行ってきたんだから

潤「聞いてないんだが

零「言つてないからな。明久と秀吉も昨日行つてきたからフレオーブンチケットはもうないぞ」

潤・優子・愛子「「はあ~~~~」」

零「なんだ? そんなに行きたかったのか?」

優子「えつ、まあね。」

零「なら普通のペアチケットならあるから買つか?」

潤・優子・愛子「「「本当?」」」

零「ペアチケットだから一人しかいけないがな

愛子「一人だけか」

零「誰が買うか決まつたら教えてくれ

ドンだけ行きたかったんだ?

雄一「わざとやつてるだろお前」

プール前（前書き）

坂本夫妻のマル秘恋愛テクニック講座

雄二「……おい翔子。とりあえず俺にも分かるように状況を説明しろ」

霧島「……」これは私達夫婦が恋愛の秘訣を皆に教えるコーナー

零「俺がサポートをする」

雄二「驚いた。このタイトル『』以外全部嘘しか書いてねえ」

零「俺が全部本当のことにしてやるよ」

霧島「……では、ハガキの紹介」

雄二「翔子、たまには俺の言つことを聞け。そして零、お前なら本当にやりかねないから止めてくれ」

霧島「……『突然ですが、仲良し夫婦のお二人に相談問です』」

雄二「ハガキの差出人よ、よく聞いてくれ。俺は今、手足を縛られて床に転がされている。』いつが本当に恋愛相談の相手にふさわしいのか、もう一度考え方直して欲しい」

零「あまりウルサイと猿轡をするぞ」

雄二「そんな」としたら会話が出来ねえから相談に答えることが出

来ねえだろ？が！」

零「別にお前が喋る必要なくね？」

雄二「じゃあなんで俺が連れてこられたんだ！」

霧島「……『私には婚約者がいるのですが、その人が周りの女の人の誘惑に負けて浮氣をしないか心配です。どうすればいいのでしょうか？』」

雄二「お前は本当にマイペースだな」

霧島「……夫の浮気には私も困っている。他人事とは思えない」

雄二「頼むから他人事だと思つてくれ」

霧島「……だから私の考えた浮気防止方を教えてあげる」

雄二「翔子よそれは俺の身に降り掛かる不幸の予告と見ていいのだろ？が？」

霧島「……用意する物は3つ」

雄二「浮気防止に道具が必要なのか？」

霧島「……一つ目は」

雄二「一つ目は？」

霧島「……『手錠』」

雄二「すでに犯罪臭がするぞ」

零「金を出せば俺が特注で用意するだ」

霧島「……2つ目は」

雄二「だから話を聞け!」

霧島「……『エプロン』」

雄二「翔子、お前の考えが分からなくなつた!」

零「エプロンがなければメイド服や猫耳でも代用できるだ」

霧島「……そして、3つ目は」

雄二「3つ目は?」

霧島「……『ビートオカメリ』」

雄二「貴様は何を撮るつもりだ! エプロンと手錠でドレスアップされた俺の何を撮るつもりだ!」

零「なんとの浮気防止3点をセットで1ヶ月間特別価格で販売するぞ!」

霧島「……その3つで夫に浮気の恐ろしさを教えてあげるとい

雄二「俺は何よりお前が恐ろしい」

霧島「……以上『バカなお兄ちゃん大好き（11歳）』さんからでした」

雄一「差出人小学生かよ！世も末だな」

零「多分あいつだな。『バカなお兄ちゃん大好き（11歳）』さんにはさつさ言つた浮気防止3点セットをプレゼントするだ」

雄一「とにかく翔子、さつきのは冗談だよな？」

霧島「……カメラは五台以上が望ましい」

雄一「翔子おおお！」

零「さうこや雄一がさつさ秀吉と手を握つてたな」

霧島「……さつく実戦する」

雄一「あれは転んだ秀吉を引っ張つただけギャ-----」

プール前

明久家

明久「いらっしゃい。零、雄二

雄二「邪魔するや」

零「邪魔する」

明久「なんでカツパを着てるの？」

零「気にするな」

明久「気になるんだけど」

雄二「こいつコンビニに寄つたときに一緒に買つてたんだよ」

明久「頼んだもの買つてくれた？」

雄二「ああ、弁当とマークだろ。代金をちゃんと寄越せ」

明久「はい。今、家に何も無いからね」

実はプールイベントの起きるための泊まりなんだが、明久の生活が改善した為起きない可能性がある。

起きないと面白くないし、秀吉が修学旅行で風呂が別にならない。

明久「それじゃ、食べようか」

明久が「一ラのペットボトルを開けた途端に炭酸まみれたなつた。

明久「目があああ！」

零「かかつた！」

明久「振つたでしょ？」

零「悪い悪い。お詫びにもう一本用意してあるから」

俺は明久に新しい「一ラを渡す。

その瞬間に明久は「一ラを渡る。

俺もサイダーを振る。

そして、撃つ。

明久は俺に向かつて。

俺は

雄一に向かつて。

雄一「はつ？」

スポーツドリンクを飲んでる雄一の顔面にヒート！

雄一「目があああ！」

明久の「一ラは俺に当たるが、カツパを着てる俺には無意味。

雄一「なんで俺に向けんだ！」

零「面白そりだから」

雄一「そうだつたな。お前はそういう奴だつたな。分かつた。俺も参加してやる」

明久は弁当に、雄一はカレーに、俺は冷やし中華に手をかける。

ピチヨン

零・明久・雄一「今だああああーー！」

数分後

雄一「明久、止めにしないか？」

明久「うん。この戦いは不毛すぎると」

明久と雄一はくたばつた。

つーか、なんで俺が始めたのにお前ら相討ちしてんの？

俺も食らつたけどスゴいねカツバ。スゴいね。

大事なことだから2回言つたよ。

雄一がベトベトする。シャワー借りるぞ

明久
いいよ

六三

雄
一
IN
風呂

なんのサービスにもならねえな。

明久「そうだ。雄一」

雄一「ん」。なんだ?」

シャ――。

明久「今、ガスの工事してるからお湯出ないよ」

雄 — 「 もん 」 — — — —

明久「だから心臓から離れた手足から浴びた方がいいよ」

雄一「冷水の浴び方なんて入らねえよ！」

零「風邪引くぞ」

雄一「零の言つ通りだ。だが、お湯が出る訳じやねえしな」

零「どうあるんだ?」

雄一「金のかからなこと」りで浴びるついでに遊んでくる

明久「そんなところあつたけ? ああ、あそこか。でも、僕は自分が
あるけど零と雄一はどうするの?」

雄一「俺はトランクスでいい」

零「俺は基本無傷で済んだから明久の家で待ってる」

雄一「そうか。1、2時間経つたら戻つてくる」

明久「部屋にあるゲームでもしてて」

零「了解。行つてこい」

明久「行つてきます」

雄一「行つてくれる」

30分後

プルプルプル

電話か

ガチャ

明久『身元引取人になつて』

ガチャ

間違い電話か

プルプルプルプル

ガチャ

雄一『元はと言えばお前のせいだろー。』

ガチャ

間違い電話か。

多いな最近

零「てな事が昨日あつた」

秀吉「お主らも災難じやつたの」

雄一「鉄人の野郎プール掃除の罰までかせやがつて
土屋…………重労働」

雄一「だが、次の土曜に自由にプールを使つていことになつた」

明久「零、秀吉、ムツツリーーも来ない?」

土屋「…………行く」

雄二「ただし、零とムツツリーーにはプール掃除を手伝つてもいいわ」

土屋「…………うつ」

零「俺はかまわん」

明久「ムツツリーーは?」

雄二「ちなみに姫路、島田、翔子、木下姉、工藤、天東も呼ぶつも
りだ」

土屋「…………モップとブラシを用意しておけ」

単純だな。

明久「珍しいね。雄二から霧島さんを誘うなんて」

秀吉「素直になつたみたいじゃの」

零「いや、違うだろ」

雄二「零の言う通りだ。考えてみる。俺が他の女子とプールに行つ
てそのことが翔子にばれたら?」

明久「樹海の奥…………いや湖の底」

零「海の藻屑…………その前に中身だけでも売つ払つか」

雄二「死体の処理の方法まで考えなくていい！それに零！何考えてんだ！？」

零「えつ？商売だけど」

雄二「普通に返すな！」

秀吉「悪いしわしもプール掃除を手伝つのじゃ」

明久「ありがとね。秀吉。」

秀吉くん赤くなっていますよ。

雄二「姫路、島田、翔子、木下姉、工藤、天東ちょっとといいか？」

霧島「……何？」

雄二「今週末に学校のプールを使えるんだが来ないか？」

姫路・島田・優子」「えつ！プール（ですか）！？」

姫路は自分の腹、島田と優子は自分の胸に目を向ける。

工藤「ボクは参加するよ」

霧島「……雄二を見張るためにも参加する」

潤「俺も参加させてもう一つ」

雄一「で、お前はまだあるんだ？無理にほとばし言わないが？」

島田「行くわよー。いろいろと用意して」

姫路「そうですね。いろいろと用意して」

優子「いろいろと用意しないとね」

零「秀吉、水着を買つなら着いて行つてやる」

秀吉「確かに新しいのを買つてしまつたが何故じや？」

零「多分、お前の」とだから女物を買つてくるから男物を選んでやる

明久「余計な」としないで零。」

土屋「…………迷惑」

秀吉「そうこういとなら頼むのじや」

零「頼まれた」

プールフラグ成立。

プールサイド（前書き）

バカテスト

英語

次の文を訳文しなさい。

『Although John tried to take the airplane for Japan with his wife's handmake lanch, he noticed that he forget the passport on the way.』

姫路瑞希

ジョンは妻の手作り弁当を持って日本行きの飛行機に乗りつと/or いたが、途中でパスポートを忘れていることに気付いた。

教師のコメント
はい。正解です。

土屋康太
ジョンは

教師のコメント
ジョンです。

吉井明久

ジョンは妻の手作りのパスポートを持って日本行きの飛行機に乗りつと/or いたが、途中で弁当を忘れていることに気付いた。

教師のコメント

手作りのパスポートといつ意味をもつて一度考えてください。

哀川零

日本に来るなら日本語で書け。

教師のコメント

英語の問題なんですから。

プールサイド

零「俺が最後か?」

雄一「遅いぞ。」

零「ちよつと準備があつたからな」

雄一「その荷物か?」

零「ああ。俺の命に関わるからな」

愛子「それだけ重要な物つて」

雄一「まあ、いいか。女子は翔子について行け。鍵は渡してある」

男女に別れる。

明久「じり。葉月ちゃんと秀吉はじりじやないでしょ」

葉月「冗談です」

秀吉「わしは冗談じやないのじやが」

島田「やつやと行くわよ。葉月、秀吉」

優子「秀吉は男よ」

秀吉「つこに島田までそんな田で見るよつになつたのじや」

雄一「問題はないだろ。あれを見ろ」

更衣室 秀吉&零（女に見える時）用

零・秀吉「何故だ（じゃ）ああ―――.」「

雄一「零、お前は清涼祭の時にやつた女装が強力だったからだろ。秀吉一人ならまだしも一人だからと言つ理由でこれが作られたらしい」

零「もう絶対に女装しねえ！」

秀吉「ズルいのじゃ！零も一緒に行くのじゃ一道連れじゃ！」

零「甘いな！俺は今女装をしてないから入れないんだよ！」

秀吉「くつ、なら今ここで零が男子の更衣室か秀吉&零の更衣室、どっちに行ぐのか決を取るのじゃ！」

零「いいぞーどうせ男子の方になるんだからなー！」

秀吉「零は秀吉&零の方に行くべきじゃと思つ者」

誰もいないに決まってる。

バツー！

満場一致

零「何故だあああ——！」

明久「あの時の姿を思い出したらねー」

土屋『ブシャアアアー！』

雄二「鉄人に捕まつた時の仕返しだ」

霧島「……雄二」と一緒に着替えさせたくない

姫路・島田・葉月」「ダメ（です）ー」「

工藤「面白そうだし」

潤「秀吉が可哀想だろ」

優子「秀吉は男だから問題ないはずよ」

零「さいですか……。今回は分かった。だが、次回からは男の方にするからな」

秀吉「さあ、一緒に着替えるのじや」

優子「秀吉×零」

零「少し黙れ腐女子」

プールサイド

俺が一番乗りか。

明久、雄二、「ムツツリー」がやつてきた。

雄二「今度は早いな零」

明久「やつぱり男物か……」

土屋「…………ガツカリしてない」

零「失礼じやないかお前ら?」

明久「女子達はやつぱり遅いな」

零「あれ、スルー?」

葉月「バカなお兄ちゃん!」

明久「どどどどうしようムツツリー! あれってスクール水着だよね! そんな物着た小学生と遊んで逮捕されない! ?」

土屋「…………弁護士を呼んで欲しい(ボタボタ)」

零「暴走するな!」

雄二「小学生の水着で取り乱すな」

葉月「お待たせしました。お兄ちゃん達」

明久「懲役一年で済みそうだね」

土屋「…………実刑は間逃れない（ボタボタ）」

雄一「お前ら冷静なフリしてるだけだろ！」

零「この画はギリギリアウトだな」

島田「い、いら葉月！」

胸元を隠した美波が走ってきた。

島田「お姉ちゃんのソレ返しなさい。」

葉月「あいつ。ズレちゃいました」

葉月の腹部が膨らんでいる。

明久「葉月ちゃんに返しなさいって言ったソレって、パットのことを？」

島田「ウチはこの一撃にかけるわ！」

明久「その一撃は記憶どろく僕の命が消えちゃうよ。」

零「殴つてもいいが、殴つたら胸が見えるぞ」

島田「うひ、葉月のバカ。せつかく用意したのに」

明久「その格好す、」く似合つてゐるよ」「

島田「えつ……それ本当?」

明久「うん、手も足も胸もバストもほつそりしてて、スゴく綺麗だと親指が踏み抜かれたように痛――――――い――」

島田「今、胸が小さいつて2回言つたわよね」

明久のバカ。

優子「吉井くん最低ね。」

優子がやつてきた。水着はワンピース型のよつだ。

零「でも、島田もパット着けてくるなんてな

優子「パットが悪いって訳?」

零「いや、別にそんな物必要無いんだ」

優子「女子にとってそれは重要なことなのよ」

零「ありのままを見せた方が俺はいいと思つが」

優子「そ、そう?」(パットなんて着けて来なければ良かつた)「

工藤「ボクもそう思つよ」

工藤の水着はトランクスタイル。

土屋「…………木下のそれは偽だ」

工藤「ムツツリーーくん危ない！」

ムツツリーーが一瞬にして消えた。

ドボン！

ムツツリーーがプールに落ちた。

零「ハイ？」

見えなかつた…………。

零「工藤、拾つて来てくれ

工藤「うん。分かつたよ」

優子はボクシングでもやつてたのか？

霧島「…………雄二」

今度は霧島か。

ブスッ

鮮やかな雄二への目漬し。

雄一「グガアアアアア！」

明久「スゴく華麗な目潰しだね」

零「雄一の田玉一いやいつ安い物だ」

雄一「お前りには実害が無いからな！」

零「その通り」

姫路「すみません！後ろを結ぶのに時間がかかって遅くなりました
！行きますよ潤ちゃん」

現れたのは姫路とバスタオルのお化けだった。

明久「ぼ、ぼくはまだやれるー！」

土屋「…………終わるわけにはいかない（ダボダボダボ）」

姫路の水着にどんだけ足に来てんだよ。

ちなみに原作と違いピンク色だ。

零「潤？」

姫路「せっかくの水着なをだからみんなに見せなきゃ」

潤「でも、ばずかしいんだが」

姫路「それじゃあ潤ちゃんはそのままでいてください。私たちは楽

しぐ遊んできますか！」

潤「わ、分かつたよ。」

潤が出てくる。

潤は赤のビキニだった。

明久「二段構えだつたとは！？」

土屋「……………伏兵か（バタツ）」

明久&ムツツリー＝擊沈！！

島田「Wor auf fur einem standard h
at Gott jene unterschieden, die
h aden, und jene. Dienicht haden
! ? Was war fur mich ungenugend!
(神様は何を基準に持つ者と持たざる者を区別してるの！？ウチに
一体何が足りないって言うのよ！）」

優子「島田さん。アタシはドイツ語は分からぬけど今なんて言つ
たかは分かつたわ。」

島田「美波でいいわ

優子「ならアタシも優子でいい

なんか変な友情が結ばれてるし。

工藤「姫路さんのあはは知つてだけど潤まで

潤「零。この格好変じゃないか？」

零「ん？ 可愛いと思ひづき」

潤「可愛い？ そつか可愛いか。俺は可愛いのか」

あれ？ トロップしてるし。

霧島「……目、治つた？」

雄二「ああ。だんだん見え」

ブスッ！

雄二「俺になんの怨みがあるんだ！」

霧島「……」（こは雄二に見せられない物が多い）

零「霧島。田瀆しばかりしてると水着の感想を聞けないぞ」

霧島「……それは困る。雄二、この水着似合つてる？」

雄二「翔子か？ ティッシュをくれ

グサツ！

雄二「イデヒヒヒヒヒヒ！」

本日三度目の目瀆し。

零「ちやんと褒めてやれよ」

雄一「視界を奪われて他になんと言えど？」

零「後は秀吉だけか」

明久「一緒に着替えたんじゃないの？」

零「あいつ着替えたのに迷惑ってたからな」

優子「戸惑つてたって、まさか女物じゃないわよねー？」

零「男物だ」

秀吉「待たせたのつ」

明久「○ @* (つらん。そんなに待つてないよ)」

零「つは地球だ」

優子「男物になんて上があるのよー?」

零「れつきとした男物だ。レーザーレーサーつていつオリンピックでも使われた物だぞ」

優子「えつーそななの?」

工藤「確かにそうだけどなんでそんなあるの?」

零「問題にならない男物つて言つたらこれしかないと思つたからな

ムツツリーーが静かだと思つたら姫路と潤ので氣絶したままだし。

プールに入る前なのにおかしくね?

プール（前書き）

バカテスト

現社

日本の民法における結婚適齢は何歳か答へなさい。

姫路瑞希

男性は18歳

女性は16歳

教師のコメント

正解です。たすがですね。姫路さん。男女共に18歳に統一するべきだという申告が報せられています。

霧島翔子

雄一となら結婚できる。

教師のコメント

出来ません。

吉井明久

愛があれば歳の差なんて関係ありませんよ。

教師のコメント

夢と希望をありがとうございます。

哀川零

昔の方が結婚できる年齢が若いってことは口コ「コン」が多いってことじゃね？

教師のコメント

最低な解答だと思います。

プール

零「そんじゃ泳ぐか

明久「そうだね

潤「ちよつといいか?..」

潤と姫路がやつてきた。

零「ん、なんだ?」

姫路「明久くん達は泳ぐのが得意ですか?」

明久「別に苦手というわけじゃないけど

潤「それなら俺達に泳ぎ方を教えてくれないか?」

潤「泳げないのか?」

姫路「はい。恥ずかしいですけど水に浮くへりいしか

潤「俺は立ち泳ぎしか出来ん」

零「立ち泳ぎって侍とかが頭に荷物乗せて川を渡つたたあれだろ!..
?何故それが出来て泳ぎ方を知らない

潤「出来ない物は出来ないんだ」

島田「何、瑞希達泳げないの？」

優子「それなら私たちが教えてあげるわよ」

明久「こいつして見ると姫路さんと天東さんがFクラスで美波と木下さんがAクラスみたいだね」

島田・優子「寄せてあげればBはあるわよー」

ゴールデンタッグ結成。

マッシュルードツキング出来んじゃね?

零「それなら水泳部の工藤は学年主席か

島田・優子「えつ?」

零「だつて泳ぎの話だろ」

明久「そうだよ。寄せてあげるって何のこと?」

島田「アキは知らなくていいことよー。」

優子「零もね!」

零「そ、そつか」

すつづー氣迫

明久「それじゃあ零、僕らはあつちに行こつか

零「そうだな

葉月「バカなお兄ちゃん達ー！」

今度は葉月か。

明久「葉月ちやんどうしたの？」

葉月「葉月と一緒に遊ぶです」

零「何して遊ぶんだ？」

葉月「水中鬼ですよ。綺麗になれるお兄ちゃん

俺の呼び方それすか！？」

明久「水中鬼？ああ、水の中でやる鬼！」

葉月「違うですよ。水中鬼って言ひのは鬼が追いかけて捕まえたら
水の中に引きずり込むって遊びです」

明久「確かにそれは鬼だ！！」

零「それは危ないからやっちゃダメだ」

葉月「危ないですか？」

明久「今からお手本を見せるからね。おーい霧島さん。

霧島「……何、吉井？」

明久「水中鬼っていう遊びをしてほしいんだけど」

零「ルールは雄一を溺れさせて人工呼吸をすればお前の勝ちだ。勝つた後は捕まえた雄一に抱き付いていいぞ」

霧島「……分かった」

霧島は雄一のところに行き、プールに投げ込む。

雄一「誰だー?」んなことした奴は!!

霧島「……早く溺れて」

雄一「翔子か!?何いきなりとちへりたことしてんだ!!」

明久「ね、危ないでしょ」

葉月「ハイです。水中鬼はやめるです」

雄一「明久! ! めえの仕業だな! !」

零「そうだ。明久は今までの怨みを返してやる。とか言ってたぞ」

明久「何言つてんの零! ? それに霧島さんはちゃんと雄一を捕まえておいでくれないと困るよ」

霧島「……」めん

明久 雄一 霧島で水中鬼スタート!

愛子「暇ならビーチバレーしない?」

零「どうする? ちひかこの」

葉月「ちひかやいのじゃなくて葉月です…やるです」

平和だな。

俺達以外が付くがな。

数十分後

休憩中

バシッ!

零「なあ、雄二。」

バシッ!

雄二「なんだ零?」

ドカン!

零「あの3人がやつてるのはビーチバレーのはずだよな」

バシッ！

雄二「それはずだが」

ズドン！

零「ボールを割るゲームじゃないよな？」

愛子「ハツ！」

優子「ソリヤツ！」

潤「秘剣 燕返し！」

愛子・優子「「それあり！？」

いや、木刀使い始めた辺りで気付けよ。

零「なんであんなに必死なんだ？」

雄二「如月グランドパークのペアチケットをかけてるらしいぞ」

零「どんだけ行きたいんだよ！？」

雄二「無知は罪つて言つが

バンツ！

あつ、ボール割れた。

そろそろ作戦を開始するか。

持つてきた大荷物はアイスだぜ！

雄一「何とちくるつたようにアイス食つてんだよ！？」

零「あ、頭が痛い」

アイスクリーム頭痛が。

雄一「なら」田食ひの上ゐる

零「まだまだあああ！」

雄一「お前を何が動かしてんだ!?」

へつ、食い終わつたぜ。

明久「零を見てたらお腹が空いてきたな」

姫路「それだつたら私失敗して3つしか出来なかつたんですがアイ
スクリームを作つてきたんですよ」

明久「第一回！」

雄一「水泳大会！！」

秀吉・土屋「イヒ――イ!――」

零「俺はバスだ。アイス食い過ぎてもつ泳げないし、食えない」

明久・雄二・秀吉・土屋「何!?」

姫路「そうですね」

優子「あれだけ食べてたアンタが悪いのよ」

霧島「……自業自得」

よしーこれで参加せずに済む。

あいつらはと

雄二『このこと知つてやがったな!』

明久『一人で逃げるな!』

秀吉『ズルいのじゃ!』

土屋『……卑怯者』

アイコンタクトつて素晴らしいね。

零「頑張ってね!」

明久「絶対一番になるよ(死ね)」

雄一「一番になるのは俺だ（死ね）」

秀吉「何を言ひ。一番になるのはこのわしじや（死ね）」

土屋「…………俺が負けるわけない（死ね）」

皆さん目が怖いですよ。つーか、秀吉ってそんなキャラだっけ？

後は原作通りに進んだよ。

スタートと同時に明久と雄一が殴りあい開始。

ターンしてきた秀吉の水着を明久が破く。

ムツツリー二が大量出血。

鉄人「お前ら、ちょっと聞きたいんだが」

明久「嫌です」

雄一「拒否する」

零「人権には黙認権という物があります」

鉄人「なんでプール掃除を頼んだのに血で汚れてんだ！」

明久「ちゃんとした理由があります！」

雄二「そうだ！死人が出なくて良かつただろ？が！」

零「てか、なんで俺が呼ばれてんだ？」

鉄人「何を言つてるのかさっぱり分からん。哀川には説明をしてもらつ」

零「えつ？ そつなの。じゃあ頑張つてねお一人さん」

明久「差別反対！」

雄二「なんでいつつもお前だけ」

明久&雄二　補習！

零　説明中

鉄人「今度の修学旅行は木下は風呂を別にした方がいいな」

零「それがいいと思いますよ」

鉄人「何を言つてゐる。お前は木下と一緒に入るんだぞ」

零「んな理不尽な！－」

強化合宿前日（前書き）

今回は短めです。

バカテストもありません。

強化合宿前日

強化合宿前日

明久が下駄箱で〇丁乙

零「どうしたんだ明久？脅迫状でも貰ったか？」

明久「何故それを！？」

零「リアルかよ」

明久「秀吉は『まかしきれたのに』

零「本当に『まかしきれたのかよ』

明久「どうすればいいんだ」

零「一旦教室に行くぞ」

明久「…………うん。そうだね」

Fクラス到着

脅迫状出した犯人は分かつてけどな。

すぐには教えるのはつまらないからね。最低でも強化合宿が始まるまでは黙つてるか。

零「秀吉、暇だ」

秀吉「唐突じやな」

零「暇な物は暇なんだ」

秀吉「なら明久を助けてやつてくれんかの？」

零「彼氏の心配か。彼女は忙しいな」

秀吉「誰が彼氏で誰が彼女じゃ！」

零「なら、顔を赤らめるなよ」

こいつも分かりやすいな。

零「脅迫状の件だろ？調べてやるよ」

秀吉「ありがたいのじゃ。ムツツリーーーにも頼んじゃし、なんとかなりそうじゃの」

鉄人「お前ら！席に着け」

元気だね。

鉄人「Fクラスは現地集合だ」

Fクラス『ふざけんじゃ ねえええ！』

明久「僕達はクラス設備がBクラス並みだ！Bクラスの移動手段の

はすだ！」

鉄人「学園長に言つてくれ」

零「雄二ー！ぬらりひょんの所に行くぞー！」

雄二「ああー！これは理不尽だ！」

須川「やつてくれ！」

土屋「…………任せた」

愛子「頑張つてね！」

Fクラスの応援を背に妖怪の巣窟へ！

学園長室

ドン！

ドアをぶつ壊し突入！

零・雄二「『どういづ』ことだー！ぬらりひょんー！」

妖怪「ドアは壊す物じゃなくて開ける物だよー！」

零「知るかー！」ンチクショー！」

雄二「それより説明しやがれ！」

妖怪「現地集合はアンタら一人を呼ぶ為の口実だよ」

雄一「口実だと？」

妖怪「そうだよ。分かつた『』の妖怪つて表記を止めな

零「へいへい

藤堂「さて、本題に入るよ」

零「また学園の危機か？」

藤堂「幽霊つてのをアンタ、やはり信じるかい？」

零「田の前にいる」

藤堂「アンタだけ連れていくのをやめようがね

零「オカルトの部分か」

藤堂「分かりやすいね。強化合宿の避暑地に最近そういうのが沸いてるみたいでね」

零「この脅し酷くない？　

雄一「俺達になんとかしきってことか？」

藤堂「正確には哀川だけでいいさね」

零「具体的に何をすればいいんだ？」

藤堂「一つは『ナメハ』を使ひな」

零「一応理由は？」

藤堂「合戦時に余計な物が飛びつけまつたよ」

零「了解」

藤堂「二つ目は湧いた物についての調査。出来たら対処をしな」

零「報酬は？」

藤堂「秀吉＆零（女に見える壁）を秀吉だけにこすりたね」

零「絶対に成功させよ！」

わい、強化合宿での計画を立てなやせなー。

強化合宿移動（前書き）

バカ日記 1日目

姫路瑞希

『バスが止まり降り立つと、不意に眩のよつな感覚が訪れました。風景や香り、空気までもがいつも暮らしている街とは違う場所で、何か素敵なことが起きるような予感がしました。』

教師のコメント

環境が変わることで良い刺激が得られたみたいですね。姫路さんに高校一年生という今この時にしか作ることの出来ない思い出がたくさんできることを願っています。

土屋康太

『バスが止まり降り立つと、不意に眩のよつな感覚が訪れた。あの感覚は何だったのだろうか？』

教師のコメント

乗り物酔いです。

坂本雄二

『バスを降り立ち、大きく息を吸い込むと、少し甘い様な、微かに酸っぱい様な、不思議な何かの香りがした。これがこの街の持つ匂いなんだなと、感慨深く思った。』

教師のコメント

隣で土屋くんが吐いてなければ、もっと違う匂いがしたでしょうね。

哀川零

『バスを降り立つと背中に悪寒が走った。ぬらりひょんに頼まれた仕事を再確認した』

教師のコメント

学園長に頼まれた仕事を頑張ってください。

強化合宿移動

目的地まで高級バスで行くことになつたぜ！

といつわけでバス内

明久「美波、何読んでんの？」

島田「心理テストよ。百均で買つたんだけど結構面白くて」

明久「へえー僕もやつていい？」

島田「いいわよ。じゃあ、次の色から思い浮かべる異性を答えてください。緑、オレンジ、青」

明久「えーと、緑が美波でオレンジが姫路さんで青が秀吉」

ビリッ！

島田「なんでウチが緑で木下が青なのよ！」

俺が頑張つてくつ付けようとしてるからかな。

雄二「俺も参加していいか？」

明久「それならみんなでやるわよ」

零「ムツツリーは寝てるから不参加だ」

島田「それじゃあ、1～10の中で数字を2つ思い浮かべてください」

雄二「俺は5・6だ」

霧島「……私は7・2」

秀吉「ワシは2・7じゃ」

零「俺は10・1」

優子「アタシは6・8ね」

愛子「ボクは9・10だよ」

明久「僕は1・4で」

潤「俺は8・5だ」

姫路「私は3・9です」

島田「最初に思い浮かべた数字はあなたがいつも周りに見せている顔です」

雄二『クールでシニカル』

霧島『無口な令嬢』

秀吉『なんでアンタばかり』

零『氣分屋』

優子『努力家』

愛子『見せたがり屋』

明久『死になさい』

潤『冷静』

姫路『温厚で慎重』

工藤『その通りだね』

零『同じく』

明久『僕、罵倒されてない！？』

秀吉『ひがみが聞こえたんじゃが！』

島田『次に思い浮かべた数字が普段あなたがあまり人に見せない顔です』

雄一『公平で優しい人』

霧島『大胆』

秀吉『少しばはウチらに分けなさいよ』

零『手段を選ばない』

優子『すずめ』

愛子『純情』

明久『惨め垂らしなく死になさい』

潤『壊れやすい』

姫路『意志の強い人』

雄二『優しいか』

優子『なんで分かるのよ』

霧島『……愛子が純情ね』

明久『さつきより酷くなつてゐるしー』

秀吉『もうこここのじや』

ムクツ

零「起きたか。ムツツリーーー」

土屋「…………腹が減つた」

零「そういうや旨時か」

雄二「それじゃあ飯にしようぜ

零「明久、弁当作つてきたぞ」

愛子「吉井くんつて零にお弁当作つて貰つてるのー?」

零「1週間に1、2回だがな」

優子「吉井×零×秀吉」

零「いい加減にしろ。腐女子」

明久「零の料理はすごいからね」

姫路「あの吉井くん。私もお弁当作つてきたんですけど」

明久「えつーでも零のがあるし」

雄一「それは俺達が食つてやるからお前は姫路のを食え」

雄一が明久の弁当を奪つ。

優子「これ本当においしいわね」

愛子「ボクも作つてもらおうかな

潤「零、俺に料理を教えてくれないか?」

零「別に構わないぞ」

優子・愛子「「私も!」^{ボク}」

零「じゃあ、今度の休みの日に来い」

潤（二人きりでやれると思つたのに）

いつの間にか明久に渡した弁当は空になつてゐる。

明久「はあ～～～」

島田「可哀想だから私のお弁当も分けてあげるわよ」

明久「いいの！？」

アイコンタクト発動！！

零『秀吉…お前も明久に弁当を分けてやれ…』

秀吉『分かったのじゃ』

秀吉「明久！ワシの弁当も分けるのじゃ」

明久「秀吉まで…？」

雄二「幸せ者だな」

明久「雄二が弁当を取らなきゃ もつと幸せだったね」

アイコンタクト発動！！

零『霧島』

霧島『……何?』

零『お前も雄一に弁当を分けてやつたらどうだ?』

霧島『……うん』

零『食べさせてやれ』

霧島「……雄一、私もお弁当分けてあげる」

雄一「俺の分はあるんだが」

霧島「……あーん」

雄一「バカ! 人前でそんな事やるな!」

零「人前じゃなきゃいいんだ」

霧島「……雄一」

雄一「やつこつ詰じやねえ!」

秀吉・姫路・島田「明久くわん(アキ)ーーあーん」

明久の方にも連動してゐるし。

優子・愛子・潤「零ーあーん」

零「何故にー?」

潤「いや、教えてもらつ前に今の腕を見てほしいからな」

愛子「うんうん」

優子「その通り」

零「そ、そつか

確かにそれは大事なことだな。

土屋「…………妬ましい」

須川「異端者だらけだな」

清水「豚野郎がお姉様に！」

久保「僕も吉井くんに」

ダメだなこのクラス

バタッ！

明久が倒れたし

姫路の弁当を食つちまつたみたいだな。

零『雄一、秀吉、ムツツリーー蘇生させるぞ手伝え』

雄一・秀吉・土屋『『分かつた』』

あーあ、着くまでに間に合つかな?

強化宿題1-1(前書き)

修正、変体が変態になつてゐるところがありました。すみませんでした。

バカテスト 物理

『観測者Aが速度Aで走つていると、正面から周波数Fの音を発し速度V-で走行してくる救急車がやつてきた。音速をVとした時、観測者にどのような事が起きたら書きなさい』。また、その現象の名称を併して答えなさい。』

姫路瑞希

『観測者Aには、車が発車する周波数がFV+V/V-V-V-となつて聞こえる。』

現象名 ドップラー効果

教師のコメント

『F-1マシンが通過する時もこれと同様の現象が起こっていますね。物理現象は一見難しい様に思えますが、意外と身近に存在するのです。』

吉井明久

『観測者AはV-+Vではねられる。』

現象名 交通事故

教師のコメント

あなたと相対速度を補足してゐあたりが腹立たしいです。

哀川零

『観測者Aはひかれた後、やつてくる救急車による＼- + \の音が聞こえる。』

現象名 119番

教師のコメント

ひかれることが前提なんですね。

強化合宿1日目零

明久サイド

雄二「目覚めたか」

明久「あれ、ここは?」

零「合宿所だ」

秀吉「お主が前世での罪を懺悔し始めた時はもうダメかと思ったの
じゃ」

明久「はははははは」

冗談だよね?

明久「ムツツリーーは覗きでも行つたの?」

零「起きていきなりその疑問はどうなんだ?」

土屋「…………今戻つた」

零「ちよづじいいな」

土屋「…………明久、起きたか。情報が無駄にならなくてすむ」

明久「えつ! ? 犯人が分かつたの?」

土屋「…………（フルフル）」

明久「そつか。まあしじうがないよね」

土屋「…………尻に火傷があるくらいしか」

明久「君は何を調べたんだ！？」

零サイド

現在ムツツリーーの情報を説明中

だだだだだだだだだだだだ！

外が騒がしいな。

ガツ！

ドアが開く音

小山「おとなしくキャツ！」

バタン！

転ぶ音

いやー、念のために扉のところに繩を張つておいて良かつた良かつた。

小山「これは一体何なのよ!」

零「普通に繩だが」

秀吉「何故お主らは咄嗟に脱出の体勢なれるのじゃ?」

明久、雄二、ムツツローが窓やタンスの中へと逃げるモーションに入っている。

明久「てつくり鉄人だと思つたから」

雄二「大体何なんだお前らは」

小山「きをとりなおして、全員手を上げておとなしくしなさい!木下はいっちく」

零「すごいな。さつき盛大に転んだ奴のセリフに思えないぞ」

小山「つるやいわよ!」

零「なんか俺そのセリフ結構言われてる気がする」

雄二「だから一体何なんだ?」

小山「このカメラが女子風呂の脱衣場にあつたのよ!」

明久「覗きじやないか!?」

小山「しらばっくれるんぢゃないわよ!ビラせアンタ達がやつたん

でしょ！」

零「証拠は？」

小山「そんなのないわよ。こんな」とアンタ達くらいしかやるわけないでしょ！」

零「証拠がないのになんてそんなに偉そうなんだ？第一脱衣場には俺達は入れない。この時点で俺達ではないことが証明される」

小山「つむらいわよ！アンタ達以外に誰がやるのよー！」

零「知るかよ！文句があるなら確固たる証拠を出しあがれ！」

小山「いいわよ。自由をもってやらせるから

姫路「明久くん。準備は出来てますね？」

島田「出来てなくともやるけど

霧島「……お仕置きが必要」

姫路・島田・霧島が現れた。

スパパパン！

女子生徒『キャッ！』

零「今のは威嚇射撃だ。もしこの部屋に一步でも入ってきたら誰だろ？と容赦なく当てる」

小山「へへ、女子相手に何するのよー。」

零「拷問をおつ始めよひとする奴が何を言ひ。当てられなかつただけありがたく思え!」

姫路「哀川くんは邪魔しないでくださいー!」

島田「やつよー!アキに用があるんだから」

霧島「……私は雄一に」

零「殺されると分かつていて誰が渡すか!てめえらも最低だな。やっぱり秀吉とくつ付けた方がいいみたいだな」

姫路「そんなのダメです!」

島田「そつよー!余計なことしないで!」

零「知るかー信用していくくせしてなにが好きだ?そんなの終われー!」

姫路・島田「へへ」「

霧島「……今回はあきらめる」

零「珍しいな

霧島「……零の言つ通りだから。雄一を信用してみる。けど、覗きをしてたのが雄一なら容赦しない」

零「やつてないんだからそれでいい」

小山「証拠を見つけてやるわ！」

零「なら、また賭けをしよう。お前達は俺達がやつたって証拠、俺達は真犯人を見つけるのを」 小山「何を賭けるのかしら？」

零「お前達が勝つたら好きなだけ俺達をボコれ。俺達が勝つたらそうだな、ムツツリー＝商会での販売用写真の撮影と行こうか」

小山「いいわ！絶対に証拠を見つけてやるんだから！」

佐藤「」、小山さん「

零「今の言葉録音したからな」

ボイスレコードーは便利だな。

零「話が終わつたなら帰れ」

小山「言われなくともそつするわ！」

女子生徒退散。

零「お前ら無事か？」

明久「うん。誰も攻撃しなかつたからね」

雄一「これで犯人を見つける理由が増えたな」

零「さて、犯人だが田星はつけてある」

明久「えつー?」

土屋「…………本当か!?」

雄一「なんでお前が調べてんだ?」

零「秀吉にな明」

秀吉「それはさうと誰なんじゃ?」

秀吉にかぶされた。

零「多分、清水だろ?」

雄一「理由は?」

零「俺の女装[写真]を販売してると聞いた」とがある。」

土屋「…………零の女装[写真]は高値がつく」

零「今すぐその販売は辞める。それに、さうと言つた通り男子が女子の脱衣場に入るのは困難だからな」

雄一「女の清水なら楽に入れるってわけか」

明久「もしかして最初から分かつて小山さんとあの賭けしたの」

零「明久にしては鋭いな」

明久「悪魔がいる」

零「だから、あの程度の小物と一緒にするな」

秀吉「じゃが、証拠はどうする気じゃ？」

零「潤、優子、愛子に火傷があるか調べてもらえばいい話だ」

プルプルプル

電話か。

潤『無事か？』

零「潤か。無事だが」

潤『それは良かつた。他の女子が覗きの犯人が零達だと言つて向かつたからな』

零「それなら追い返したよ。」

潤『さすがだな』

零「犯人を捜すのに協力してくれ」

潤『分かつた。俺達は何をすればいい？』

零「尻に火傷がある奴を探してくれ。多分清水だと思つ

潤『任せぬ』

零「頼んだぞ」

ガチャン

零「潤達に頼んだ」

雄一「これでこの問題は解決だな」

さて、原作の問題は解決だが、原作外の問題はどうなるんだか？

強化合宿1日目須川（前書き）

新キャラ登場

バカテスト 国語

次に示す四字熟語を示し、例文を作りなさい。
「あいまいも」

姫路瑞希

漢字 曖昧模糊

例文 責任の所在が曖昧模糊としていた。

教師のコメント

「あやふやではつきりしない」ということですね。読める人は多いのですが、書ける人はそつ多くありません。良く出来ました。

吉井明久

漢字 合間妹子

教師のコメント

なんとか答えようという気持ちだけ伝わってきました。

土屋康太

例文 小野小町・小野妹子・合間妹子の日本三大美女は遣隋師として旅立つた。

教師のコメント

一名男子が混ざっていますので気をつけてください。

哀川零

漢字 I My Mo

例文 英語の一人称は I My Moこれであつてたつけ？

教師のコメント

「私を」は Meです。

強化合宿1日目須川

須川サイド

やつと着いたか。

バス内で吉井達がイチャついてたから殺そうかなと思つたけど、吉井が勝手に死んだからいいとするか。

決してひがんでる訳ではないからな。

さて、ここでみんなに聞きたいたが、文月学園の避暑地であるはずの旅館に小学生女子がいたらどうすればいいだろうか？

その小学生女子が困った顔を浮かべていたらどうすればいいだろうか？

まあ、話しかけてみることにしよう。

他の奴らに見つかったら殺されかねないのでこいつと

須川「こんな所でどうしたんだ？」

「？？」「話かけないでください。あなたのことが嫌いです」

傷ついた。傷つぐだけだった。

だが俺は、ここで諦めるような人間じゃない！

須川「困つてんだろ？話聞かせてみろよ」

?????「.....」

須川「な、なあ。おいつてば」

?????「.....」

無視された。小学生女子に無視された。

自己でも何がしたいか分からんが行く！
行くぞ！

まず、標的の後ろに立つ。

右手を振りかざし、

おもいつきり標的にドーン！

?????「イッターライー！何をするんですかいきなり！？」

須川「やっと会話してくれたか」

?????「誰だつて後ろから殴られたら文句の一つへりこ言いますー」

須川「おい、お前

?????「お前ではありますん！私には七歳ななまよといふ父と母からも
らつた大事な名前があります」

須川「そうか。俺は須川 亮って言つんだ」

七迷「須川亮ですか。脇役のよつ名前ですね」

須川「原作ではそつだつたが今回は違つぞ!」

七迷「メタ発言は辞めた方がいいですよ。出番減らされますし」

須川「そ、そつだな。それより七迷困つてんだろ。俺が力になれる
と思うんだが」

七迷「後ろから殴る人に力になつてもうつほど、私も落ちぶれてま
せん」

須川「悪かつたつて。」

七迷「誠意が見えませんね」

須川「この通り」

七迷「なんでそんなに簡単に土下座が出来るんですか!?」

須川「誠意を示すとしたら土下_ノ」

七迷「分かりましたからなんこと止めてください!」

須川「この位置からなら結構見えるな」

七迷「何がですか?」

須川「何つて、スカートの中」

「ゴン！」

須川「踵落としつて、鼻打つただろうが！！」

七迷「変態！！」

蹴りがもう一発飛んでくる。

須川「見えそう！」

七迷「キヤツ！？」

中断してスカートを抑える。

七迷に向かい指を差して

須川「蹴り技はもう出来まい！」

ガブツ！

須川「いつてええええええええ！」

「いつ指を腕」と噛みやがった！！

須川「放しやがれ！！」

七迷「ガブガブ」

須川「この野郎！」

噛まれた腕をそのまま振るって七迷を地面に叩きつける。

七迷は氣絶したみたいだな。

須川「バカな奴め！小学生が高校生に勝てるとは思つたか！」

ハツハツハツハツハツハツ！

小学生女子を相手にセクハラまがいのことをして、本気で喧嘩をしたあげく、大声で勝利宣言をしていた高校生男子の姿があった。

つーか、俺だった。

十数分後

七迷「んっ」

須川「大丈夫か？」

七迷「そう見えるなら眼科に行ってください」

須川「スマセンでした」

やはり、男らしくトト座を

七迷「スカート覗く気満々でトト座をしようとするのは止めてください
セー」

ちつ！

七迷「今、心の声で舌打ちが聞こえたんですけど

須川「ナンノコアレスカ？」

七迷「片言になつてますよ」

須川「まあいいか」

七迷「私的に全然良くないんですけど」

須川「ほりよ」

缶ジュースを投げる。

七迷「えつ？」

須川「悪かったよ。それで許せとは言わないが、喉乾いてるだろ？」

七迷「えっと、ありがとうござります」

須川「別にいいよ。それより何か困つてることあるんだろ？」

七迷「そ、それは」

須川「いや、やつぱ言わなくていいや。はじめは聞き出せつかと思つていたが、言いたくないなら聞かないよ」

七迷「そうですか」

須川「だが、俺に出来る」とがあつたらちゃんと言えよ

七迷「やつしてみます」

須川「そろそろ俺行くわ。数時間ここで泊まつてゐるから、また明日な

七迷「はい。また明日です

七迷（まったく変な人ですね。ていうか明日も来るんですか！？）

強化合宿2日目 哀川零（前書き）

バカテスト 体育

水泳の個人メドレーの種目を答えなさい。

姫路瑞希

1バタフライ

2背泳ぎ

3平泳ぎ

4自由形

教師のコメント

正解です。さすが姫路さん。

哀川零

1のし

2立ち泳ぎ

3水蜘蛛

4水遁の術

教師のコメント

君は何時代の人ですか！

吉井明久

1アニソソメドレー

2懐メロメドレー

3 鳩サブレー

教師のコメント

先生も鳩サブレーは好きです。

強化合宿2日目哀川零

強化合宿2日目

つーか、Aクラスとの合同授業つっても主要キャラはFクラスに移ったから意味無いんだよな。

あつ、あの人がいたか。

あの人とは

零「高橋女史。ちょっとといいでですか？」

高橋「何でしょ?」

零「数学で模擬試験戦争をしたいんですけど」

高橋「はい、分かりました。どなたが相手ですか?」

零「高橋女史とです」

Aクラス&Fクラス『何つ!?』

合同大合唱

あいつ正氣か?

でも、哀川つて数学が得意じゃなかつたか?

高橋先生にはかなわねえだろ。

高橋先生に300円

と騒ぎ始める。

Fクラスで賭け始まってるし

零「須川！俺は自分に1000円」

須川「分かった」

高橋「賭けことは感心しませんね」

零「模擬試召戦争で負けたら反省しますよ」

高橋「それでは全力でいくしかありませんね」

零「始めから全力のつもりだったでしょ？」「うが」

高橋「ま、そうですけど」

零「鉄人！召喚フィールドを」

鉄人「西村先生とよべ。まあいい。承認する」

零・高橋「サモン！」

【哀川零／S高橋洋子

Fクラス & Aクラス『どっちも700点オーバー！？』

零「数学教師より高いんじゃないですか？」

高橋「あなたも生徒の点数じゃないでしょ？」「う

高橋女史の召喚獣は原作通り鞭

「こじは曲弦糸を張り巡らすか。

高橋女史は鞭で攻撃していくが、張り巡らされた曲弦糸が邪魔で俺の召喚獣に届かない。

高橋「やつぱり曲弦糸は厄介ですね」

零「相性的にはこっちが有利ですね」

たいていの場合に曲弦糸は最強を誇るからな。

高橋「そうみたいですね。ですが大体理解しました」

零「はい？」

高橋女史の召喚獣はダッシュで俺の召喚獣に曲弦糸を避けながら向かってくる。

そして、俺の召喚獣を殴り飛ばす。

零「解除！」

張つてあつた曲弦糸を全て回収する。

【零 数学 625】

高橋「とつぞの判断素晴らしきですね」

零「そこまで分かってるのかよ」

高橋「口調が変わつてますよ」

あそこで解除してなかつたら俺の召喚獣は曲弦糸でバラバラになつてたな。

零「あの攻撃は曲弦糸の位置を確認するための物か」

高橋「ええ。あなたの曲弦糸は動きをパターン化して使いやすくされています。そうなるとどの位置に張られているのかもいくつかのパターンになつてしまつます。ですが今までに見た配置ではないといつことば、曲弦糸の配置はランダムとこつことですね」

零「理解が早いことで。これは武器が鞭だから出来たことすね」

高橋「攻撃は近距離なので武器として使うことが出来ませんけど」

頭のいい奴は嫌いだ。

つーか、その攻略法人間技じゃねえし。

高橋「さて、どうしますか？吉井くんに行つたように手動で頑張りますか？」

零「あれは点数の低い明久だから使えたわけで高橋女史の点数を減らす自信はありませんよ」と…

不意討ちはどうかな？

バシン！

鞭で弾かれたし。

高橋「嘘ですね。曲弦系の切断方法は力ではないみたいですから」

零「そこまで分かりますか。そして普通に不意討ち対処してスルーは酷くないですか？」

高橋「それで手動を使つつもりですか？それとも諦めますか？」

またスルーかよ。

零「どっちも選ぶのは止めましょう。どうせ対策はあるみたいですし」

高橋「それではさつきみたいに簡易操縦に頼るのですか」

零「いや、それも止めましょう」

高橋「では、どうするつもりですか？」

零「いつしましょ。『ボックス
箱庭』……」

召喚大会の商品を使わせてもらいましょう。

俺の召喚獣の肌の色が褐色になり、ボクシングのポーズをとつていい
る。

零「『ハーデラッピング
刺包装』」

高橋「能力付与型でしたね」

零「さて、どんな能力何でしょ。」

高橋「あなたは分かってるんでしょ？」

高橋女史の不意討ち

零「不意討ちなんて似合わないですよ」

高橋「全部避けてるじゃないですか」

俺の召喚獣は無傷で立つている。

零「あつ本当ですね。じゃあ、いつからも行きますよ

その瞬間俺の召喚獣は高橋女史の召喚獣との距離を詰め、蹴りを入れる。

高橋「くつ、ボクシングじゃなくてキックボクシングですか。それに今の攻撃とさつきの召喚獣の回避でどんな能力が分かりました」

零「わすがですね。たつた2回で見抜くなんて」

高橋「あなたは召喚獣の動きをコントロールしてませんね?いや、どういう行動をするか少し考えただけで勝手に動いてくれるみたいですね」

零「八割正解です。攻撃の時はそうですが回避の時は考えて下さいません。つまり、反射神経が異常で俺の召喚獣は自動操縦なんですよ」

高橋「……自動操縦」

零「それでは頑張ってください」

俺の召喚獣は的確な攻撃をし、高橋女史の召喚獣の不規則に動く鞭を擦りもせず避ける。

高橋「くつ!」

零「FINISH!」

【高橋 〇】

『ウオオオオ――――――』

『本当に勝ちやがったよ!』

明久「すう」とよー零!」

雄二「800円すつた」

零「おい雄二!てめえ俺が負けると思ったのかよ!」

高橋「負けました」

零「なんで腕輪使わなかつたんですか?」

高橋「あれば多数じゃないと使いにくい物ですから」

零「そうなんですか。」

高橋「悔しいですね。ですが面白かつたと思います」

零「光栄ですね。それでは」

高橋「次は負けませんから」

零「須川、この金額はおかしくないか?」

須川「それで合つてるよ」

零「いやおかしいだろ!賭け金1000円で一万越えつて!?」

須川「お前に賭けた奴がたつたの5人。それ以外が全員高橋先生に賭けたからな」

零「俺信用ないな！！」

須川「俺も負けたから少し貰いたいくらいだよ」

零「御愁傷様」

鉄人「おい、哀川！」

零「なんすか？」

鉄人「お前の午後の補修の教師が代わった」

明久「零は出来るのも出来ないのもみんなと同じ授業じゃ会わないからね」

零「で、誰になつたんすか？」

高橋「私です」

零「高橋女史！？」

高橋「私に勝つたのですから、酷い点数を取つてもらつては困ります」

零「さいですか」

高橋「保健がどれくらいのレベルか試してみましょ。男女特有の体つきになることをなんというでしょう？」

零「第一次世界大戦」

全員『はい?』

ちなみに正解は一次性徵

一次しか合つてねーし

強化合宿2日目須川亮（前書き）

バカテスト

歴史

『西暦1492年、アメリカ大陸を発見した人物の名前をフルネームで答えなさい。』

姫路瑞希

『クリストファー・コロンブス』

教師のコメント

『正解です。卵の逸話で有名な偉人ですね。コロンブスという名前は有名ですが、意外にファーストネームはあまり知られていません。意地悪問題のつもりでしたが、姫路さんには関係無かつたみたいですね。』

須川亮

『コロン・バス』

教師のコメント

フルネームは分かりませんでしたか。コロンブスは一語でファミリーネームであつてコロン・バスがフルネームというわけではありません。気をつけましょう。

島田美波

『バス』

教師のコメント

『過去の偉人になんてことを』

哀川零

『男だからブスじゃなくてコロコロサイク』

教師のコメント

『そういう問題ではありません。』

強化合宿2日目須川亮

須川サイド

あーあ、300円すつちました。

でも、哀川の奴すげーな。高橋女史に勝つなんて。

須川「おついたいた。七迷ー。」

七迷「しゅ川さん」

須川「人の名前を噛んでんじゃねーよー。」

七迷「しょうがないじゃないですか。誰だって噛んでしまうことはあります。須川さんは生涯一度も噛んだことがないと言つのですか？」

須川「ないとは言わないが人の名前を噛むような失礼な真似はしない」

七迷「なら、なまむみなまもめなまままもと3回言つてみてください」

須川「お前が言えてないし、それ人の名前じゃない」

七迷「…………いえ、これで合つてます。噛んだわけではありません。それこの名前は知り合いに5人もいます。ですからポピュラーな名前だと思われます」

須川「なんだ今之間は！誤魔化すな！はあ、しょうがねーな。分かつたよ。なまむみなまもめなままもなまむみなまもめなままもなまむみなまもめなままも」

あつ言えちつた。

七迷「平仮名が沢山並んでると氣持ち悪いですね」

須川「それについては同感だが、こっちの方が難しいだる。なまもつて一体どうやって噛んだんだよ？なまもつて言つてみ」

七迷「にゃみやみやみやみやみよ———.」

須川「本当に前振りつけて噛んでんだよ.」

原型が分からぬ——よ！

七迷「須川さんと話すのは楽しいですね」

須川「やう言つてもうアレのとは光榮だな。俺もお前に話すのは樂しいよ」

七迷「そうですか。つまり須川さんはロココン野郎ってことですね」

須川「何故その結論に至るんだー？」

七迷「修学旅行に来て友人とではなく、そこで会った小学生と楽しく会話してゐなんて口ロコン以外の何者でもありません」

須川「友人とも楽しく会話したしわざなんて賭けまでしてきたからな！」

七迷「睡を飛ばさないでください。ロリコンがうつります」

須川「うつらねー！」

七迷「さてロリコンの須川さん」

須川「断じてロリコンじゃねー！」 七迷「では私のスカートの中は気にならないところ」とですね

須川「是非とも詳しく聞かせてください」

七迷「変態」

須川「しまつたあああ――！」

七迷「しようがないですね。少しだけですよ」

須川「マジしか!?」

未知の領域が今…………

チラツ！

須川「スペツツかよ！」

七迷「スカートの中を見せると」ひと言つただけですから

須川「騙された。死のう」

七迷「なにこんな」と絶望してゐるんですかー。」

須川「冷静になれ俺！」

七迷「そうですね。変態さん」

須川「俺は須川だ！」

七迷「そうですね。ロッキン野郎

須川「言葉の暴力って知ってるか？」

七迷「なら言葉の警察を呼んでください」

須川「扱いが前より酷くないか？」

七迷「変態に対する一般的な態度だと思います」

須川「安心しろ。冷静になつてみたら小学生に欲情するわけ無いじやねーか」

七迷「むかー私これでもクラスでは発育良い方なんですよー。」

須川「確かに見た目よりあつたな

七迷「触ったんですか！？何時触ったんですか！？」

須川「昨日氣絶したお前を運んだ時に

七迷「キスもしたこと無いのに胸を触られたなんて」

須川「だから缶ジューク奢つただろ？が

七迷「あれってそういう意味だつたんですかー？」

須川「そうだが？」

七迷「あなたには絶望しました。それに私に言わないといけないとがあるんぢやないですか？」

須川「いじめられました？」

七迷「違います！謝罪を要求します！」

須川「そう怒るなよ。減る物じやないし。むしろ増えると聞くぞ」

七迷「殺します」

須川「ぐはーそこ（男の急所）に蹴りは卑怯だ！」

七迷「あなたが卑猥だからです。クソ虫」

須川「どんな等価交換だ！？」

七迷「胴40グラム亜鉛25グラムニッケル15グラム照れ隠し5グラム殺意97キロで私の暴力は鍊成されています」

須川「ほとんど殺意じやねーか！」

七迷「ちなみに照れ隠しこののは嘘です」

須川「一番大事な要素が抜けちまつたー…もつ怒ったーせつかく芽生え始めていた罪悪感が無くなつたぞーもう触つたとか触らないとかどうでも良くなるへりこ揉んでやるー」

七迷「キヤー————」

小学生女子に本氣でセクハラをする男子高校生の姿がそこにはあつた。

それは俺ではないと信じたい。

須川「…………なんか」めん

七迷「…………反省してくれたならいいです」

やつ過ぎた。

その場のテンションに身を任せたらダメだ。

七迷「そういえば須川さん」

須川「なんだ七迷？」

七迷「この辺りでお化けが出るらしいです」

須川「なるほど。そのお化けに会いたくてこの辺りに来てんだる」

七迷「まあそんなところです。それで須川さんはお化けを信じますか？」

須川「召喚システムにオカルトが混じってるし、信じるかな」

七迷「そうですか！」

須川「嬉しそうだな」

七迷「いえそんなことはありません。では須川さんはそのお化けと友人になれますか？」

須川「んーどうだらうな？恐いし無理かもな」

七迷「……………そうですか」

須川「元気が無くなつたな」

七迷「そんないとは無いです……………それから時間なので帰ります」

須川「そうか。じゃあまた明日な」

七迷「わよひなう」

強化合宿2日目夜哀川零（前書き）

バカ日誌 3日目

土屋康太

『前略（坂本雄一に続く）』

教師のコメント
リレー形式ですか！？

坂本雄一

『そして翔子が俺の前で浴衣を緩めようとするので、俺は全力でそれを止め、思いとどまるように説得した。隣では島田が明久に迫つていて、高橋文史に零が土下座していた。（高橋文史に続く）』

教師のコメント

高橋先生まで参加するのですか！？

高橋洋子

『あのセリフはやはり大胆だったのでしょうか？しかし、タイミングが悪いところで吉井くんが声をあげましたね。（吉井明久に続く）』

教師のコメント

本当に何があったのですか？早く吉井くんのを見なければ。

吉井明久

『後略。』

教師のコメント

「これでその元気は無いでしょう。」

強化合宿2日目夜哀川零

零サイド

そろそろ清水の尻に火傷があるかがメールでやつてくる。

フルフルフルフル

ナイスタイミング！

潤『零。お前の言った通りに清水の尻に火傷があつたぞ』

零「ビンゴー・サンキューな潤」

潤『その言葉優子や愛子にも言つてやれ』

零「そうだな。あいつらも手伝ってくれたし、後でこっちの部屋来
いよ。菓子くらいはあるぞ』

潤『分かつた！後でそっちに行く』

零「そんじゃ後でな

潤『ああ、後で』

ガチャ

零「お前らやつぱり犯人は清水だつたぞ』

雄二「これで俺の人生は安泰だ」

明久「でも犯人見つけたけどどうする?」

零「鉄人に頼む」

明久「躊躇ないね」

零「躊躇?何それ食えんの?」

秀吉「女子との賭けはどうするつもりじゃ?」

零「清水を呼び出す放送と一緒に流す」

土屋「…………撮影は合宿が終わってからでいい」

零「分かった。あつ潤達が来るから菓子や飲み物を準備してくれ」

雄二「確かに今回協力してくれたからな」

明久「分かったよ」

零「じゃあ鉄人に電話するわ」

ブルブルブルブル

鉄人『西村だが』

零「零です」

鉄人『零か。お前らいつになつたら覗きに来るんだ?』

零「アンタは教え子に何を望んでんだ!?」

鉄人『すまんすまん』

零「それより脱衣場のカメラの犯人が分かりましたよ

鉄人『そうか。犯人はやはり土屋か?』

零「ムツツリーー信用無いな!でも違いますよ。犯人は清水です」

鉄人『清水が犯人だと!?.証拠は?』

零「同じ奴に明久と雄二が脅迫などで困つてたんですが、その犯人の情報と重なつてんでつて面倒なんで全部渡しに行きます」

鉄人『分かった。教員の部屋にいる』

零「それでは

ガチャ

零「ちよつと証拠を鉄人の所に行つてくるわ

明久「それじゃ準備して待つてるね

零「失礼します」

鉄人「来たか」

高橋「来ましたか」

零「高橋女史までいたんですね」

鉄人「お前が来」

高橋「女子の脱衣場なので女性がいた方が良いと思いまして」

零「確かにそうですね」

高橋『西村先生余計なこと言わないでください！』

鉄人『わ、分かりました』

教師のアイコンタクトは分からねーな。

鉄人『それで証拠は？』

証拠を説明中

鉄人「清水を呼び出すか」

零「その放送は俺にやらしてくれませんか？」

鉄人「別にいいが」

零「それでは『脱衣場のカメラの犯人が分かりました。犯人の清水美春は教員用の部屋に来やがってください。賭けに負けた女子は合宿終了日翌日にムツツリー二商會に来やがってください。ボイコットしたら容赦しません』と」

鉄人「賭けというのは何だ?」

やべ

零「それでは退散します」

鉄人「待て哀川!」

待つかこんちくしょー!

部屋に戻つて鍵を閉めればなんとかなる!

部屋が見えた!

いつけ――――――!

幻の左のスライディング!

部屋の中に入つた!

零「ムツツリー二鉄人が来る!ドアに鍵をかける!」

土屋「…………了解」

ガチャン

ミッシュヨンコンプリート！

雄一「これじゃあ弁解出来ねえだろー。」

明久「それが僕の状況だ！」

零「何があつたんだお前ら？」

明久・雄一「「ケータイを貸してくれ零ー。」

零「島田と霧島のアドレスは消してみた」

明久・雄一「「何故に！？」

零「なんか消したら面白いことになるぞー」と宇宙人から受信した

明久・雄一「「電波男！？」

雄一「「しあうがない。それでもいいから貸せ」

零「断る。」

明久「どうしてさー。」

零「てめえらが一番分かってるだろ。ケータイが壊れるような真似
はしたくないからな」

明久「雄一」

雄二「明久」

明久・雄二「行くぞー!」「

零「何すんだてめえらー!..」「

「こいつら力付くでケータイ奪いやがった!」

零「誰に何送つたんだ!」「

From 哀川 零

T.O高橋 洋子

高橋女史、生徒と教師の垣根を越えた話があります。なので夜12時に部屋に来てください。

零「ブハツ! よりによつて教師にやるか普通!..?」

雄二「ダッシャア!..」

ケータイの逆折り!?

雄二「悪いな。帰つたら新しいの買つてやる」「

零「シャレにならんだろう!..てめえらより傷が一番深いぞ!..?」

高橋女史つて冗談じや済まねえよ!..

明久「ごめん」

雄二「さすがに悪いと思つ

零「そり思つなら始めからやるなー。」

優子「何騒いでるのよ」

明久「一旦押さえて

雄二「協力者をもてなすんだろ?」

零「ちつー本当はmicroSDにバックアップしてあつたから弁
解出来たのによー」

明久・雄二「先にそれを言え!ー!ー!」

潤「客を放つておくのはどうかと思つぞ」

零「すまないな

明久「あっケーツ

零『てめえケータイ借りたらコロス』

明久「やつぱなんでもない!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!

うんうん。素直な子は好きだよ。

ちよつと本氣で殺氣出しちつた。

零「それじゃあ何かするか

秀吉「トランプがあるのでござ
」

零「ひょうひじいな。ダウトでもやるか
」

愛子「面白そうだね」

數十分後

現在上半身裸です。

明久・雄二・ムツツローは女装中&脱落。

あれ、おかしいな? 楽しくトランプやってたはずだよな?

どうしてひなったのか思って出してみよ。

?ダウトをやりながら菓子やジュースを飲み食い。

?ジースと間違つて雄一が持つてきた酒を女子&秀吉が飲む。

?多数決によつぱは脱衣する」と。

?脱ぐ物が無くなつたら女装。

?明久 ムツツロー 雄一の順に脱落。

?現在この状況。

はつまつまつまつまつ。

理解がついていかねー。

笑うしかねーな。

しかも現在4対1だぜダウト成立しねーよ。

零「ダウトー」

愛子「残念でした。これで上がりだね」

1対1になつた今が勝負！

零「1-3ダウトするのか？」

秀吉「ダウトする必要は無いからの」

秀吉 手札1

零 手札47

シクシクシクシク。

秀吉「1で上がりじゃ。ダウトせんのか?」

零「自分の手札見れば分かるよー手札に無いのはわざと出した1-3
と1だけだからなー！」

優子「早くズボンを脱ぎなやー」

結果 パンツオソンリー

よし逃げよう。

零「ひょっとトイ」

潤「ダウト」

零「だからト」

優子「ダウト」

零「ト」

愛子「ダウト」

零「もういいです」

秀吉「次のゲームに行くかの」

オワタ

神はこの世にいないのか!!

あつ使えないイタズラ娘はノーカンで。

鉄人「もう遅いから部屋に戻れ!」

女子&秀吉「え――――――――」

零「あなたが神でしたか!」

鉄人「なんて格好してるんだ！それに何を言っているか分からん」

零「先生が言つてりことだし部屋に戻れ」

優子「しょうがないわね」

愛子「またやううね」

潤「女装」

潤さん。恐ろしい呪文を言わないでください。

女子は部屋を出でぐ。

よし、あいつらも帰つたし寝るか。

? ? ? 「……………そい」

んー誰だ？こんな時間に。

? ? ? 「いい加減起きてくれださい」

零「高橋女史！？」

すゞこな俺。小さな声で驚くをマスターしたぜ。

零「何で？」

高橋「あなたがメールを送つてきたのでじょう」「

しまつた！ダウトに気を取られすぎた！」

零「えつとすいませんでした」

土下座

高橋「いきなり何ですか！？」

零「えつと

考えろ俺！ここで失敗したら人生が終わると思え！理由を考えるんだ！」

み、見えた！

下着がといづわけじゃねーぞ。

零「今日の模擬試召戦争は平氣でしたか？」

高橋「へ？」

零「いや、考えたら高橋女史にはフィードバックがあつたじゃないですか。700点オーバーのフィードバックはすぐしきつかつたと思つたんですよ」

高橋「そのことで呼び出したのですか？」

零「はい。そうですが」

高橋「はあ——」

零「許して貰えますか?」

高橋「嫌です」

零「マジですか!?」

高橋「これから2人きりの時は名前で呼んでくれるなら許します」

零「別にいいですけど?」

高橋「それでは呼んでください」

零「洋子」

明久「今の僕に役立つ物は無いな

雄二「俺を助けるという選択肢は無いのか!」

零「2人きりではないみたいですね。高橋女史」

高橋「そうですね」

周りを見ると

明久 美波に押し倒されてる。

秀吉 寝てる。

雄二 霧島に浴衣を脱がされてる。

土屋 フラッシュ無しで撮影。

俺 高橋女史に土下座に頭だけ上げて会話。

まさにカオスだね！

明久「みんな静かにしないと先生が来ちゃうよー。」

零「もう、一人いるがな」

鉄人「吉井の声が聞こえたぞ！何事だ！」

明久「なんで僕のせいみたいになつてんの！？」

雄二「明久のせいで面倒なことになつちました！」

零「明久のせいだがなんとかするぞー。」

明久「文句言いたいけどどうする？」

雄二「鉄人に向かってアキちゃん爆弾だ！」

明久「それは僕が凄い被害をこうむるから却下」

零「ワガママだな。しあがない。俺、明久、雄二が困になつて鉄

人が引き付けるからそのうちに女子は戻れ」

明久「やっぱ、そうなるね」

鉄人「ドアを開けろ！」

雄二「1、2、3で行くぞ」

明久「1」

雄二「2」

零「3」

ドアが開いた。

零・明久・雄二「「ダッシャア-----！」」

トリプルライダー キック！
と見せかけて

明久「つてあれ？なんで僕だけ」

零・雄二「「ガンバ！」」

明久は鉄人にライダー キックを浴びせた。

明久「チクショーーー！すいません。西村先生、雄二のエロ本と零の酒を隠す為にこんなことしてしまって」

雄二「何！？」

鉄人「吉井、坂本、哀川！逃がさんぞ！」

零「悪いがもう逃げる」

明久がまき添いにしようとした時にはスタートしてたぜ！

明久・雄二・鉄人「「「待てえええ！」」」

明久と雄二がスタート！

鉄人は立ち上がり体勢を直しスタート！

零 明久&雄二 鉄人の順

明久と雄二とは差が全然無いな。

零「じょうがない。俺が囮になるから明久と雄二は自販機の裏に隠れてる」

明久「いいの？」

零「俺はさつき鉄人から逃げきったからな」

雄二「任せたぞ」

零「ああ」

明久と雄二は自販機に隠れた。

零「明久と雄二が自販機に隠れてるぞ！」

明久・雄二「「ヴォ-----イ-----?」」

スクアーロ？

鉄人「そうか。吉井、坂本！」

明久「裏切ったな！」

雄二「明久はいい。俺だけでも助ける！」

零「お前ら置いて先に行く！」

明久・雄二「「主語と目的語が逆だ！」」

零「知るか」

零さんがログアウトしました。

逃げきつたぜ！

眠気がぶつ飛んじまつたな。

零「そういうやねらひよんからの仕事にそろそろ手をつけないとな」

プルプルプルプル

ケータイか。

零「哀川です」

ロキ『はーい！あなたの愛しのロキちゃんドーーす！』

零「間違い電話か。切るか」

ロキ『めん！めん！そろそろ力を貸して欲しいかなと思つてね』

零「お前の力が必要になることなど無い」

ロキ『なんでそんなに冷たいの？』

零「お前が何がしたいのか分からねーんだよ」

ロキ『キミと同じだよ。楽しみたいんだよ。この世界を』

零「その玩具の中には俺も入ってんだろう？」

ロキ『どうだろ？キミは玩具とこうより遊び相手だね』

零「遊び相手ねえ」

ロキ『それで今は納得してくれないか？』

零「最低限は認めてやる。俺もお前と遊んでやるよ

ロキ『良かつた。良かつた。キスしたいくらいだね』

零「それでどんな要件だ?」

ロキ『つれないねー。そこがいい所だけど。そここの幽霊の内容だよ』

零「お前どうかで見てるだら」

ロキ『寝てる潤ちゃんを使つてるからね』

零「俺以外への迷惑を考えないなー。」

ロキ『アタシは悪戯の神だよ。それに潤ちゃんはアタシの一部だし。話が進まないから説明しちゃうよ』

零「頼む」

説明中

ロキ『そういうわけだからそれじゃあね』

零「ありがとよ」

ロキ『…………やつこのつのズルいな』

零「ん?」

ガチャ

切りやがったよ。

零「『迷い鏡』って怪異ねー」

強化合宿3日目（前書き）

前回、バカ日誌で3日目と表記してしまいましたが、今回が3日目で前回が2日目です。

バカ日誌 3日目

姫路瑞希

『今日は少し苦手な物理の勉強をしました。いつもと違つてAクラスの人達と交流しながら勉強出来たし、とても有意義な経験になりました。』

教師のコメント

Aクラスとの交流で姫路さんに良い影響を与えたみたいでなによります。次回の振り分け試験では同じクラスになるかもしれないで良い関係を築いてくださいね。

哀川零

『今回シリアスパートをほとんど須川に持つてかれた。』

教師のコメント

作者に言つてください。

土屋康太

『前略夜になつて寝た。』

教師のコメント

昨日も書いたのですが、前略はそう使いわけではあります
ん。

吉井明久

『全略』

教師のコメント

盛大な手抜きありがとうございます。

強化合宿3日目

強化合宿3日目

須川サイド

昨日の放送は哀川だよな。

ムツツリー＝商会が関係してゐてことはやはりぱり色んな商品が入荷されるな。

そろそろ七迷に会いに行くか。

須川「ちょっと行ってくるわ」

新田「お前、昨日もそうだけど何してんだ?」

須川「いや、ちょっとな」

新田「悩みがあるなら話せよ」

須川「なんでそんなセリフが出てくんだ?」

新田「お前には悪いけど昨日お前の後をつけたんだ」

ヤバい！七迷と話してゐる所が見られてたら異端者として殺られるー。

須川「まさか見たのか？」

新田「見ちまつたよ」

ヤバいヤバいヤバいヤバいヤバいヤバいヤバいヤバい

新田「お前が一人で叫びながら暴れてるとこを」

はつ？

新田「どんなことがあろうと友達だからな」

須川「ちよつと待て！小学生くらいの女の子は見えなかつたのか？」

新田「本当に大丈夫かお前?」

俺に見えていて新田にせ迷が見えてない?

どうだ?

新田 - おい須川

須川「悪い。俺は大丈夫だから。心配するな」

新田一
それならいいか

須川「行つてくるわ」

新田「ビル!？」

須川「小学生女子に会いに」

俺は走り出す。

新田が後ろで叫んでるが、知るか！

七迷はなんでこの合宿場にいた？

お化けを探しにきたと言つてた。

いや違う。俺が言つた言葉にそつだと返しただけだ。

なら何故だ？

お化けの話を振つたのは七迷だったが信じるかどうかだった。

その後七迷はなんて言つた？

お化けと友達になれるかと聞いてきた。

何故そんな質問をした？

お化けと友達になりたかったからか？

いや違う！

七迷自身がお化けだったからだ！

お化けのあいつは俺と友人になろうとしてたんだ！

あの質問に俺はなんて答えた？

バカだ俺は！

友達になろうとしてたあいつを

零「須川！止まれ！」

哀川が前方で壁に寄りかかってる。

須川「悪い哀川！急いでんだ！」

零「妖怪に会いにか？」

須川「どうしてそれを」

俺は哀川のところで立ち止まる。

零「その調査と対処が俺の仕事だからな」

須川「調査？対処？」

零「だから後は俺に任せろ。お前は教室に帰つて平和な日常を満喫していろ」

須川「で、でも」

零「お前にどうにか出来んのか？」

須川「くつ」

零「俺は出来るだけお前らを巻き込みたくない。お前らのためじや

ない。自分のためだ。それに死ぬかもしれないんだ。帰れ

確かに哀川の言つ通りだ。俺は帰った方がいいのかかもしれないな。

だけど

須川「だけど七迷の友達になつてやらないといけないんだよ。」

あいつは俺と話して楽しいと言つていた。

須川「哀川。確かに俺は不良退治くらいしか出来ない一般人だ。だがな、あいつと会わなかつたことにしてこのまま平和な日常とやらを過ごすことなんて出来ないんだよ。」

零「本当に死ぬかもしれないんだよ！分かつてんのか？」

須川「俺はあいつの友達になるつて決めた、いや、あいつは俺の友達だ！友達のためなら地獄にだつて行つてやるよ。」

零「本当にいいんだな？」

須川「決めたからな」

零「こいつを持つてけ」

須川「これは？」

零「俺のコレクションの一つだ貸してやる」

布に包まれたものが渡される。

零「死ぬなよ」

須川「死神が死ぬってか?笑える話だな」俺はまた走り出す。

友達へ返事を返すために。

零サイド

プルプルプルプル

ケータイか

零「はい」

ロキ『本当にそれで良かったのか?』

零「ああ」

ロキ『お前がいいならいいが』

零「この世界終わるかもな」

ロキ『そしたら次の世界に連れてつてあげるよ』

零「楽しみにしてるよ」

須川サイド

須川「七迷！」

会えるならここだ。いつもあいつと会っているこの林なら。

須川「いるんだろ！七迷！」

七迷「なんで来たんですか？」

七迷が後ろに立っていた。

最初からそこに居たよ。

それが当たり前のよう。

須川「お前に会うのに理由が必要か？」

七迷「私が何なのか知ってるんでしき？」

須川「ああ」

七迷「そうですか。なら私は怪異らしくあなたに向きます

するといきなり夜のよつて暗くなつた。

七迷「これが須川さんの迷いですか」

一瞬、目を七迷から離した次の瞬間に姿が変わっていた。

その姿は

須川「死神」

鏡

銀にガラスを貼りつけ物。

姿を写すために使われる。

零サイド

昨晩

ロキ『そつちで問題ななつてるのは迷い鏡だよ

零「迷い鏡」

ロキ『迷い神の派生怪異、亞種と言つてもいいね』

零「迷い神つてのは久保と清水のオカルト召喚獣だった奴だろ」

ロキ『相変わらず原作知識が豊富だね。迷い神に似ているのだが違うといふもある』

零「それはなんだ？」

ロキ『迷い鏡は長い間迷っている者にしか見えない。そしてその迷いの形になる。つまり、迷いと向き合わないといけないんだね』

零「それはきついな」

ロキ『迷い神もそうだけど迷い神　迷いし神　迷い死神。その名の通り死神に近い奴もいるから』

零「対処方は？」

ロキ『人それぞれだね。まあ、基本的にキミが用意してるアレで大丈夫だよ』

零「なら安心だ」

現在

キン！

須川サイド

ちつ実力は全く同じか。

だが、あつちは体力が切れそうにはないな。

長期戦はこっちのが不利だな。

哀川がこの水玉模様の大鎌を貸してくれなかつたら終わつてたな。

武器はこっちが上、持久力はあっちが上か。

集中を切らした方が負ける。

七迷「何を考えてるんですかね？」

キン！ カン！ キン！

須川「どうやつたら勝てるのかと考えていたんだよ」

お互ひ殺りあいながら会話を始める。

七迷「あなたは死神をやつしてることを迷つてますよね？」

須川「さあ、どうかな？」

七迷「誤魔化しても意味無いですよ。迷いに反応する怪異なんですから」

須川「じゃあ、始めから聞くなよ」

七迷「いいじゃないですか。これが最後になるんですから」

須川「最後になんかさせねえよー」

七迷「無理ですよ」

須川「無理じゃない！こんな楽しいこと終わってたまるか！」

七迷「楽しい？確かにす」く楽しいです。命を取り合つてゐるはずなのに」

須川「だつたら…」

七迷「でも、これで終わりにします」

一日、2人の間合いが開く。

次で全部ぶつける氣か。

七迷「行きます！」

須川「俺もだ！」

2人は同時に走り出しぶつかる。

行つけええええええええ！

2人の鎌が衝突

しなかつた。

須川「えつ？」

七迷の鎌は地面に刺さつており、俺の全力は全て七迷が受けている。

須川「なんで……」

七迷「これでやつと死ねます」

須川「お前は幽霊なんだろ！ 幽霊が死ぬつてなんだよ！」

七迷「私が迷い鏡になつた理由を教えます。嫌みかもしぬませんが私は天才でした。才能がありました。でも、才能しかありませんでした。友人も親も全てがありませんでした。そんな私は死にながら生きてました。そう。私は生と死を迷つていました。」

須川「……七迷」

七迷「そのまま死んだ後も迷い続けてました。体は死んでるんだから死ぬために頑張つてました。おかしいですね？ 死にたかつたはずなのになんで泣いてるんでしょう？」

須川「生きたいからだろ！ 体が死んでようど怪異にならうと生きたかつたからだろ！」

七迷「そつか。私は生きたかつたからんですね。生きて遊んだり話をしたらしたかつたんですね。バカですね私。そんな簡単なことに気付かなかつたなんて」

須川「ああ。お前はバカだ。物凄いバカだ」

七迷「あーあ。頭の悪い須川さんにバカって言われてしました。
そろそろさよならですね。生きたかったな」

須川「七迷ーー！」

七迷の体が透け始める。

七迷「やおよがなら。つて須川さんも泣いているじゃないですか」

と言つて七迷は消えた。

強化合宿4日目（前書き）

バカ日誌は後書きです。

強化合宿4日目

4日目

つて言うより今回のオチ。

島田サイド

えりしょう。2日目にアキに告白されるなんて。

瑞希を裏切ったことになるかな？

でも、一年の時からウチも好きだつたし。

明久「おーい！美波！」

島田「アキ！？」

ちょっと前

明久サイド

明久「色んなことがあつたけど強化合宿楽しかつたな」

零「いつも着いてからは2日目しか出番無かつたのにな。原作主人公」

明久「それ言つたらバトルパートを全部持つてかれただろー・オリ主」

零・明久「…………」

雄二「バカだな前から。傷つくながら言わなきゃいいの」「

零「だが明久。その2日目に島田に誤解があつたなら、帰る前に謝つてこい」

明久「あつ！忘れてた。ちょっと行ってくるね」

明久が島田の所に向かう。

雄二「忘れてたって本当バカだな」

この後、明久が瀕死で帰ってきたのは別のお話し。

小山サイド

哀川の奴！

あいつのせいで女子生徒の信用を失つてしまつたわ！

2学期になつたら試召戦争で潰してあげるわ！

2学期に試召戦争が起きたかどうかは別のお話し。

高橋サイド

教師が生徒にこんな感情を抱いてはいけないと分かつてゐるんですが。

哀川くんの周りは可愛い女の子が多いですし、歳が離れた私なんてダメですかね？

高橋「はあ」

零「どうしたんですか？ため息なんかつこちやつて」

高橋「哀川くん！？」いつからここに？」

零「い、今ですけど」

高橋「そうですか」

零「大丈夫ですか？洋子さん」

高橋「大丈夫で、今、洋子さんって言いましたか？」

零「2人っきりの時はそつしろつて言わされましたから。嫌なら元に戻しますが」

高橋「嫌じゃありませんーす」「へいいですー」

零「なんか洋子さん反応が可愛いですね」

高橋「かかかかかかかかかかか可可愛い？」

シヨートしました。

零の鈍感野郎の恋ばなは別のお話し。

須川サイド

七迷。

あにつとの短いナビ長い思い出は「」の先死神になる」として思って出す
だらう。

だが、俺は死神であることをもう迷わない。

俺は死神としての行動が正しいのかずっと迷つてた。

七迷のような女の子の泣き顔を見たくない。

? ? ? 「しゅぎや われーん！」

はつ？

須川「な、七迷。お前どうして？」

七迷「ちゃんと瞼んだことに触れてくださいよーーー。」

須川「その前に状況を説明しやがれ！」

七迷「そうですね。説明します」

須川「頼む」

シリアルスパート突入

七迷「あれは紀元前 7777 年前」

須川「何を説明する気だ！？」

七迷「分かりました。前置きは抜きにします。あの後

七迷が消えた後

七迷サイド

七迷「ここはどこですか？」

机が沢山並んでいるし、

七迷「教室？」

確か

七迷「須川さんに切られて」

死ねた。いや、死んでしまった。

七迷「ここが死後の世界？この教室が地獄つてことですかね？」

「？？？」「そんなわけないでしょ」

誰かいるみたいですね。

？？？「教室が地獄つてのは同意見だけじね。まあ学校なんて行つたことは無いからね」

七迷「あなたは誰ですか？もしかして閻魔大王様ですか？」
？？？「違う違う。文化圏が違うよ。どちらかと言つと良いか悪い
かは別として神様だ」

七迷「てことは悪い神様。邪神ですね」

？？？「正解。悪戯の神口キ様だ」

七迷「でも、口キって男性じゃ」

口キ「彼も言ってたけどね。それは間違いだ。さつき君が言ってた
閻魔大王も女だよ」

そんなこと初めて知りましたよ。

七迷「それで口キさんが何のじ用ですか？」

口キ「生きたくないか？」

七迷「えつ？」

口キ「だから生きたくない？迷い鏡としてだけじ」

七迷「そんな」と出来るのですか！？」

ロキ「今回に限つて特別に裏技のよつた方法があるからね」

七迷「代償は何ですか?」

ロキ「用心深いねー。無いよそんな物」

七迷「じゃあタダでやつてくれるのですか!?」

ロキ「うん。そうだよ。私は面白っことに投資を惜しまないんだよ」

七迷「方法は?」

ロキ「ただ強く生きたいと願うだけさ」

七迷「それだけで」

ロキ「だから裏技なんだよ。君が七迷つて名前だからね。七迷 しち迷い 死地迷い。この名前だから迷い鏡になつたんだと思ひし」

七迷「私が迷い鏡になるのは決まつてたんでしようか?」

ロキ「別にそんなことないよ。だつて君の家族はなつてないし。やつぱり思いの強さだね。だからこそ今回の裏技が出来るわけだし」

七迷「思いの強さ」

ロキ「じゃあ願つて。生半可な気持ちだと本当に閻魔大王になつっこくなるよ」

七迷「分かりました」

ロキ「田を瞑つて願いな」

生きたいです。

学校に生きたい。

友達と遊びたい。

須川さんに会いたいです！

目を開くと林にいた。

ロキ「成功だね」

ロキの声はするが姿は見えない。

ロキ「君の四肢に付いてる輪は零が作った怪異を実体化する物だ。
どんな人にも君は見えるよ」

見てみると灰色なリングが付いてる。

ロキ「君が天国か地獄に行けるのは須川亮が死んだ時だ。彼のこと
を考えたね？」

七迷「そ、そんなことは！」

ロキ「まあいいや。あの教室に来てから一日が経っているから須川
の所に行ってきたな。文月学園に通えるように零に頼んだから」

七迷「でも私小学生ですよ」

ロキ「知識は高校生並みだから平氣でしょ?」

七迷「高2辺りまでなら」

ロキ「ちゅうぶじやん」

七迷「それではありがとうございました」

ロキ「感謝するなら楽しませてね」

現在

七迷「ところどころがあつたのです(須川を思つたことは話してません)」

須川「そうか。良かつた。本当に良かつた」

七迷「須川さん泣かないでくださいよ」

須川「悪い悪い。すくなく嬉しくて」

七迷「そうですか。あ、そうだ須川さん」

須川「なんだ？」

七迷「須川さん蕩れ」

なんだそれ？

須川「どういう意味だ？」

七迷「教えてあげません」

これが今回のお話し。

強化合宿4日目（後書き）

バカ日誌　全体

姫路瑞希

『他のクラスの人と勉強することで良い刺激が得られました。伸び悩んでいた科目についての学習法や使いやすい参考書について教えてもらつたので、今後は更に頑張つて行きたいです。』

教師のコメント

姫路さんは全体的にそつがなくこなしているように見えたので苦手な科目があるなんて驚きました。本来なら教師がなんとかしないといけないのでですが、無事問題が解決して良かったです。

島田美波

『勘違いだつたなんて悩んだウチがバカじやない！アキは絶対に殺す』

教師のコメント

文字から殺意が溢れ出ています。

吉井明久

『あまりにトラブルが多くて驚いた。初日は意識を失つて合宿所に運ばれたので記憶がない。ついてそうそう覗きの犯人だと疑われ。そして最終日に美波に殺されかけて意識を失つたので記憶がない。』

教師のコメント

そうですか。

須川亮

『これから七迷には今まで出来なかつたことをやいやいやつたこと思ひ。』

教師のコメント

七迷さんは新しい友達ですね。仲良くなれてあげてください。

召喚獣保管計画？（前書き）

「IS カオスに原作ブレイク」が書き飽きたので久しぶりに投稿

召喚獣保管計画？

学園長室

零「おい。俺がいない間に何があった？」

藤堂「私も居なかつたから分からんね」

零「お前技術開発の責任者だよな？お前が離れるのが一番マズいだろ？」「

どうしてこんなに騒いでるかと言ひつと。

召喚獣が暴走しやがりました。

Fクラスで召喚したところ俺と明久以外の召喚獣が勝手に動きます。

つまりアニメ版の原作です。

というわけで

藤堂「あんた達2人でバックアップのスイッチを押してくるぞね」

零「教師が行けばいいだろうが」

藤堂「教師の召喚獣も暴走しちまつたんだよ」

あれ？

藤堂「だから設定をいじへつてあるあなた達の召喚獣が一番なんだ
よ」

零「報酬は？」

藤堂「あんたには強化合宿と同じで更衣室を男子に戻してやるよ」

零「怪異に對してちゃんと対処しただろ！？」

藤堂「活躍したのは須川じゃないか」

零「あの実体化する装置作ったの俺だぞ！」

藤堂「対処した怪異を実体化させただけだろ」

零「じゃあ須川への報酬はなんだよ？」

藤堂「七迷の転入などの手続きや資金の援助だよ」

零「はあー。分かった。明久にも報酬を用意してやれよ」

藤堂「もちろんさね」

高橋「それではこの排気管からサーバー室に侵入し、スイッチが2つあるので同時に押してください」

零「俺の召喚獣は実体のある物は触れないんだが」

高橋「それについては問題ありません。腕輪を使い『キメラ』を使つたのち、『ダブル』を使ってみてください」

零「やつてみるか」

零・明久「サモン」

零「それじゃあ『キメラ』」

合体した召喚獣はナイフとピストルを持った目の死んだ少年。

明久「次に『ダブル』」

召喚獣が分かれ、ナイフを持った髪が斑模様の少年が現れる。

零「傑作だな」

明久「戯言だよ」

明久そのネタ知つてたの！？

零「雄一。オペレーターを頼む」

雄一「任せろ」

藤堂「そんじやあ頼んだよ」

零「明久行くぞ」

明久「うん」

排気管にGO!

雄二「零そこを右だ」

姫路「明久くんはそのまま真っ直ぐです」

明久「なんか迷路みたいだね」

零「防衛の一つだろ」

雄二「零。そこを左に曲がると」

姫路「明久くん。二つ目の右に」

零「左か」

明久「二つ目の右ね」

雄二・姫路「毒の沼がある（あります）」

零・明久「イダダダダダダ…」

雄二「進路を修復する」

零「言つのがおせえよ雄二！」

雄二「お前が何も考えずに進むのが悪いんだよ」

零「やるのか？」

雄二「上等だ！表出うー。」

秀吉「お主ら何をしておるのじゃー。」

土屋「…………マズい。敵が来る」

零「敵か。ならいつちよ殺して解して並べて揃えて晒してやんよ」

明久「雄二ー秀吉ームツツリーーーー。」

零「お前の相手はーーーつらか。俺の相手はと」

船越女史。大島教諭。福原教諭。

零「全員教師つて差別し過ぎだろー悪意しか感じねーよー。」

雄二「零の御冥福を祈るつ」

零「縁起でもねーこと囁つなー。」

明久「みんな止めさせでよー。」

零「グホッ！教師レベルのフィードバックはキツい」

明久「ギャアア————！」

零「明久！」

姫路「明久くん。やられました」

西村「戦死者は補習ー。」

残り83点。このままじゃ補習。

零「一か八かだ！補習になつてたまるか！」

最後の攻撃が当たる瞬間。

零「『キメラ』解除！『ボックス』発動！」

攻撃をネジで受けとめる。

教師の召喚獣がネジで磔になる。

そこに髪が黒く、学ランを着た零の召喚獣が立っている。

零「『教師様の召喚獣つて』『確かにフイードバックつてあつたなー』
『まあ、あつちから攻撃してきたんだし』『ボクは被害者だ』」

雄二「なんだ今の一？」

零「『ボクは誰よりも弱さを知っている』『だから先生達の弱点を
知っているんだよ』」

雄二「試合戦争の時に使えるな」

零「『狙つて出せるわけじゃないからね』『それに見てみな』」

教師の召喚獣は消えずに点数も変わっていない。

雄一「『や』いつひだ?」

零「『』」覧の通り点数が減りせないんだよね』『ボクの点数も減ら
ないけどね』

雄一「なるほど』

零「『それじゃあ、ボクは回復試験を受けてくるよ』」

召喚獣保管計画？（前書き）

前回、バカテスト忘れてました。

歴史

第二次世界大戦中にドイツが使用した爆撃と航空機をもちいた戦法はなんでしょう？

姫路

電撃戦

教師のコメント
正解です。

明久

ガンガン行こうぜ！

教師のコメント

命大事にしてください。

零

永続トラップ『最終突撃命令』発動！

教師のコメント

カウンタートラップ『神の宣告』発動です。

召喚獣保管計画？

零「やつと終わったわ」

雄一「お疲れ」

零「つーか、キツ過ぎだろ教師の召喚獣つて。『大嘘憑き（オール
フィクション）』が発動しなかつたら俺も補習室だったぞ」

雄一「そうだな。一つチート臭いが対処法がある」

ピンポーン！

ピンポーン！

ピンポーン！

原作通り小学生レベルの問題で点数を稼いでる。

雄一「これなら零の保険体育以外点数が取れる」

島田「小学生レベルで点数が取れないって」

零「思つたんだが、お前らも受けて白紙で出せばここんじやねーの
？」

藤堂「それは無料さね」

また原作と違う。

藤堂「暴走とともに」から点数が変えられなくなっていたから
ね」

零「いい案だと思ったんだが

ブー！

零「おい明久。何間違つたんだ？」

明久「え、えつと

大化の革新は何年？

零「ねー。こいつのこと殴つていいかな？」

雄二「普通あれだけ重要な問題忘れるか？」

明久「だつて、結局出なかつたし、どつちがどつちが分からなくな
つちゃつたんだよ！」

藤堂「もうこれぐらいでいいさね。充分点数取つただろ」

零「じゃあ、高橋女史。総合点でフィールドを

高橋「承認します」

零・明久「サモン！」

総合科目

零 & 明久

13794 & 8835

優子「1万点オーバーって」

零「高橋女史。大丈夫なんですか?」

高橋「何がですか?」

零「1万点オーバーのフィードバックって、シヨツク死するでしょ」

高橋「…………（ダラダラ）」

零「変な汗かいてますよ」

高橋「学園長大丈夫ですかね?」

藤堂「こいつからは設定は変えられないよ

高橋「どうするんですか!」

藤堂「我慢しな

高橋「そんな!」

雄二「排気管に侵入を開始した」

高橋「ちょっと待つてくださいよ!」

雄二「零、そのまま真っ直ぐ行くと」

零「真っ直ぐか」

雄二「毒の沼だ」

零「イダダダダダ！いい加減にしろ」「お前絶対殺す」

明久「零。この状態での腕輪はどうなるか次ので試してみようよ」「あいさつ

零「そうだな。使ってみるか」

潤「敵来たぞ」

零「てめえら話聞いてただろ！タイミング良過ぎだ！」

明久「僕は根本くんと小山さんだけぞっしちは？」

零「常夏変態だ。はあ、腕輪をここに使うのはもつたいないな

明久「確かに」

零「ま、しゃあない使ってみるか

明久「じゃあ、僕から」

根本の召喚獣が明久の死んだ目をした召喚獣に攻撃を仕掛けた瞬間にメイドが現れて根本のぶつ飛ばした。

メイドはそのまま小山の召喚獣を倒し消える。

明久「お助けキャラ?」

雄二「何故にメイド?」

零「俺の能力はと」

零の召喚獣の束ねていた髪はオールバックにグラサンはメガネに服がスーツにナイフがハサミらしき物に変わる。

零「装備の変更か」

常夏変態コンビは14枚の刃によつて八当分になる。

霧島「…………零の能力は吉井の能力と違つて、点数消費が無いみた
い」

工藤「なら、ずっと使つてられるね」

零「さて、先に行くぞ」

雄二「また敵来るぞ」

零「早つ！」

明久「わつ！教師の召喚獣だ！」

零「なら俺は生徒かな」

優子「確かに生徒みたいよ

零「今日は楽だな」

優子「100体はいるみたいだけど」

零「俺が楽だったこと無くね！？」

明久「しちうがないよ。零だし」

零以外『確かに』

零「何故に納得する！」

零以外『零が苦労するのはいつものことだし』

零「はあー。もういいや。100体しか居ねえけど、一騎当千見せてやるよ！」

明久「僕も教師相手に頑張るよ」

敵の召喚獣が零と明久の召喚獣に突撃してくる。

零「バー力」

バラバラバラバラ

生徒の召喚獣がバラバラになる。

零「曲弦糸はこの召喚獣でも使えんだよ。範囲は狭いけど

明久「課題の恨みだ！」

教師の召喚獣に目潰し。

その頃、職員室

教師「目、目があああ————！」

ムスカの名言を吐き、のたうち回っていた。

戻つてサーバールーム前

鉄人「吉井。今、課題の恨みと聞こえたんだが」

明久「あははは。氣のせいですよ」

鉄人「ならいいが。おつ、俺の召喚獣が来たぞ」

明久「補習の恨みを食らえ！」

鉄人「嘘だ。そういうことで吉井…………歯をくいしばれ」

明久「すいませんでした！」

雄二「本当に鉄人の召喚獣が来たぞ！」

明久「間に合え！」

パン！

明久の召喚獣の発泡し、

鉄人の召喚獣の頭が吹き飛んだ。

鉄人「吉井、貴様にはみつちり補習してやる」

バタツ

秀吉「保健室に運ぶのじゃ！」

雄二「俺が運ぶ！死ぬなよ鉄人！」

鉄人「うつ、…………お、俺を舐めるな」

高橋「休んだ方がいいですよ西村先生」

鉄人「お、俺は倒れるわけにはいかん！戦死者を補習室に連行する
までは！」

雄二「迷惑な執念だ！」

零「やつと終わつた」

潤「何がだ？」

零「100体召喚獣倒したんだが」

工藤「えつ、そなんだ」

土屋「…………見てなかつた」

零「なんか扱い酷くね」

そんなこんなで

その後も敵と戦つたり、毒沼に入つたり、敵と戦つたり、毒沼に入つたり、毒沼に入つたり、毒沼に入つたり、毒沼に入つたり、敵と戦つたり、毒沼に入つたり、毒沼に入つたり、教師の召喚獣と戦つたり、毒沼に入つたり、毒沼に入つたり、毒沼に入つたり、毒沼に入つたり、雄一達の召喚獣と戦つたり、毒沼に入つたりで点数が1000点もねー。

つか、毒沼率高くな?

まあ、雄一達は補習室送りにしてやつたけどね(ニコッ)ー。

零「こつちはサーバー室に到着した」

明久「僕も到着したよ」

零「スイッチを探すぞ」

明久「うん」

姫路「二人共、早くしてください!でないと」

高橋「私達が来ます!」

明久「姫路さん!」

零「高橋女史！」

マジかよ。

明久の所に姫路の召喚獣。

俺の所に高橋女史の召喚獣。

零「やっぱり、俺の方が相手キツいじゃねーか！」

明久「ど、どうしよう？」

零「全力で逃げながらスイッチ探せ！」

くつ、今までのファードバックで上手く動かねえな。

零「明久！腕輪は後何回使えるんだ？」

明久「使えて一回だけ」

零「ギリギリになつたら使え！点数が0になるよりはマシだ！」

明久「分かった！」

曲弦糸で罠を仕込みながら逃げる。

零「ちつ。鞭を振りまくつてるせいでの位置がバレて足止めにしかなんねーか。だが、それでいい」

今はそれでいい。

生き残ることだく考えろ！

明久「あつた！スイッチあつたよ！」

零「悪いー。」つちはまだだ！」

姫路の召喚獣が明久の召喚獣に迫る。

明久「ここのは守つくるー。」

明久は腕輪を発動する。

全身が真っ赤な女が現れ、姫路の召喚獣と戦う。

明久「さつきと違つーー？」

でも、

明久「さつきより強い？」

真っ赤な女性は姫路の召喚獣をおしている。

明久「このまま行けりやつー。」

この人強過ぎ。

赤い召喚獣『飽きた。帰る』

そう言つて真つ赤な召喚獣は消えた。

明久「はいっ？…………はいいいい…………！」

えつ？ちょっと待つてどうすればいいの？

明久「もう点数100点もないよ！」

零「スイッチやつと見つかった…………！」

明久「早くして…………！」

零「きよ、距離が

スイッチとの距離は結構離れている。

零「ちつ明久、ボタンを押せ！」

明久「でも！」

零「押せ！」

明久「う、うん」

零「ダッシャアアア…………！」

ブ――――――！

姫路の召喚獣の攻撃が寸前で止まった。

システム停止

明久「助かつた。でも、どうして?」

零「ケータイ電話つて言つんだ。投げたアレ」

藤堂「よくやつたねアンタ達」

零「あ、そうだ。補習室でのびてる天富教諭は今回の原因だ。鉄人
にでも捕獲させとけ」

藤堂「いつの間に調べたんだい?」

零「雄一に補習の代わりとして監視データの確認を頼んでおいたん
だよ」

藤堂「分かったよ。高橋先生修理を手伝いな」

高橋「はい」零「明久。飯でも食いに行くか」

明久「そうだね」

こうして俺の長い一日は終わった。

補習室

戦死者『哀川と吉井の奴許さねえ!』

戦死者は補習でまだまだ一日が続く。

召喚獣保管計画？（後書き）

感想をください。

バイト騒動？（前書き）

感想をください。

特別「一ナ一

鉄拳先生の人生相談室

零「僕のパートナーでは、鉄拳先生」と言ひじゃなくて、西村先生が生徒からのお悩みを解決してくれるという物です。では、鉄拳先生

西村「哀川。遠回しに鉄人と言つただろ」

零「そんな」とゆり早く自己紹介

西村「くわ。私がこのパートナーを受け持つ鉄拳先生だ。諸君らの悩みに答へよう」

零「そして、アシスタント（おちゅくつ役）のゼロつりです」

西村「本当にアシストするんだろうな？」

零「はい！ ガンガン（ちょっとかいを）して行きますー！」

西村「心配なんだが

零「前回の恋愛テクニック講座は大成功でしたよ。いくら儲けたと思つてゐんですか」

西村「はあー」

零「それでは一つ田の相談にいきましょー。」

三年生T村Y作さんからの相談

鉄拳先生、ゼロッちわん、僕の悩みを聞いてください。僕には好きな子が居ます。

その人はとても可愛らしく人気があるのです。そのKトエ吉さんはどうやら『籍上男』のようなのです。これは同性愛者になってしまつのでしょうか?先生、僕はビリしたら良いのか教えてください?

鉄拳先生とゼロッちわんのアドバイス

零「死にやがれHENTAI」

西村「どうしたいきなり?」

零「いや、気に食わねえ奴が過りまして。気を取り直して、鉄拳先生。いきなり凄い質問ですが、お答えをどうぞ」

西村「正直このパートナーを受けなければ良かったと後悔している」

零「気持ちちは分かりますが、教師と受けとめて上げてください」

西村「君の好きになつた相手には双子の姉がいたはずだ。容姿に惚れたなら彼女に思いを告げることだ。容姿でなく内面に惚れたなら……良く考え直すことだ。一部の間では『彼は第三の性別【秀吉】だから同性愛じゃない』という説があるが、決して惑わされないよう。君が健全な学校生活を送れることを祈つてる」

零「それは双子の姉に失礼じゃないか? 双子の姉はそいつの代わりじゃないんだから」

西村「確かにそうだな。すまなかつた。だが、どうすればいいと思う?」

零「俺がいい闇医者紹介するんで、そこで整形してから出直してこい」

西村「相変わらず酷いな」

零「さて、次行きましょう」

2年生K保T光さんの相談

最近、寝ても覚めても頭から離れない人が居ます。彼——Y井A久くんが笑う姿を見ていると僕まで幸せになり、彼が沈んでいると僕まで悲しくなります。彼は同性なのですが、この気持ちは恋愛感情なのでしょうか?

鉄拳先生とゼロ先生のアドバイス

西村「ここ最近頭を打つてないか? 記憶にないとしても念の為病院で検査を受けることを推奨する。同性愛云々はその後だ」

零「それでは彼にもわざきの変態と同じよひ闇医者を紹介します。

」

西村「普通の病院に行ってくれ」

零「腕は凄くいいんですよ。ただ金が高いだけで」

西村「闇医者だろ」

零「はあー。顔に黒人の肌を移植した黒い」先生に患者送りうつと思つたのに」

西村「その先生、直訳すると凄い人だぞ！」

零「話を変えて次の相談ですー！」

2年生S水M春さんの相談

私には1年生のころからずっと好きなお姉様が居ます。最近そのお姉様が悪い男に騙されています。どうしたらその男を殲滅出来るのか教えてください！

西村「貴様らには同性愛以外の悩みは無いのか！」

零「退室してしまった鉄拳先生には俺が常備してる頭痛薬と胃薬をプレゼントー今回も皆さんも買えるようにセットで販売しますー！」

今回もバカ売れしたよ。

バイト騒動？

零「明久、雄一。お前らにはここでバイトをしてもらひ

雄二「なんだいきなり」

明久「なんで僕達がそんな」としなくちゃなんないの？」

零「強化合宿の時に俺のケータイ壊したのはどこのどいつだ？」

明久・雄二「…………」

零「はい。田を逸らすな」

明久「実際に折ったのは雄一だから僕は関係ない」

零「連帯責任だ。異論は認めん」

明久「分かりました」

雄二「だいたいどんなバイトなんだ？」

零「喫茶店」

明久・雄二「……？」

零「なんで驚いてんだ？」

明久「零が持ってきたバイトにしては普通過ぎるから」

雄二「ああ。俺はてっきり新薬の実験動物あたりかと思つた」

零「お前らが俺をひひ思つてるかよく分かつた」

秀吉「お主らは何の話をしてるのじゃ？」

土屋「…………氣になる」

零「一度良かつた。お前らもバイトしねえか？」

秀吉「バイトかの？」

零「5人までの喫茶店のバイトなんだが、時給が結構良くてな

秀吉「いいかもしけんの。役の幅も広がりそつだしの」

土屋「…………新しいカメラの資金になる」

零「決まりだな」

バイト当田

零「いんこちは。哀川零です。よろしくお願ひします」

ちゃんと初対面の人には挨拶から入るわ。

店長「ああ……。よく来てくれたね……。こちらこそよろしく頼む

よ……」

駄目だ。貧乏神が見える。

秀吉「零。その手に持つてゐる塩はなんじや」

零「恐山メーカーの淨めの塩だ。今から除靈する」

明久「駄目だよ。気持ちは分かるけど人間だから」

店長「ちょっと制服を取つてくるからちょっと待つてくれ……」

店長は扉の奥に消える。

零「だいたいどうしたんだあの人。富士の樹海に向かいそつな勢い
だつたぞ」

雄二「噂で聞いたんだが、奥さんと娘さんに逃げられたらしい」

零「なるほど、俺達は奥さん達が帰つてくるまでのつなぎか」

明久「けど、僕達以外にアルバイトがいないって変じゃない?」

土屋「…………」の前來た時はバイトの女子が何人かいた

零「來たことあるのか?ああ、そのバイトの子を撮りにか

土屋「…………フルフルフル」

雄二「まあ、なんにせよ仕事は仕事だ。詮索は後にしようぜ」

店長「待たせたね……。」それが君達の制服……。サイズが合わなかつたら言つてくれ……」

明久・雄一・土屋「「サイズが合いません」」

零・秀吉「「性別が合いません」」

殴つていい?」こいつ全然駄目だ。目が節穴過ぎる。

店長「あれ? おかしいな……。せつき皿測で測つたのに……」

明久「僕は少し小さいだけですが、雄一とムツツリー一じやなかつた。坂本くんと土屋くんのサイズが明らかに合つてしません」

店長「おかしいな。坂本くんがS、吉井くんがM、土屋くんがエロじやなかつたしだと思つたんだけど……」

前言撤回。こいつらの性癖を一発で見抜きやがった。

土屋「…………エロになんて興味ない」

雄一「なに?」

零「ダウトー!」

明久「嘘だ!」

秀吉「嘘は騙せる範囲でつくもんじゃぞ」

土屋「…………フルフルフル」

店長「ああ。うつかり制服と性癖を間違えちゃった」

秀吉「じゃから、わしは性別が合ってないのじゃ」

零「秀吉はいい！なんで俺まで女の制服なんだ？」

店長「いや、吉井くんと坂本くんから昨日電話があつて哀川くんは女の制服にしてくれと頼まれたから」

零「おい。どこ行くんだ二人とも？」

明久・雄一「ビクッ」

零「ちよっと待つてくれ」

明久と雄一の襟を掴んで引き摺つてくる。

ドナドナー

バタン！

隣の部屋に行つて。

しばりくお待ちください。

ボカスカボカスカボカスカ！

バタン

零「店長。代わりの制服はないんですか？」

秀吉「中で何があつたんじゃうつか」

土屋「…………恐ろしくて聞けない」

店長「すまないね。用意してないんだよ」

零「しようがない。女ので我慢するか。雄一とムツツローは交換すれば大丈夫だろ」

土屋「…………雄一は？」

零「大丈夫。もう少しで起きるんじゃないか。生きなればだが」

秀吉「今せりりと恐ろしこ」とが聞こえたぞいー」

明久・雄一「「」」

土屋「…………良かつた。生きてた」

明久「「」」はゞ」」へ

雄二「僕は誰だ？」

秀吉・土屋「「」」

バタン

零が明久と雄一を連れて隣の部屋に戻る。

ガスツ！

バタン

明久「あれ？ なんでこんなところで寝てるんだろう？」

雄一「俺は一体？」

零「バイトに来てたんだろ。早く制服に着替えるぞ」

明久「そうだね。時間かけるわけにいかないし」

雄一「どうしたんだ2人とも？顔が青いぞ」

秀吉「な、なんでもないぞい」

土屋「…………俺達は何も見てない」

明久・雄一「「????」」

秀吉「なんだか学園祭の時みたいじゃの」

雄一「喫茶店に縁があるな」

零「確かに。2人とも接客頑張れよ」

バタン

明久とムツツリーが着替え終わって出てくる。

明久「零は接客しないの？」

零「どこかの誰かさんが俺の制服を女物にしなければそれもいいかと思つたんだがな」

明久・雄二「ヒューー」

零「口笛で誤魔化すな」

秀吉「では、わしらも着替えてくるとするかの」

雄二「そうだな。行くか2人とも」

明久「何を考えてんの雄二！秀吉と零と一緒に着替えるなんて！」

土屋「…………万死に値する」

零「ちよつと待て。秀吉は知らんが俺は男だ。殺すゾ」

秀吉「わしも男なのじゃ！」

明久「それは戸籍上の話でしょ！」

土屋「…………秀吉の性別は秀吉。零の性別は男女比率5対5」

零「アホらしい」

バタン

ガチャツ

俺、秀吉、雄一は更衣室に入り、鍵を閉める。

明久「雄一。もし行動を改めないなら」

零「ドアとか壊して突入は止めろよ。弁償することになるから

明久「霧島さんこの状況を包み隠さず暴露する」

雄一「俺は廊下で着替えよ」

明久「よし。僕達は店長のところに行くから」

秀吉「ファスナーが上がらんの。すまぬ。雄一上げてくれって、雄一はどこに行つたのじや?」

零「アイツも命が惜しいんだよ」

秀吉「それじゃあ零。頼むぞ」

零「構わないぞ。教えてほしいんだが、この制服はどうやって着るんだ?」

秀吉「そんなことも分からんのか。今までどうやって女物の服を着てたんじや」

零「そんな機会普通は滅多にないからな

滅多にもありません。

はあー、着替えの時点でこれって、先が思いやられる。

バイト騒動？（前書き）

バカテスト

英語

次の言葉を正しい英語に直しなさい。

『ハートフルラブストーリー』

姫路瑞希

「heartful love story」

教師のコメント

正解です。映画や本の謳い文句ですが、heartの部分を間違える人が良くなっています。

島田美波

「hurt full rough story」

教師のコメント

hurt ケガ

full いっぱいの

rough 荒っぽい

story 物語

意図的に間違えたのではないかと思う程綺麗に間違つてますね。このハートフルラブストーリーを演じるのはあなただけだと思います。

霧島翔子

「hurt full rough story」

教師のコメント

もう一人いました。

哀川零

r h u r t f u l l r o u g h s t o r y

教師のコメント

訂正します。結構居るみたいです。

バイト騒動？

着替えが終わって明久達のところに行くと

零「お前ら何やってんだ？」

ドアの前にへばりついていた。

明久「あれどうしたらいいだろ？」

指差した先には生氣の無い店長が。

零「どうもこいつも声かけるしかないだろ。後ムツツリーー、写真を撮るなら金払え」

明久「そこは撮るのを止めるとこりでしょ」

零「金さえ貰えればそれくらいいい。報酬は俺の[写真の売り上げ]の半分だ」

土屋「…………交渉成立」

零「OK。明久、ちょっと会話してこい」

明久「分かったよ」

ガチャツ

明久「失礼します」

店長「…………」

返事が無いただの屍のよつだ。

零（リハビリに軽い日常会話からしる）

明久（了解）

明久「よし、あの店長？」

店長「ん……？ああ、なんかい？」

明久「今日はいい天氣ですね」

店長「ああ。そうだね。お父さんってウザいよね」

言葉のキャッチボールが成り立たねえ！

明久「お密せん。いっぱい来るといいですね」

店長「僕の可愛い娘はね……。一歳になるまで『お父さん大好き』
だったんだよ」

明久「それは記憶の捏造です」

駄目だ。末期患者だ。

明久（どうしよう。もう挫けそつだよ）

零（諦めるな。相手の興味がある話をしない）

雄一（娘さんにつけてはどうだ）

秀吉（それなら余話になるかもしけんの）

明久「あの」

店長「…………うん？」

明久「店長の娘さんつてどんな」

店長「五秒やる。神への祈りを済ませろ」

店長が一瞬で明久の首にナイフを押しつける。

やべえ。稀に見る人外の動きだ。

明久「店長待つてください！落ち着いてください！だいたいそのナ
イフビニから出したんですか！？」

店長「あ、ああ……。君はアルバイトの子だったよね？僕の可愛い
天使を誑かしに来た輩じゃなかつたよね？」

明久「そ、そうですよ。当たり前じゃないですか。あははは」

明久（ねえ、みんな。あの店長はアウト？セーフ？）

土屋 チェンジ

雄一（ホールド負け）

零
ノーゲーム

明久（そうこうえいば言つのが遅れたけど二人とも制服が凄く似合つて
るね）

零「このタイミングで言つことがバカ久！」

バタン！

店長「ディア マイ ドーター！」

明久のバカな発言にドアを開けて突っ込んだら、店長が俺と秀吉に
襲い掛かってきた。

零「なんだいきなり！？」

明久「店長ーなにとち狂つてんですかー？」

店長「ディア マイ ドーター！」

秀吉「駄目じやー言葉が通じないのじやー！」

雄一「面倒だ！取り押さえろー！」

零「無理だ！速過ぎて当たらねえー！」

ドン！

零「雄二！大丈夫か！？」

雄二「なんとか防いだ。くつ、鉄人クラスだ」

零「秀吉！『父親に日記を読まれた思春期の女子』のセリフを大声で！」

秀吉「分かったのじゃ！『お父さんなんか大嫌い！』」

店長「そうかい。それじゃあ今夜はお父さんと一緒にお風呂に入ろう」

零「駄目だ会話が成り立たねえ！しじみがねえな！来やがれ変態！」

店長「ディア マイ ドーター！」

零「悪霊退散！」

恐山メーカーの浄めの塩で日漬しをし、象用睡眠薬を静脈注射乱れ撃ち！

零「はあー。墮ちたか」

明久「で、じつある？」

零「じつあるもじつあるも店長は当分起きないぞ」

秀吉「わしらだけで店を回すのは無理があるじゃろ」

雄一「外に臨時休業とでも貼つておいた」

零「そうだな」

カランコロン

客か。
悪いが休みと言つて帰つてもらうか。

明久「いらっしゃいませ！」

つて、明久何やつてんの！？

客一良かうた。やうてたんだ。これで時間潰せるね」

客一ホント、良かつた

零（何せうてんだ明日！）

明久（じょうく、めんこう） 頭の中でシミュレーションしてたらお密さんが来て、つい

秀吉（困ったのう。追い返せる雰囲気じゃないぞい）

零（しゃあない。俺がメニュー見て、適当に作るから接客してこい）

明久 ごめん

零（まあ、反にするな。学園祭の要領で頑張れ）

明久（うんー、頑張るよ）

零「さて、作るか」

明久「ご注文はにゃんでしょうか？」

あ、囁んだ。

明久「す、すいましえん」

また、囁んだ。

客「君、バイト始めて？」

明久「は、はい！」

客「気にしないから頑張つて」

明久「はい。ご注文はなんでしょうか？」

お、言えた。

客「それじゃあ、ミルクティーとコーヒーブラックで」

明久「ご注文を繰り返しましゅ。ミルクティーとコーヒーをブラックでしゅね」

2回囁んだ。

明久「失礼します！」

明久が逃げかえってきた。

明久「僕には高度過ぎて無理だったよ」

零「あのミスは好印象を得られるから大丈夫だ」

明久「本当?」

零「ホントだからまた客來たから行つてこい。次は噛まないようにな」

明久「うん。今度は失敗しないよ」

さて、ミルクティーとコーヒー・ブラックだな。

明久「あつ!変態先輩!」

常村「常村と夏川だ!お前の記憶力はどうなつてんだ!」

別にいいんじゃない。

さてと紅茶とコーヒーはこれでいいな。

後はと、あつ!

零「秀吉。どうやらミルクが切れてるみたいだから明久と注文した客に伝えてきてくれ」

秀吉「分かったのじゃ」

客が増えてきたな。

秀吉「すみませんがお客様。注文されたミルクティーですが、ミルクが切れてしまいアイスティーになってしまいますが、よろしいでしょうか?」

客「それならそれでいいわ」

秀吉「かしこまりました。すぐにお持ちいたします」

さすが秀吉、完璧な受け答えだな。

常村「俺はアイスミルク」

夏川「俺はアイスミルク」

明久「すみませんお客様。現在ミルクが切れておりますので

ちゃんと明久も出来て

明久「アイスでよろしいでしょうか?」

なかつた。

夏川「それってただの氷だよな」

明久「では少々お待ちください」

常村「話聞けよー」

ま、いいか。

可哀想だから水をサービスしつくか。

常村「この「バー」は何をフレンドしてあるんだ?」

明久「はい。ホットコーヒーとアイスコーヒーをフレンドしてあります」

常村「その2つを混ぜたらダメだろ?..ただぬるくなるだけだろ?..」

明久「備え付けのタバスコとつまようじはお好みで入れてください」

常村「居ねえよ!..そんな特殊な好み持つた奴なんて居ねえよ!..」

明久「とにかくお客様」

常村「あん。なんだよ?..」

明久「今日はウェイレスに手を出さないんですね」

常村「責任者を出しゃがれ!..」

零「私が責任者ですが。何か問題でも?変態共」

常村「問題もなにも今罵倒されたんだが」

零「襲われた身となればこの対応が当たり前じゃないでしょうか?
また埋めますよ」

常村「お、お前」

夏川「可愛い」

零「えつー・嘘! ? 何その反応! ?」

明久を超える斜め上の解答だぞ!」

夏川「もつて罵倒してくれ」

零「止めてくださいー・警察呼びましたよー。」

常村「早つー警察呼ぶの早つー。」

夏川「警察なんかに俺の愛は止められないー。」

零「お連れの方ー! なんとかしてくださいー。」

常村「お、おひ。落ち着け夏川」

ペー・ポー・ペー・ポー・ペー・ポー

変態共は警察に連れていかれました。

常村「えつー? 俺も?」

バイト騒動？（前書き）

バカテスト 化学

（ ）を埋めなさい。

『分子で構成された個体や液体の状態にある物質において、分子を結集されている力のことを（ ）力といつ』

姫路瑞希

『（ファンデルワールス）力』

教師のコメント

正解です。別名、分子間力といいます。

土屋康太

『（ワンダーフォーゲル）力』

教師のコメント

なんとなく語感で覚えたのが分かりました。残念ですが、それは登山家の間で働く力です。

吉井明久

『（努）力』

教師のコメント

先生はこの答えが嫌いではありません。

哀川零

『（100万馬）力』

教師のコメント
先生もアトムは見ていました。

バイト騒動？

カラシゴロン

明久「いらっしゃいます」

姫路「ここにちは。明久くん。遊びに来ちゃいました」

明久「え。姫路さん」

潤「俺達もだ」

女子組入店

霧島「…………雄二。妻への隠し事は浮気の始まり」

雄二「はは。おかしいな。居るはずのない翔子が田の前に立つているんだが。呪いか？」

工藤「零くんはどうかな？」

明久「零なら厨房に」

島田「一応あいさつしつべっ」

秀吉「零から云々じや。厨房に来たら口・口・ス そひじや
「や」

島田「止めておいた方がいいみたいね」

秀吉「霧島にも伝言じゅうや」

霧島「…………何？」

秀吉「バラしちまつが、雄一はお前へのプレゼントを貰ひにバイ
トしてんだよ」

霧島「…………私にプレゼント。嬉しい」

雄二「何、勝手なこと言つてやがんだ！」

秀吉「雄一は照れ屋なんだから、隠し事くらい大目に見てやらなき
や」

霧島「…………うん。雄一が素直じゃないのは私が良く知つてゐる」

雄二「勝手なこと翔子に吹き込むな！」

秀吉「うるせえ！人生の墓場へのカウンターダウンをひこするぞ！」

優子「なんで伝言なのに会話が成立してるのよ？」

秀吉「それは秘密だ。最後に霧島。お前に今日一日雄一を好きに出
来る権利を一万で売るうと思つんだが」

霧島「…………買った」

秀吉「まごどあつ

雄二「物凄い早さで俺の人権が無くなつたぞーもうやつてられるか
！こんなバイ」

ヒュン

カスツ

厨房から何かが飛んできて、雄一の頬が切れており、後ろの壁にはバターナイフが刺さっている。

秀吉「次は当てる」

雄一「…………はははははー途中で仕事を辞めるのはいけない」と
だよな」

秀吉「そつそつ。早く霧島を席に連れてけ」

雄一「了解した」

秀吉「伝言は以上じゃ」

明久「アドリブじゃなかつたのー?」

秀吉「雄一達と違つ席に案内するのじゃ」

雄一「なぜ」うちの席を使わない!?」

秀吉「零が夫婦水入らずにしてやれと言つておつたのでの」

霧島「…………零、いい人」

雄一「あくしょんーもう好きにしるー」

秀吉「零が好き勝手やつてるのはこいつの」とじゅうる

明久「ご注文が決まりましたらお呼びください」

姫路「オススメは何ですか?」

明久「えーっと、この前来た時にはパフェが美味しかったよ。零もいるし、どれも美味しいと思つよ」

潤「前に来たことあるのか?」

明久「うん2ヶ月くらい前にね。美波と2人つき(トキン)今手が外されたよ!」

土屋「…………秀吉。」「一ヒー溢れてる」

そつちにも被害が行つたか!

姫路「美波ちゃんと2人つきりでですか?」

美波「そんなことある訳ないじゃない。ねえアキ?」

明久「そ、そうだよ。雄一と4人で来たんだよ」

バカ。足し算くらい間違えるな。

霧島「…………雄一。浮氣は許さない」

雄一「今日の扱いは一段と酷いぞ！」

姫路「後1人は誰ですか？」

明久「後1人は七迷ちゃん（ボキッ）僕の手首に終止符が打たれ
た！」

島田「どうしてそんなバレバレの嘘しかつけないのよ！暦ちゃんの
転校してきたのはつい最近だつたでしちゃうが！」

姫路「えつー？やつぱり嘘なんですかー？それじゃあ2人だけで來
たんですね」

工藤「普通に嘘でしょ」

霧島「…………雄一。私は悲しい。雄一を失う」ことが

雄一「なんで翔子が臨戦体制に入ってるんだー？」

零「秀吉ーそつちを止めろー！」

土屋「…………涙田で出て行つた」

零「その可能性は予想外だつたーならムツツリーーお前が」

土屋「…………明久を殺るので忙しい」

零「お前も敵かーちつ、俺が出るー！」

明久達のテーブルに向かう。

零「潤、優子、愛子手伝ってくれって、なんで顔を赤くして倒れる
をだ！？」

うわっ、力オス！

今は欲しくなかつた状況。

店長「き、君たちお客様の前で何やつてるんだ！」

零「店長田が覚めたんですね」

店長「私が氣絶？してゐ間良くやつてくれた」

す「」！普通の真面目な社会人に見える！

店長「とにかくで、氣絶する前の記憶が無いんだが

零「あははは。きっと、頭を打つて氣絶したから記憶が少し無くなつたんですよー（棒読み）」

あれは正当防衛だ。

だから俺は悪くないぞー。

麻酔（致死量）うつただけだもーん。

店長「そうか。頭を打つたのか

零「そんなことよつ、止めるのを手伝つてくださいー。」

店長「そうだな。後は私に任せろ」

なんて頼もしいんだ。

久しぶりに誰かを頼る気がする。

カラソロロン

清水「どうお父さん。少しば反省したって、哀川零一なんでここのにいるんですか!」

店長「美春。ディア マイ データー」

そういえば親子でしたね。アンタ達。

さて、原作を思い出すとさつき行つた店長を頼るといつ行いは撤回した方がいいかもしれない。

だって、嫌な展開しか思いつかないんだもん。

美春「ああーそこにはお姉様! 美春に会いに来てくれたんですね!」

店長「み……は……る」

店長が壊れたよ。ヤハヤハの実の能力者かと思ひへりビス黒いオーラが見えるし。

店長「キサマが」

さて、これがどうするか？

店長「キサマが私の娘を誑かす女か――――――。」

すげえ。ムツツリーーの速度を超えたぞ。

明久「店長、落ち着いてください！お客様の前ですよ！だいたい『娘を誑かす女』という日本語に疑問を持つてください！」

店長「ディア マイ データー！」

姫路「そんなことより明久くん！まだちゃんと美波ちゃんとデーターしたことについての質問が終わってませんよ！」

土屋「…………明久、覚悟」

美春「お姉様とデーター？今日とこう今日は許しませんわ！みじん切りにしてあげます」

店長「ディア マイ データー！」

霧島「…………大丈夫。痛いのは一瞬だけだから」

雄一「なんで俺の処刑が開始されようとしているー。」

よし。状況は良く分かった。

この最悪の状況から導ける最善策は、

零「明久ー雄一ー島田ー店の外に逃亡しろー。」

明久・雄二・島田「「「分かつた」」

言われた通りに明久達が逃げる。

それを姫路達が追つていった。

ふうー。問題が出て行つたぜ。

零「えーっと、お密様。」迷惑をおかけしました。（ニニラシ）」

混乱を収める営業スマイル

結局、俺一人で店回しましたよ。【ンチクショー！

まあ、奥さんに話つけてバイト代は増やしてもらつたけどね。

明久の違和感（前書き）

バカテス

政経

日本国憲法第76条『裁判官の職権の独立』について（ ）を埋めなさい。

全ての裁判官は（ ）に従ひ（ ）して（ ）を行ひ、この（ ）及び（ ）にのみ拘束される。

姫路瑞希

全ての裁判官は（良心）に従ひ（独立）して（職権）を行ひ、この（憲法）及び（法律）にのみ拘束される。

教師のコメント

大変よく出来ました。これは日本国憲法における重要な条例ですね。

吉井明久

全ての裁判官は（ピー）に従ひ（ピー）して（ピー）を行ひ、この（ピー）及び（ピー）にのみ拘束される。

教師のコメント

憲法第76条が大変なことに。

土屋康太

全ての裁判官は（本能）に従ひ（脱衣）して（全裸体操）を行ひ、この（現行犯逮捕により警察の手）及び（手錠）にのみ拘束される。

教師のコメント

全ての裁判官に誠意のある謝罪を求めます。

哀川零

文翔学園で日本国憲法が適用されるのはいつになるのだろうか。

教師のコメント

先生もそう思いますが、あなたも人のことを言えないと思います。

明久の違和感

零「ちつ、遅くなつちまつた」

たくねらりひよんの野郎、召喚獣が暴走したから、直すついでにいじくるのはいいが、俺の仕事を増やすなよ。

さて、夕飯の買い出しも終わつたし、早く家に帰らねえと。

バスローブを来た女性が現れた。

はい？

玲「あのう、ちょっとよろしいでしょうか？」

はっはー。いつも通り厄介事に巻き込まれたぜ。

周りの視線が痛い！

零「えっと、なんでしょうか？」

玲「このマンションにはどうやって行けばいいのでしょうか？」

地図を見ると、

零「ここなら知り合いで住んでるところなので分かりますよ。えっと、この道を真っ直ぐ行って、その後まっすぐ行けますよ」

玲「そうですか。ありがとうございました」

零「いいえ。ところでなんでそんな格好をしてるんですか？」

玲「ここには深い訳があるんですね」

零「そりやあ、その格好するには深い訳があつたでしょ」

玲「私は久しぶりに弟と会うんだよ」

零「なんかそれっぽいですね」

玲「電車の窓に[ヨウ]つた自分の姿を見るとまあ大変、汗だくでありますからね」

零「汗だくで弟に会うのはマズいですね」

玲「そこで、汗を吸収してくれるバスローブに着替えたわけです」

零「はい、そこがおかしい」と[ニ]気が付きましょ」

玲「いけないんですか? 急いで着替えたのに。しうつがないですね。着替えますか」

そう言つてバスローブを脱げりとする。

零「ストップ! 何脱げりとしてるんですか! ?」

玲「脱がないと着替えませんよ」

零「まさかと思つますが、バスローブには[ヨウ]で着替えたんですか

？」

玲「もひろと電車の中に決まつてゐるじゃないですか」

零「アンタに羞恥心は無いのかー?」

玲「うるせーですな。常識がありませんね」

零「まさかこんな人に常識云々言わると思わなかつたわー」

玲「そろそろ遅いので向かわせてもらいます」

零「はあー、ちよつと待つてください。これでも着てください」

カバンから白衣を取り出しどす。

零「これを羽織れば少しはマシだと想つんで」

玲「何から何までありがとひびきました」

零「礼なんていこどすよ。好きでやつてただけなんで。それじゃ

俺はその場を後にした。

原作通り滅茶苦茶な人だった。

零「よお、明久」

秀吉「おはようなのじや、明久」

明久「お、おはよう零、秀吉」

零「珍しいな。シャツにアイロンがかかってるなんて」

秀吉「寝癖も直つておるしの」

明久「そ、それは週の始めだから」

零「お前がそんな」と氣にするはずがねえだろ」

秀吉「怪しいの？」

明久「ホ、ホントに何もなって」

秀吉が明久の顔を下から覗き、「むよつ」見ている。

常村「朝から見せつけんじゃねーぞ」

久保「そちらの先輩の言つ通りだよ。吉井くんはもう少し木下くんと距離をとるべきだと思つ」

秀吉「儂は男じや」

零「よお、変態。もう片方はどついた」

常村「あにつは反省の色が見えないからまだ警察の危険になつてゐる」

零「そのまま終身刑になれ」

秀吉「明久に逃げられたのじゃ」

零「氣になるから先に行くわ」

秀吉「どうして普通に壁を塗つていいのじゃ？」

ガラガラ

零「おせよわ」

雄一「お前はどいから入つてきとんだ」

零「窓」

雄一「普通に答えるなよ」

零「お前にや、なんとかうつ格好してんだ」

雄一「実は今朝」

霧島「……雄一」

雄一「なんだ翔子？」

霧島「…………携帯電話を見せてほしー」

雄一「びひした? なんでいきなりそんなこと言いだすんだ?」

霧島「…………昨日トベで言ひてたから」

雄一「トベで? 何を?」

霧島「…………浮氣の痕跡はケータイな残るつて」

雄一「ほほっ」

霧島「…………だから見せて」

雄一「断る」

霧島「…………歯を食い縛つてほしー」

雄一「待て! 今途中経過がとんだー! ? いきなりグーか! ? グーで殴る気か! ?」

霧島「…………見せてくれる?」

雄一「あー、実は今日はたまたま家に忘れてギャアアアアアー田があああー!」

霧島「…………最初からひつするべきだった」

雄一「結局いつも田潰しじゃねーか! 歯を食い縛れつていつのはなんだつてんだよー! フェイクだったのか畜生! ー!」

霧島「…………雄一。手をひけてほしい。携帯電話が取れない」

雄一「わ、渡してたまるかー! やつと直つて帰ってきたのにお前に奪われてたまるか!」

霧島「…………抵抗するならズボンとトランクス」と持つてく

雄一「トランクス! ? 百歩譲つて、ズボンはまだしもお前は俺に下半身裸の状態で投稿しろっていうのか!」

霧島「…………お義母さんが言つてた。男子は裸ワイシャツが好きだつて」

雄一「違つからなー! 好きだからつて自分がなりたいわけじゃないからなー! そこはかなり重要だから間違えるな!」

零『なら霧島になつてもいいえ』

雄一『ぶつー変なことをはむなー! 続けるぞ』

霧島「…………私も気になる」

雄一「お前は変態か! ?」

霧島「…………変態じやない。幼なじみの私は雄一の成長を確認する義務がある」

零『お前も霧島の成長を確認しつければ』

雄一『お前いい加減にしろよ！次余計な』とを挟んだり話さねえぞ
！』

雄一「分かつたからベルトに手をかけるな！ズボンのフックを外そ
うとするな！」

霧島「…………そう」

雄一「なぜ露骨にガツカリした顔をする」

霧島「…………じゃあケータイを見せて」

雄一「やれやれ、頼むから壊してくれるなよ。機械音痴」

霧島「…………努力する」

雄一「そうしてくれ。どうだ？特に面白い物もなかつただろ？だから大人しくケータイをつてどうしてズボンに手をかける？ケータイは渡しちゃうが！」

霧島「…………私より吉井のメールが多い」

雄一「それがどうした？」

霧島「…………浮氣相手は吉井といつになると」

零『優子。トリップするなよ』

雄一『マジでやめてくれ』

雄一「いや、ないだろ」

霧島「…………だからお仕置を」

雄一「どうして俺の周りには性別を些細なことと考える奴が多いんだ？よく見り遊びの約束ばつかだら。友達だからそれくらい当たり前だろ」

霧島「…………でも」

フルブル

雄一「つと、今のメールは俺のケータイからだな。ケータイを返せの前にスリもビックリの手際で抜き取ったベルトを返せ！」

霧島「…………ダメ。返さない」

雄一「はつ？何で…………つてウオイ！今度は更にズボンを狙う気か！？こは天下の往来だぞ！…………分かった。千歩譲つてズボンは譲つてやるが。だからせめてトランクスだけは！」

霧島「…………ダメ」

雄一「お前は自分が何をしようとしてるか分かってるのか…？」

霧島「…………浮氣。絶対に。ダメ」

雄一「畜生！そつきのメールになんて書いてあつたんだ！」

雄一の家に泊めてくれないかな？今日は……家に帰りたくないんだ。

— — — — —

雄一「てなことがあって、ギリギリトランクスだけは死守した」

零一 優子がトリッフしたぞ！ 潤、なんとかしてくれ！」

ホンを貸してくれ」と、ここで零一一生のお願いがある

零・幽る たいたい体育着を着てハガ そなの方がまたハジた「

雄——その手かあ——たか

ガラガラ

明久「おはようつて、雄一なんて格好してるの!? それに零はなん
で先に着いてるのー?」

雄二「てめえのせいで明久！ てめえのせいで下半身超クールビズで登校するはめになつたんだ！ 死んで償えこのクソ野郎！」

!?

雄一「黙れ！死ね！制服を寄越せ！」

零「説明するのタリイ」

『おい、坂本の話を聞いたか？』

『トランクスで登校してきたんだろ』

『女装は見慣れてきたけどあれは度肝が抜かれたぜ』

零「とこう」とだ明久

明久「雄二。何か悩み事があるなら相談に乗るよ」

雄二「ち、違う！自ら好き好んであんな格好になつたわけじゃない
！あとトランクスだからギリギリセーフのはずだ！」

零「その状況はギリギリじゃなくてアウトだ」

明久「零。そんなこと言つたらダメだよ。雄二の精神はギリギリの
ところまで行つちゃつたんだから」

雄二「だから違つて言つてるだろ！そもそもお前があんなメール
送つてくるから！翔子に見つかって」

明久「いくら霧島さんだつて男からのメールでそんなことしないで
しょ」

雄二「いや、正直お前のメールはかなり際どかつたぞ」

零「優子がトリップしてたし」

明久「別にただの頼み事のメールでしょ」

雄一「ほほっ。わつ思つなら俺に送ったメールを大声で読んでみろ」

明久「別にいいけど？それじゃあ行くよ」

ガラガラ

秀吉「おはようなのじゅ」

姫路「おはよーい」ぞこます

島田「おはよー」

明久「雄一の家に泊めてほしいんだ。今日は…………家に帰りたくないんだ」

秀吉「儂じやダメなのかのうー」

姫路「明久くんにはまだ早いと思いますー！」

島田「ウチにはアキの本心が分からぬー！」

登場と同時に退場した3人。

零「タイミングすげーな

愛子『優子が鼻血出して倒れたよー』

零「気にしない」と元じよ

須川「吉井。朝から何変態的なことを叫んでるんだ？」

明久「ち、違うよー僕はそんなムツツリーーみたいな真似をしないよ」

土屋「…………失礼な」

雄二「ムツツリーー、凄い荷物だな」

ムツツリーー「…………ただの枕カバー」

明久「枕カバー？それにしても大き過ぎない？」

土屋「…………そんなことはない」

明久「『めんムツツリーー』。ちょっと中身を見せてもらひつよ」

土屋「…………あ」

中から出てきたのは等身大の明久（セーラー服）がプリントされた
白い布。

明久「ムツツリーー。これは何？」

土屋「…………ただの抱き枕カバー」

明久「ただのじゃない！枕カバーと抱き枕カバーには大きな隔たり
があることを覚えておくんだ！だいたいなんで僕の写真なの！」

土屋「…………世の中にはマニアというのがいる」

零「この学園じゃ結構需要があるしな」

明久「嘘だ！僕の抱き枕カバーを欲しがる人なんて」

零「ほれ、来た」

明久「へつ？」

玉野「ムツツリー二くん抱き枕カバー出来たんだ！貰っていくよ」

土屋「毎度あり」

久保もこちらを見ているが動かない。

明久が震える。

安心しろ明久。それは平常の証だ。

まあ、本人を前に買えるのは玉野しかいないしな。

零「分かつたか」

明久「はあー。とにかくその抱き枕カバーは没収するからね。作つた分は秀吉のをプリントして僕に渡すように」

須川「俺も秀吉の欲しい！」

力チャヤツ

七迷「何、当初の目的を忘れてふざけたことを言つてるんですかね？」須川さんは「

須川の首に『デスサイズ』を向ける七迷。

須川「はははは。忘れてないよ。だからこれを下ろして」

キンゴーンカンゴーン

七迷「チャイムが鳴りましたし、後で話しましょう」

須川「また後で来るわ」

— 1 —

昼休み

『吉井くん。保険室に行つてきなさい』

このセリフを午前中に一桁は聞いたぞ。

明久「まつたく失礼だな」

島田アキ。朝から様子がおかしいナジドウしたの?」

明久「別に何でもないよ。ただ勉強に目覚めただけで」

ガクツ

須川「あの吉井に勉強の志で負けるだと」

零「安心しろ須川。明久の妄言だ」

島田「大丈夫。ただの幻聴よ。熱もあるんじゃないアキ」

島田が手で体温を測る「すると

明久「これはマズい！」

咄嗟に島田から距離を取る。

島田「何よそのリアクションは一人がせつかく心配してあげてるのに！」

明久「ゴメン！これには事情があつて」

零「事情？」

明久「う…………えっと、その。あつーそういうえば須川くんと七迷さんの話って？」

零「逃げたな」

須川「実は哀川に頼みなんだが、勉強を教えてくれないか？」

零「お前までおかしくなったのか？」

須川「そうじゃない。召喚獣を強くしたいんだよ

零「どうして？」

須川「そんなことどうでもいいだろ」

大方、七迷にいい所見せたいってところか。

零「そんなお前にいい情報だ。なんと次の期末試験の結果で装備が
変わる」

雄一「それはホントか！」

零「ああ、召喚獣が暴走したから点検のついでに装備をリセットす
るんだよ」

雄一「これで勝つ確率が増えた」

零「今度はビリを田指すんだ？」

雄一「まずは打倒3年。その後は打倒教師だ」

明久「また凄いこと考えたね」

雄一「世の中は学力じゃないって証明するにはAクラスを倒すだけ
じゃないからな」

零「俺は倒しちまたんだが」

雄一「お前を倒すのも目標だよ」

零「それは面白い。やってみな」

明久「そうこうなら僕も参加していい? 零の家で」

零「いいぞ。明久の家で」

雄一「そうと決まつたらいつものメンバーに須川と七迷を加えて勉強会だ。明久の家で」

須川「よろしく頼む。明久の家で」

明久「なんで僕の家に決定されてんのさ！」

といつ訳で吉井家訪問決定！

明久の違和感（後書き）

3巻の内容を壊し過ぎた気がする。

3巻の覗きは他の場所で書きたいと思っている。

アンケート結果

本日アンケートが終了しました。

結果

バカとカオスと原作ブレイク 11票

IS カオスに原作ブレイク 28票

よつて、IS カオスに原作ブレイクになりました。

アンケートに参加してくださった方、まことにありがとうございました。

もしかしたらアンケートをとったばかりなのにテストの点数が悪かったらケータイを取り上げられるかもしないのでご了承ください。

アンケート内容

バカとカオスと原作ブレイクとIS カオスに原作ブレイク。

どちらを先に進めた方がいいか迷っています。

なので、8月30日までにどちらの続きが読みたいか、感想に書いてください。

どちらも登録していない人でも感想を書くことは可能です。

なので、気軽に選んでください。

このアンケートは8月31日に消します。このアンケートの感想には返信が出来ないと 思います。

このアンケートの結果は8月31日に掲載します。

たくさんの人人が投票してくれることを願っています。

明久家（前書き）

IIS4巻を借りてくれるまで『ひらか』を進めます。

バカテスト 国語

次の熟語の読み方を答え、例文を作りなさい。

『相殺』

姫路瑞希の解答

読み方 そうさい

例文 取引の利益で借金を相殺する。

教師のコメント

そうですね。差し引いて帳消しにするという意味なので、お金の貸し借りで良く使われます。

吉井明久の解答

読み方 そうさつ

例文 パンチにパンチをぶつけ威力を相殺した。

教師のコメント

おしいですね。確かにそうさつという読み方もありますが、『互いに殺しあう』という意味になってしまないので、この場合の威力を消すという意味にはなりません。

読み方 そうさつ
哀川零の解答

例文　俺の相手をするには弱過ぎたので、相殺ではなく虐殺になつてしまつた。

教師のコメント

正解なのですが、解答用紙についた赤い染みが気になります。

島田美波の解答

読み方　あいさつ

例文　のどかな朝、私は友達と相殺をした。

教師のコメント

それは決してのどかな朝ではありません。

放課後

雄一「よし。明久んちで期末試験の勉強会だ」

明久「期末試験の勉強会は雄一の家でしようよ」

『おい、聞いたか?』

『ああ。俄かに信じがたいが』

『あの吉井と坂本が』

『『『期末試験の存在を知つてたなんて!?』』』

零「その驚きに驚きだ!?」

雄一「はあー。だいたい勉強なんて何を今さら」

零「自分のバカさに嫌気がさしたんだろ」

雄一「なるほど。明久はまだ七の段が分からぬのか」

明久「違うからね!九九の暗唱が出来ないわけじゃないからね!どんどん2人が予想外の方向へ進んでつたから口を挟めなかつたよ!」

零「違うぞ雄一。明久は三角形の面積の求め方が分からぬんだよ」

明久「高さ×底辺÷面積！2人共いい加減僕をバカにするのは止めてよ！」

零「ほらな」

雄二「よしよし明久。そこに÷2を入れたら△角形の面積だ」

明久「……ふう。雄二」と零は人の揚げ足とりが上手いんだから

雄二「すげえ！その返しは俺でも予想外だ！」

零「甘いな雄二。これも予想済みだ」

雄二「だいたい、なんで自分の家にいたくないんだ？」

明久「えー、あー、そのー」

零「嘘だつ！（ひぐらし風）」

明久「今日は都合が悪くてって否定するのが早いよ！」

雄二「都合が悪いだと。何かあるのか？」

明久「う、うん。今日は家に改装工事の業者が来るから」

雄二「嘘つけ。今日はお前の家で新作のボクシングゲームをやる予定だつただろ？ 改装業者が来るはずがない」

明久「じゃなくて家の鍵を落としちゃって」

雄二「マンションなんだから管理人に頼めば開けてもらえるだろ？
が」

明久「でもなくて家が火事になっちゃって」

雄二「火事になったのに服にアイロンをかけてきたのか。どんだけ
大物なんだお前は？」

明久「じゃなくて、えーっと、その」

零「嘘つくならもつ少し厚みのある嘘をつけ」

雄二「そんじや、明久の家行くぞ」

明久「ダメだよ！今は部屋が物凄く散らかってるんだよ！」

姫路「そうですか。なら片付けるのを手伝いますよ」

明久「散らかってるのは2000冊のH口本なんだ」

土屋「…………任せとおけ（グッ！）」

明久「しまった！ムツツリーーの興味を煽る結果に…物凄い逆効果
だ！」

零「それじゃあ出発つてことで」

明久「待つてえええ！」

マンション

雄一「観念して鍵を出せ明久」

明久「絶対に嫌だ！」

雄一「そ、うか。ならお前も裸ワイシャツの苦しみを味わうか？」

土屋「…………ボタンは上2つ開けてくれる嬉しい」

明久「なんか段階を飛ばしてやるー」

姫路「上田遣いの涙田でお願いします」

土屋「…………了解」

秀吉「一体何を隠しておるのじゃ？」

雄一「アイロンに弁当とこうことは女でも出来たか？」

零「気付いたか。実は明久は大学を卒業した社会人でスタイル抜群の女性と同居している。しかもおはよつのチューもしようとしている」

明久「確かにあつてるけどなんで誤解を招く言い方をするかな！だいたいなんで知ってるのー？」

島田「アキ。鍵を開けなさー（＝口寂）」

明久「顔は微笑んでるのに目が笑ってない！分かりましたー今すぐ開けます」

ガチャツ！

扉が開いて目に入ったのは

干されたブラジャー

明久「駄目だ！いきなり弁解出来ない物が」

須川「哀川の言つた通りみたいだな」

雄一「本当に女が出来たなんて」

姫路「駄目じゃないですか明久くん」

明久「へつ？」

姫路「あれは明久くんが着けるには大きすぎますよ」

零「認めねえ氣だ！？」

明久「そんな誤解されるなら殴られた方がマシなんだけどー！」

七迷「じゃあ、あれはなんですか？」

七迷は机の上のパットを指す。

姫路「あれはハンペンです」

雄一「ハンパン！？」

土屋「…………じゃあ、あれは？」

女性用と思われるヘルシー弁当

姫路が崩れ落ちて

姫路「もう無理です！弁解のしようがありません！」

明久「なんでブラジャーとパットが良くて弁当が駄目なの…？」

優子「で、吉井くん。いい加減観念したひ

明久「実は姉さんが帰つて来てて」愛子「普通のことじやん

潤「姉を迷惑に言つのはいただけないな」

明久「そりなんだけど、姉さんは珍妙な人なんだ」

雄一「まあなんだ。家族について言つのは止めてやるつぜ」

明久「始めて雄一に慰められた気がする」

零「雄一も母親には苦労してるからな」

雄一「なんでそんな」と知つてんだ！？」

零「霧島に聞いた」

霧島「零に雄一と結婚するための作戦会議のために雄一の私生活を話した」

雄一「俺にとって問題の発言が聞こえたんだが！」

明久「そういうことだから姉さんが帰つてくる前に」

ガチャツ

玲「アキくん。今帰りました」

明久「間に合わなかつた」

玲「おや。アキくんのお友達ですか？いつもこの愚弟がお世話になつています」

雄一「おい、どういうことだよ。普通の姉じやねえか。俺の母親なんて」

玲「吉井玲です。これからも愚弟ともどもよろしくお願ひします」

雄一「坂本雄一です」

土屋「…………土屋康太」

須川「須川亮です」

秀吉「儂は木下秀吉じや。良く勘違いされるが儂は男なのじや」

玲「ええ。分かっていますよ。男の子ですよね」

秀吉「なんと！儂を一目で男と見抜いたのはお主と零で2人だけな
のじゃ！」

玲「だつてうちの愚弟が女の子を家に連れて来るわけないじゃないですか」「

卷之二

玲「だからそちらの8人も男の子ですよね」

明日、遼子は！8人とモチヤんとした女の子だからね！」

零「ちなみにその8人に入ってるのは俺じゃなくて秀吉だからな」

秀吉「儂は男であつてゐるのじや!」

玲「女の子。そうですか。アキくん300点減点です」

明久「姉さん酷いよ！まだ何もしてないのに！」

零一
バ
力

玲「『まだ』？訂正します。800点減点にしておきます」

雄一「明久。俺が悪かつた」

玲「すいませんね。皆さん。失礼な」と言つて。あ、あなたは。

昨日はありがとうございました

零「いえいえ。困った時はお互いままですから」

明久「零は姉さんのこと知ってるの？」

零「昨日、道を聞かれたんだよ」

玲「あの白衣は洗つたので返しますね」

須川「なんでそんな物貸したんだ？」

零「さすがにバスローブ姿を放つておくわけにはいかないだろ」

潤「言つてる意味が分からんのだが」

零「そのままの意味だけど」

明久「零。本当にありがとう。少ない時間でもあの格好をさせなかつたこと」

まあ、身内が道路でバスローブか白衣だったら、絶対に後者だよな。

勉強会（前書き）

やつと書けた。

バカテスト 英語

imaginationの正しいアクセントを答へなさい。

Don't mind it your imagination.
He had stayed on business in
yesterday.

姫路瑞希の解答

It your imagination .

教師のコメント

正解です。一般的に -t i o n といふ単語の前に m a g i n a t i o n の前の母音につきます。

土屋康太の解答

It your i (-) m (-) a (-) g (-) i (-) n (-)
-) a (-) t (-) i (-) o (-) n .

教師のコメント

数打ちや当たるといふ訳ではありません。

吉井明久の解答

It your imagination!

教師のコメント

たまに君が天才なんじゃないかと錯覚を起こすことがあります。

哀川零のコメント

いい医者紹介しましょつか？

教師のコメント

紹介はいいからたまには真面目に答えてください。

勉強会

零サイド

玲「零くん。昨日のお礼と書いたらなんですが、夕食を食べて行きませんか？」

零「そんなの悪いです」

玲「いえいえアキくんの作るパエリアは美味しいのでぜひ食べて行ってください」

明久「そうだね。みんなも食べて行ってよ」

雄一「それじゃあお言葉に甘えて」

秀吉「馳走になるかの」

みんな賛成する。

零「分かりました。じゃ馳走になります」

玲「それじゃあアキくん。お願ひします

姫路「私もお手伝い」

零「俺も腕を披露しよう」

雄一「パエリアの作り方気になるから手伝わせや」

土屋「…………手伝う」

須川「たまには中華以外も作ってみるか
明久「キッチンはそんなに広くないからまたの機会に頼むよ。姫路さん」

姫路「そうですか。残念です」

セーフだ!バイオテロは免れた!

明久「この人数だと材料足りるかな?」

玲「買い物袋に材料は入っているので大丈夫ですよ」

明久「えつー?姉さん買い物が出来るようになつたのー!?

零「驚くところそこなんだー!?

玲「姉さんだつて成長したんですから」

零「具体的には?」

玲「雲丹とタワシの違いが分かるようになります(ドヤッ)」

明久「その程度のことでドヤ顔しないでよー今まで区別出来なかつたことに驚きだよー」

雄二「羨ましい」

零「雄二の発言はスルーで行くぞ。つーか、よくそんなんで買い物

が出来たな」

玲「零くん。店員さんにメモを見せれば買い物なんて出来るんです
よ」

零「結局人任せかよ！」

土屋「…………そろそろ作り始める」

須川「早くしないと勉強の時間がなくなるぞ」

零「よくスルー出来たな」

土屋・須川「こつものことだし」

零「否定出来ないことが悲しい」

雄二「丁度いい鍋はないのか？」

明久「そここの棚にパエジエラがあるから出して

土屋「…………何それ？」

零「パエリア専用の鍋」

雄二「随分珍しい物持つてるな。ウチにはないぞ」

零「一流の料理人としてその料理にあつた最高の道具を選ぶべきだ。
買っておけ」

雄一「一流の料理人じゃねえから」

明久「かなり昔に母さんが福引きで当ってきて、パエリアを作つてみたら結構美味しかったんだ。それ以来好物になっちゃって」

須川「しかしあスペイン料理とはな。日本に帰ってきた姉がいるなら日本料理だろ」

明久「僕もそう思つたんだけどこの材料じゃ」

土屋「…………」の材料はパエリア」

雄一「確かにエビやイカはともかくサフランを使う料理なんてパエリア以外思いつかねえぞ」

零「結構あるぞ。ブイヤベースにクスクス。有名なところではサフランライスとサフランボールがある」

須川「普通はそんなに知らないからな」

明久「あれホールトマトって何に使うんだろ?」

土屋「…………トマトソースを使ったパエリアがある」

明久「そんなのあるんだ」

零「イタリアで言つとソフリットを使ったトマトソースだな

雄一「よく作つてゐるのに知らない材料があるのはおかしくないか?」

明久「買い物出しも調理も僕がやつてたから姉さんが間違えただけじゃない」

雄一「そうか」

零「そんじゃ、明久と雄一はパエリア。ムツリーニと須川はサラダを作ってくれ。俺はブイヤベースを作るから」

明久「そうだね」

海鮮とサフランがあればブイヤベースは作れるからな。

調理中

明久「そりゃえばみんな料理上手いよね」

零「俺はいろんな店で修行したしな」

土屋「…………バイトで覚えた」

須川「うちは中華料理店だから手伝つてるうちに」

明久「須川くんのうちつて中華料理店なんだ。まあでも雄一は家で覚えたタイプでしょ？」

雄一「ああ。おふくろに任せるとまず食える物が出来ない。でもどうしてだ？」

明久「だって雄一って家の中で地位が低そうじやん」

全員『はつ?』

須川「普通は作れる人が作るもんだぞ」

明久「えつーそつなの?」

玲「母の教育方針でウチではそつなっています」

明久「母さんめ。騙したな!」

雄一「16年間気付かなかつたのかよ」

土屋「…………明久らしい」

零「話ながらでいいから手を動かせよ」

明久「分かつてるよ」

雄一「そいや明久。お前玲さんに何か隠してるだろ」

明久「実はさ、成績と生活は零とかのおかげで大丈夫になつたんだけど女子との関係なんだよね」

零「どうこつことだ?」

明久「姉さんは生活を見て問題があるたび減点していくんだ。減点された分を次のテストの点数から引いた点数が今年の始めのテストの点数より低かつたら姉さんがこっちに住むことになるんだ」

須川「なるほど。生活は零の教育によつて普通より酷いがマシにな

つた。だが女とは？」

明久「ウチの姉さんは手をつないだだけで不純異性交友とみなすんだ」

須川「そりやキツいな」

玲「確かに不純異性交友には厳しいですが、不純同姓交友は認めていますよ」

零「はい優子。トリップするな」

優子「まだしてないわよー」

愛子「まだって、するつもりだったんだ」

零「質問なんですか？秀吉は同姓だからありなんですか？」

玲「あります」

零「ありだそうだ。良かつたな秀吉」

秀吉「べ、別に儂は」

姫路・島田「木下。ちょっとあしきで話しまじょつか（じょつか）？」

零「潤に霧島。そここの2人を止めといてくれ」

潤・霧島「（……）分かつた」

七迷「あ！」こですね。一瞬にしてこんな状況になるなんて

土屋「…………カオス」

零「俺はこの状況好きだぞ」

玲「姫路さん、島田さん。アキくんのアルバムでも見て落ち着いてください。木下くんも見ますか？」

姫路・島田・秀吉「「はーーー。」「

玲さんよく分かってるな。

今のが何で完成させるか。

玲「これが3歳の時のお風呂に入っている写真です」

姫路「泣こちやつてします」

島田「ちひりやーーー」

平和だな。

玲「これが幼稚園の時のお風呂の写真です」

姫路「ふふつ、お風呂でねちやつてます」

秀吉「面影があるの？」

そろそろかっこいい味付けを

玲「これが小学校の時のお風呂の写真です」

秀吉「可愛いのじや」

島田「葉月みたい」

風呂の写真が多いみたいだな。

玲「そしてこれが昨日のお風呂の写真です」

姫路・島田・秀吉「「「」」」

明久「ちょっと待つた——————いつ撮ったのー?あのナース服のくだりの時か!」

土屋「……ナース服? 詳しく聞かせてくれ

玲「はい。アキくんとお医者さんじつこをするのに使おうと思つたんです。ですが皆さんが来たのでまた後日」

明久「なんか変な方向に話が向かつてゐる!」

雄一「おい明久。ちゃんと火加減見とけよ」

明久「そんな」とより今たいへ(ガスッ)んな」と……

零「パエリアの火加減がそんなこと、つかり手が滑つて包丁が飛んでちやつたじやん」

明久「（ガクガク）すぐにパエリアの元に戻ります」

零「よろしい」

この後は男子全員（秀吉は除く）真剣に料理したから早く終わったよ！

みんな震えてたぐい寒かったのかな？

明久「さて、出来たよ」

姫路「美味しそうですね（ぱつ）」

島田「ええ。本当に美味しい（ぱつ）」

秀吉「儂も頑張らなければ（ぱつ）」

明久「見たんだね！？あの後写真を見たんだね！？」

玲「全くアキくんは怒りっぽいですね。カルシウム不足だからですよ」

明久「間違いなく原因は姉さんだからね！」

玲「皆さん。貝の殻はこの皿に入れてください」

明久「なんで僕の皿に！？貝の殻でカルシウムを摂取する人はいいなあから…！」

玲「皆さん。いただきましょ！」

明久「姉さんは僕のことが嫌いなの？」

玲「心外ですね。姉さんがアキくんのことを嫌うわけないじゃありませんか」

明久「本当？」

玲「寧ろその逆です」

明久「逆って？」

玲「姉さんはアキくんのことが大好きですよ」

明久「姉さん」

玲「一人の異性として」

明久「最後の一言は冗談だよねー？それなら嫌つてくれた方がマシだ！！」

玲「日本の諺にあるじゃないですか『バカな子ほど可愛い』と」

雄二「諦める。」の人ほど前のことを愛してる人はいない

姫路「私も明久くんのことを世界一バカだと思つてます！」

島田「私もよー！」

秀吉「儂もじや！」

零「みんな止めて！明久のライフもうつよー。」

玲「話も終わりましたしいただきましょう」

明久「まだ終わってないながらー依然として僕の皿なは貝殻しかな
いからね！」

明久以外『いただきます』

明久「いじめだ！実の姉と友人にいじめられてる！」

秀吉「冗談じや。儂のを分けてやる」

上手い！ツンデレ戦法！

明久「ありがとう秀吉！ー！」

明久は秀吉に抱きつく。

秀吉「や、止めるのじや明久！」

姫路と島田が明久に制裁を仕掛けない？

零「どうしたんだお前ら？いつもならお仕置きとか言つて折檻に走
るのに」

姫路「そうですね」

島田「そうね」

七迷「食卓で普通に折檻なんて言葉が出る」とに誰も疑問に思わないのでしょうか?」

明久「姫路さんと美波は元気無いね。もしかして口に合わなかつた?」

島田「美味しいんだけどね」

優子「美味しいのが問題なのよ」

愛子「ハードル高いな」

姫路「もっとオリジナリティを加えないと」

恐ろしい発言が聞こえたけどもっとあの料理から逃げる手段を用意しなければ。

玲「確かに美味しいんですけど、いつもと違う材料を買つてきたのに同じ味になつてしまつて残念です」

明久「偉そうに。姉さんは料理が全然ダメなのに」

玲「アキくん。さつき言ったこと以外にも成長したのですよ」

明久「例えば?」

玲「Eカップになりました」

明久「あんたには恥じら」という物はないのか!」

玲「ヒーリングで話題。つかの愚弟の学園生活はどう感じですが
？特に成績や異性関係など」

異性関係を強調してゐるな。

姫路「頑張つてゐると思いますよ。成績も上がりましたし」

島田「そうね。たまにドキッと思つ時があるけど」上手く隠してゐる
な。

玲「そうですか。それでは異性関係は？」

姫路「えつと分かりません。異性関係は？」

島田「私も分かりません。異性関係は」

また異性関係を強調してゐるな。

秀吉「異性関係のう」

秀吉も気になるとこりうか。

玲「木下くんは何か知つてゐるのですか？」

秀吉「何かと言わればのう」

明久「秀吉。あーん」

秀吉「うむ。あーんじゅ」

わざわざ もわざわざ

明久頑張るねえ。

玲「それで異性関係に」

明久「秀吉。あーん」

秀吉「あーんじや」

わざわざ もわざわざ

これずっと続ける気かよ。

玲「秀吉くん。さっきの話ですが」

明久「秀吉。あーん」

秀吉「あーんじや」

わざわざ もわざわざ

そろそろ無理があるな。

玲「秀吉く」

明久「秀吉。あーん」

秀吉「あーんじや」

「」やゅ「」やゅ

いい音だ。人の肘が外される音は。

明久「ふぬああ！肘が曲がつて次世代の人体に！」

零「いや。そんな次世代が来たら俺は人間を止める」

玲「邪魔しないでくださいアキくん。酷いことになつたりやいますよ」

明久「もう酷いことになつてるからねー！」

玲「それでどうなんですか？」

秀吉「むづ。そづじやな。本人が言わないなら儂が言つわけにいかないじやう」

明久が良かつた一つて顔してゐる。

玲「もし話してくれたら秀吉くんのこと応援します」

秀吉「少し前、姫路と島田と一緒に映画と喫茶店に行つていたのじや」

明久「なんで――――――――――――――――――」

玲「そうですか。1500点減点です」

秀吉は明久を売つた。

玲「そのことにつけは後でアキくんにボッキリ聞く」とこしまし
よつ」「

明久「『ボッキリ』って何！？そこの『じつくり』か『ゆづくり』
でしょ！」

零「明久。経験からの忠告だ。あの田は殺る田だ」

明久「明日は魚にしようかな」

玲「全くアキくんは食いしん坊ですね」

零「ただの無駄な努力ですよ」

玲「あつ、言い忘れてましたけど明日から夕食はいりませんよ」

明久「そうなの？」

玲「ええ。こっちでの仕事を受けるかどうか検討するために話をし
ますので。土曜日が日曜日辺りまでいりません」

明久「そうなんだ」

玲「嬉しそうですね」

明久「そんなことないよ。せっかく日本に帰ってきたのに残念だな」

玲「英語で」

明久「Happy」

明久「痛つ！食事中にビンタは止めてよー。」

零「明久。喜ぶのはいいが、日本での仕事を受けたとしたらお前の成績に関係なくこっちに住むだろ」

明久「あつー！」

少し考えろよ。

全員『さあどうぞ』としました

明久「さて何する？」

零「お前はバカか？悪いバカだったな。そんなバカに教えてあげよう。今日は勉強のために集まつたんだろ」

明久「ぐつ、言い返せない」

玲「皆さんお勉強するんですか？」

零「まあ、そのために集まりましたから」

玲「それではこれをお使いください。アキくんのベッドの下から出てきた保険の参考書です」

明久「僕のトップシークレットがーー！」

姫路「それじゃあ使わせてもらいますね」

島田「後学のためにも」

秀吉「拝見するのじゃ」

明久「3人とも姉さんのセクハラに付き合わなくていいからね！！」

玲「どうやらアキくんは胸が大きい方、ポニー・テールの方、オカツバの方を重点的に勉強してるみたいですね」

明久「僕の性癖がバラされていく！」

姫路「ポニー・テールですか」

島田「あら瑞希。何しようとしてるの？」

姫路「勉強のために髪が邪魔にならないように後ろでまとめようと思いまして」

島田「じゃあお団子にしてあげるわ」

姫路「酷いです美波ちゃん」

須川「どうしたんだムツツリーーー？」

土屋「…………あと1997冊は？」

明久「信じてたのムツツリーーー？」

零「ふざけるのは止めていい加減勉強するぞ」

玲「なら私が勉強を見てあげましょうか?」

零「玲さんが?」

玲「はい。日本ではなくアメリカのボストンの大学ですが教育過程は終えていますので力になれると思います」

雄二「ボストンってまさかハーバード大学じゃ」

玲「ええ。よく存知で」

吉井以外『ええ――――』

明久「さつきまでの生活見るとそう思えないでしょ」

零「確かに残りカス」

明久「今、普通に罵倒しだら! そんな哀れみの目で見るな!」

雄二「バカと天才は紙一重つて奴か」

霧島「……雄二。随分落ち着いている」

雄二「だつてバカと天才は紙一重みたいな奴がそこにもう一人いるだろ」

俺を指す。

零以外『ああ――』

零「納得するな！」

雄一「何はともあれ教えてもらおうぜ。本場仕込みの英語も聞ける
と思うし」

玲「分かりました。では英語辺りから始めましょう」

結構充実した勉強時間になつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9813n/>

バカとカオスと原作ブレイク

2011年11月1日06時56分発行